氣分を感じて、學生の示威運動に參加せよといふアッピールを含むところの呼びかけを以て益〻屢〻彼等に向つた。一九〇一―一九〇二年の示威運動においては益〻屢〻我々は勞働者を見た。それのみならず、若干の示威運動においては勞働者が壓倒的な大衆を成した。

政治的示威運動――これは、勞働者の大衆的同盟罷業と並んで、一層高い段階への革命の移行を表示するところの、革命運動の新しい形態である。一九〇二年には示威運動は排他的に大衆的性質を帶びた。一九〇一年五月二十日オブーホフ工場の勞働者の武裝的進出、有名な『オブーホフ防禦戰』が行はれた、――ペテルブルグの勞働者は戰の洗禮を受けたのである。四月十八日ドン河畔ロストフにおいては軍隊および警察との血腥い衝突を伴つたところの大衆的勞働者示威運動が行はれた。同じやうな示威運動はバクーや、ヴィルナや、サラトフや、ソルモヴォにおいても行はれた。政府は示威運動者の毆打、流刑および懲役だけに止らなかつた。ヴィルナ縣知事フォン・ヴァリーの命令によつて三十人の示威運動者が拷問された。これに對する答として勞働者ゲー・レッケルトはフォン・ヴァリーを射殺した。秋（十一月四日から十一日まで）ドン河畔ロストフにおいて鐵道從業員の同盟罷業が行はれた。公開の大衆的集會は數萬人の勞働者を引きつけた。ロシア社會民主勞働者黨ドン委員會が同盟罷業を指導した。一九〇三年六月および七月には南部の最大の工業中心地における同盟罷業は二十萬人以上を包括した。七月には同盟罷業がバクーの石油工業地において、次いでチフリス、バツム、キエフ、エカテリノスラフ、ケルチ、エリサヴェトグラードにおいて行はれた。勞働者のこれらの進出は、屢〻軍隊の血腥い壓迫を以て終り、そしてこの軍隊は『一揆を起す』勞働者と益〻屢〻衝突した。これらの同盟罷業と示威運動とは、勿論、何よりも先づ、一方では、益〻成長する產業恐慌と排他的に無權利な勞働者の地位とによつて喚び起された勞働者階級の苦痛の結果であり、そして他方では、プロレタリアートの階級意識の成長の結果であつた。

しかし恐慌はたゞ勞働者階級を壓迫したのみではない、――恐慌は地主のカバーラのために苦しんだ農民經濟を更に一層大なる程度に壓迫した。恐慌は他の社會層の狀態の上にもまた反映された。

この大衆運動を背景にして、ナロードニキの影響下にあつたインテリゲンチヤの一部には、威嚇によつて、テロルによつて、情勢の變化を達成しようとする試みが發生した。一九〇一年二月學生カルポヴィチは文部大臣ボゴレポフを射殺した。ラゴフスキーは宗務院檢事總長ポベドノスツェフの謀殺未遂を組織した。一九〇二年二月イェ・アラルトはモスクワにおいてトレポフを射

殺した。一九〇二年四月二日ヴァレリヤン・バルマシェフは内務大臣シピャギンを暗殺した。同時に農民運動が廣汎に發展し、プロレタリアートの同盟者の鬪爭舞臺への進出を表示した。

一九〇五年の革命の前夜における農民運動

ロシアは二十世紀の初め國外への農產物の輸出において非常に大なる地位を占めた。卽ち穀物の輸出は記錄的な數字——八百萬噸以上（約五億プード）に達した。だから地主は殆ど到るところにおいて小作料を引き上げ、そして少しの土地を持ちまた土地を持たない農民層は更に大なるカバーラに陷つた。產業恐慌は、工場における勞働者の數を減らすことによつて、都市における手間稼ぎによつて生活したところの、少しの土地を持ちまた土地を持たない農民の地位を惡化した。地主は農民所有地の間に挿まつた自己の切取地および楔狀地を農民をカバーラ化す手段として特に利用した。これらの切取地や楔狀地はすべての方面から農民所有地を壓迫した。地主は自己の土地を取圍んだので、屢〻農民は家畜の蹂躙に對して巨大な罰金を支拂はなければならなかつた。時々水飼場さへも地主によつて農民から遮斷された。農民の土地の缺乏を利用して、地主は彼等を雇役にこき使ひ、極めて不利な條件で農民に土地を利用させた。地主が農民の無容赦な搾取のために國家權力のあらゆる機構、あらゆる機關を——警察、裁判所、カザック部隊および敎會を利用したことは、自明である。地主の利益を保護するために、村の巡査と看視兵とを有する地方長官が設けられた。

勞働者階級の黨の前にはこれらの情勢と關聯して次の活動が發生した——農村における半農奴制度を廢絕し且つそれによつて農村の生產力の發展および階級鬪爭の一層强力な發展のための道を淨めること、これである。この部分における黨綱領は次の如く定式化された。卽ち黨によつて提起された方策は『重い抑壓となつて直接農民の上にかゝつてゐる農奴制度の遺物の排除のためおよび農村における階級鬪爭の自由な發展のため』といふことに歸着した。農村における半農奴制度および農奴制擁護者＝地主の權力は農民運動の根本原因であつた。農民の大衆的な土地喪失はこの運動を强化した。これには飢餓が結合した。

一九〇〇年以來その後廣汎に發展した農民の革命運動が始まつた。一九〇五年の革命前この農民の進出は年別に次の如く配分されてゐる——

地方	一九〇〇年	一九〇一年	一九〇二年	一九〇三年	一九〇四年	一九〇五年
黑土地帶	四四	二八	三〇一	一二三	七五	五七一

非黑土地帶	四	二二	三九	一八	九九
歐露全體	四八	五〇	三四〇	一四一	六七〇

勿論これは決して農民の進出の完全な總計ではない。何故なら新聞や記錄においてはたゞ最も重要なものだけが報道されたからである。我々は一九〇二年に最も大なる運動を見る。この後それは少しく衰微してゐる。一九〇五年にはそれは新しい巨大な力を以て爆發してゐる。農民運動は恰も勞働者運動の後を追うてゐるかの如くであることを我々は見るのである（その後陸海軍において運動が始まつた時には、農民運動もまたこれと關聯して強化された）。都市における產業恐慌がたゞ零落せる農民層の都市への出稼を壓迫したのみならず、失業せる勞働者農民大衆を逆に農村へ追ひやり、それによつて運動を强化したことは、自明だ。しかし當時農民は、レーニンが正しく指摘したやうに、『資本の抑壓よりも、寧ろ地主および農奴制の遺物の抑壓のために』苦しんだのである。だから、地主經營が最も强力に發展してゐた黑土地帶においては、運動が特に强力であつた。一九〇二年ポルタワ縣およびハリコフ縣において、地主の領地の破壞を伴つたことろの大衆的な農民の進出が行はれた。この波は農民層全體における革命的氣分の發展にとつて非常に大なる意義を持つてゐた。『ちやが見さつしやい、ポルタワでお前さん方に何が起つたかを』と農民はヘルソン縣の地主を迫害する時に地主を脅かした。農民層の運動は領地の放火のうちに、時には全地主所有地の農民の間における正式の分配を伴ふところの地主所有地の占領のうちに、草刈場や牧場の占領のうちに表現された。たゞ勞働者のみならず、地主所有地を小作し又は地主の許において雇役に從事した農民の農業罷業が行はれた。この罷業は、多くの場合出來上つた收穫物の奪取、地主の倉庫や納屋の破壞、地主の木材の伐採、地主および彼等の使用人の毆打および殺害となつた。地主の領地の破壞が特に廣く適用された。農民が鬪爭した諸條件の下においては、これらの破壞は彼等にとつて事實上武裝暴動を意味するものであり、それはあらゆる殘酷さを以て軍隊によつて鎭壓された。運動はジョルジア、沿バルト海地方およびポーランドにおいて特に强力な規模を帶びた。農民は地主に對してのみならず、『叛亂者を狩り盡す』ために政府を援助した僧侶に對してもまた進出した。懺悔の時に僧侶は信者の中で誰が革命運動に從事してゐるかを認知し、かかる農民を警察、スパイの手に引渡し且つ告發した——そしてかかる場合は非常に多かつた。僧侶に對する特に强い運動が沿バルト海地方（今日のラトヴィアおよびエストニア）に存在し、そこではラトヴィア社會民主主義者は農民を組織することに成功し、謂ゆる『赤い日曜日』を組織し、敎會を集會や示威運動のために利用した。そこでは眞の反敎會運動が行はれ

た。

貧農は農村のクラークに對して闘爭した。しかしすべての農民層は地主を憎んでゐたので、地主に對して往々統一農民戰線が作られた。だからレーニンは、先づ第一に我々が地主階級の利益に對する全農民層の利益のこの對立を正に計算に入れなければならないことを證明したのである。農村における我々の活動において先づ第一にレーニンは、農奴制の遺物に對する闘爭の任務を、『ロシア國家のすべての秩序の中から身分上の不平等および數千萬の「平民」を卑しめる精神』を根こそぎにする任務を提起したのである。

けれども我々ボルシェヴィキは、プロレタリアートの特殊な階級的利益のことを決して忘れなかつた。レーニンは、プロレタリアートと農民層との革命的＝民主主義的獨裁を固執しつつ、次のことを特に主張した。『プロレタリアートと農民層との革命的＝民主主義的獨裁は、この世におけるすべてのものと同樣に、過去および未來を持つてゐる。その過去は專制政治、農奴制、君主制、特權である。この過去に對する闘爭において、反革命に對する闘爭においては、プロレタリアートと農民との「意思の統一」が可能だ、何故なら利益の統一があるからだ。

『その未來は、私有財産に對する闘爭、經營主に對する賃銀勞働者の闘爭、社會主義のための闘

爭である……そこに我々の前には專制政治から共和國への道ではなくて、小ブルジョア的民主共和國から社會主義への道がある*』。

* レーニン、第八卷、八四—八五頁。

だからレーニンは專制ロシアにおける二つの戰爭について述べたのである。一つの戰爭は農奴制度の胎内におけるものである。こゝでは——ブルジョア民主主義革命の途上において——我々は地主に對して全農民層と同盟して進む。他の戰爭は、生れつゝある資本主義社會の胎内における賃銀勞働と資本との戰爭である。それは社會主義への移行を要求する。この戰爭においてもまたプロレタリアートは貧農層と、農村の貧者と同盟して進むことができる。

公然の闘爭において農民は、ツァール專制政治の國家權力が地主を防護してゐることを理解することを勿論學んだ。このことから警察的權力機構に對する憎惡が成長した。けれども多くの農民は、ツァールが彼等の味方だ、とやはり引續き考へてゐた。大抵の場合運動には村の貧者が參加した、そしてこれらの村の貧者の中では正に貧農が最も活潑に參加した。これは中農層や富裕な農民が闘爭に參加しなかつたことを意味しない。富裕な農民層が『明日』を考へ、地主の後には貧農が彼等に對して起ち上ることを理解して、この闘爭において極めて不安定であつたことは

自明である。勞働者階級に次いで農民層は革命の主要な推進力の一つであり、一九〇五―一九〇七年の第一革命における闘爭の結果は著しい程度に彼等に依存してゐた。

農村に黨の指導が存在したか？　當時我黨はまだ農村において甚だ貧弱に組織された連絡しか持つてゐなかつた。けれども農村へもまた我々の祕密文書が入つて行き、『イスクラ』が入つて行つた。農民層に向けられた當時の最良書は、レーニンの著書『貧農に與ふ』であつて、その中でレーニンは農民が來るべき革命において如何なる態度を取らなければならないかを説明した。すでにこの著作においてレーニンは、農民が土地獲得闘爭において唯一の確實な同盟者――プロレタリアートを有するいふ思想を展開した。すでに當時レーニンは來るべき革命におけるプロレタリアートと農民層との革命的同盟の必要に關する思想を展開した。すでに當時彼は、勞働者階級の組織と結合された農村プロレタリアートおよび半プロレタリアートの特殊な組織の設立の必要に關する思想を展開した。すでに當時彼は中農層をもまた味方に引きつけることがプロレタリアートに必要だといふ思想を展開した。そしてすでに當時レーニンはクラーク層や、農村ブルジョアジーに對する闘爭の問題を提起した。レーニンは、全農民と共にプロレタリアートが地主およびツァールに對して闘爭を行ひ、農村の貧者と共に、都市および農村のブルジアジーに對して闘爭を行ふであらうと述べた。

農民の運動は信じ難いほどの殘酷さを以て鎭壓された――笞打ち、銃殺、懲罰隊、ドン、クーバンおよびテレクから來たイングシュ人、チェルケス人およびオセティン人またはカザック人の特殊部隊（ロシア語も知らないで、コーカサスから送られ、農民生活から隔離されてをり、地主の贈物によつて墮落せしめられた人々は、農民に對して無慈悲に闘爭するであらう、と期待して、地主が取つておいたもの）。農民は往々斬殺され、尖端に彈丸のついた特殊な革鞭で百宛笞打たれた。一九〇二年秋には九百六十人の農民が裁判にかけられたが、その中百二十三人は無罪、殘りは有罪であつた。この時以來監獄、徒刑場、流刑地は一杯になつた。最初はただ平民だけが、稀に貴族が監獄へ行つた。その後益〻屢〻學生が入り始めたが、すでに稀に勞働者もまた現はれた。次いで勞働者の大衆的な逮捕が始まつた。農民運動の發展の時代には監獄は、地主に對する闘爭に進出した農村革命家＝農民で一杯になつた。軍際はこの頃まで依然としてツァールに忠實であつた。

『ロシア帝國』の邊疆の中小都市ブルジョアジーおよびインテリゲンチャはその上にツァーリズムとの勘定を持つてゐた。ユダヤ人は『ユダヤ人の居住』區域に關する法律や、學童のための『比

率』およびその他の形の民族的抑壓および無法のために苦しんでゐた。ウクライナ人やポーランド人は自己の母國語を自由に使用することができなかつた。コーカサスにおいてはツァール政府の民族抑壓的な、謂ゆるロシア化政策が諸民族を互ひに嗾しかける形態を取つた。

けれどもツァール政府は、抑壓的民族政策を實行しつゝ、民族ブルジョアジーの上層を自己の味方に引きつけた。かくて勤勞ユダヤ人にとつては、小ブルジョアジーにとつては、大ユダヤ人ブルジョアジーには關係のない數千のあらゆる制限が存在した。

ポーランド、ラトヴィア、コーカサスの中小ブルジョアジーはツァーリズムに對してかなり敵意を有し、民族主義的組織（民族的民主主義者——ポーランドにおける『エンデキ』、アルメニアにおけるダシュナキ等々）を支持した。然るに民族地方における被抑壓大衆は、プロレタリアートをば民族解放のために徹底的闘爭を行ひうる勢力と見て、勞働者黨を支持した。コーカサスの西部地方においてはプロレタリアートが被抑壓民族の廣汎な大衆を味方にした。

日露戰爭とボルシェヴィキの戰術

一九〇四年日露戰爭が始まり、それはロシアの軍隊の壞滅、旅順口の陷落およびロシアの艦隊の完全な破滅を以て終つた。この戰爭の原因はどうであつたか？　ロシアのブルジョアジーが新しい土地の占領によつて自己の富および自己の權力を擴大しやうと志したことは、何等の疑ひもない。クロパトキン將軍は、ブルジョアジーのこの思ひつきが成功したら、滿洲に設立されなければならなかつたところの、ロシアの州『黃色ロシア』の設立の特殊な計畫をさへ作成した。

一八九八年ロシア政府は、支那の困難な狀態と日本の不十分な勢力とを利用して、支那政府をして要塞旅順口を含む遼東半島をロシアへ讓渡させた。極東におけるこの占領は、アジア大陸に據點を持つために、自ら滿洲において勢力を得ようと志した日本に對してロシアを敵對的關係に立たしめた。遼東半島を占領した後、ツァール政府は朝鮮方面に前進を開始し、鴨綠江河畔において森林利權を獲得した。日本はこの戰爭において準備されず且つ勝利する能力のない敵を持つであらうことを考慮して、情勢を利用し且つロシアの軍隊および艦隊に多くの極めて恐るべき敗北を蒙らせた。これに加ふるに西歐帝國主義は東洋におけるツァーリズムの勢力を弱めることに關心を持つてゐた。

裝備の惡いロシアの軍隊は日本人の攻擊に耐へきれず、退却の時には大衆的に滅亡した。そして彈丸が不足してゐた時に、兵士は嘲弄されてゐるかの如く聖像を積んだ多くの貨車を受取つた

り、負傷者の輸送の代りに特別列車は司令部の財産――ステッセル提督やシュタケリベルグ將軍の財産を運搬した。

この戰爭に對して種々の黨は如何なる態度を取つたか？　當時メンシェヴィキの『イスクラ』は『是が非でも平和』を說敎した。メンシェヴィクのダンは當時すでに防衞的主戰論の是認にまで言及した。だがレーニンとボルシェヴィキとはすでに當時『敗北主義者』であつた。彼等は、『ロシアの自由と社會主義のためのロシア・プロレタリアートの鬪爭とは專制政治の軍事的敗北に非常に強く依存してゐる』と考へた。

日露戰爭はツァールの支配に不滿なすべての人口層における革命運動の强化を促進した。最初愛國主義的氣分を煽動することに努めた自由主義者でさへ、ツァールの專制政治が戰爭の困難を處理する能力が全くないことを示したところの、極東における不成功と殲滅とに影響されて、ツァーリズムに對して若干の『反對』を表はし始めた。

メンシェヴィキのゼムストヴォ運動計畫とボルシェヴィキによるその批判

すべてこれらのことはただ先づ第一にインテリゲンチャ、學生層の氣分において反映されたのみならず、プルジョアジーの一部分をも目覺めさせて、社會秩序の變化について考へ、革命運動を鎭めうる手段を見出し、大なる成功を以て或る種の憲法を獲得し且つブルジョア國家の幸福を作り出す可能性を與へるやうな、勞働者、農民および學生層の運動への讓步を見出させた。勞働者および農民の運動の發展と竝んで謂ゆるゼムストヴォ議員の自由主義的運動もまた發展したことは、これによつて說明される。ピョートル・ストルーヴェの編輯の下に雜誌『オスヴォボジェーニエ』を發行した『オスヴォボジェーニエ』グループが組織された。一九〇四年には專制政治を批判する自由主義新聞『ナーシャ・ジズニ』が公然發行され始めた。一九〇四年十一月には自由主義者大會が開かれ、そこでは一層『左』翼の支持者が勝利を占めた。

當時自由主義者の活動はどの點にあつたか？　次の點にあつた、卽ち彼等は宴會を開き、そこにおいて自由に關する大演說がなされ、『これ以上こんな生活はできない』といつたやうな大袈裟な言葉が發せられ、搾取者の經濟的支配に觸れることなしに、ブルジョア國家のヨリ大なる發展の可能性を保證するやうな民主主義的自由の要求が提起されたのである。

極東における敗北と關聯して、かくして專制政治に對する鬪爭の全民主主義的戰線の外觀が作

り出された。この戰線における勞働者運動のための地位を規定すること、社會民主黨が如何なる現實的行爲へ勞働者を召集しなければならないか、ツァールに對して非プロレタリア層と共同の彼等の闘爭を如何に組織しなければならないか、といふことを指示しなければならなかつた。そしてそこには二つの戰術の差異が明白に現はれた。

メンシェヴィキは、自由主義者の集會、宴會およびゼムスドヴォ議員大會に出席し、勞働者階級は、もし自由主義者が民主主義的要求を以てツァールに請願を提出し續けることに同意するならば、自由主義者の運動を支持するであらう、といふ聲明を以てそこに進出すべきことを提議した。メンシェヴィキは勞働者大衆をして自由主義的ブルジョアジーの尻尾にくつつき、彼等を突き、而も脅かしたり、驚かしたりしないやうに突くことを餘儀なくさせた。メンシェヴィキのかゝる政策は何處から生じたか？　メンシェヴィキは問題をかう描き出した、來るべき革命はブルジョア革命である。從つてその主要推進力はブルジョアジーである、と。かくして、メンシェヴィキは勞働者階級をブルジョアジーとのブロック、同盟に結びつけようとした。

だがボルシェヴィキは？　レーニンは自由主義者に對するボルシェヴィキの方針を特に明瞭に規定した。ボルシェヴィキ黨は、勞働者階級がすべての闘爭的革命的勢力の先頭に立つことを志した。自由主義的ブルジョアジーとの同盟にではなくて、農民層との同盟にボルシェヴィキは呼び集へた。勞働者階級は自己の獨立的任務を持つてゐる、彼等は獨立の、そして最も革命的な勢力を代表する。今や彼等は何をなさなければならないか？　彼等はその大衆的な、公然の革命的闘爭によつて闘爭的革命的要素を自己に引きつけなければならぬ。我黨は勞働者を宴會にではなく、自由主義的論說のためにではなくて、――我黨は彼等を街上へ、示威運動へ、警察的支配に對する闘爭に召集した。レーニンは敎へた、この闘爭の展開は、プロレタリアートを搾取者に對する闘爭に、ブルジョアジーに對する闘爭、社會主義のための闘爭に移行せしめるものである。プロレタリアートは、直ちに社會主義革命に移行するために、ブルジョア民主主義革命の勝利を利用するのである、と。

一九〇五年一月九日『血の日曜日』

『警察社會主義』とズバトフ主義に關する章によつて讀者はすでに、諸都市に『警察社會主義』の組織を設立しようとした政府の企圖について知つてゐる。一九〇四年ペテルブルグにおいて政府は、保安課の手先、僧侶ゲオルギー・ガポンを通じて新たに一つのズバトフ的組織を設立した。

殆どペテルブルグの全區にガポンの組織『ロシア工場勞働者會』が設立された。ガポンと彼の近親者とは勞働者に、政府が常に勞働者を迎へ旦つ彼等のすべての公正な要求において彼等を援助する準備があることを說得した。この時代に勞働者の狀態は非常に困難になつた。戰爭は物價騰貴を喚び起し、それは（常にかういふ場合におけるが如く）勞働者に最も激しい打擊を與へた。そこで勞働者階級において累積された多量の可燃性材料が燃上つて、大衆的プロレタリア運動および農民運動に出發點を與へるためには、僅かの動機で十分であつた。問題は四人のガポン派の勞働者の工場からの解雇から始まつた。プティロフ工場の管理部や、市長および大臣ウィッテ伯への請願によつて問題を片附けようとしたガポンおよびガポン派のすべての企圖は不成功に終つた。ガポンの『ロシア工場勞働者會』員の解雇された勞働者は、復職を許されなかつた。一月三日プティロフ工場において同盟罷業が始まつた。それと同時に他の工場においてもまた同盟罷業が起つた——例へばシャウ工場において。解雇された勞働者の復職の要求を以て始まつたプティロフ工場の同盟罷業は、急速に發展した。次々とペテルブルグの全工場がそれに結合した。ガポンはこの大衆を指導しなければならなかつたが、この運動は保安課によつて素描された岸および埒を自然と逸脫してしまつた。すでにこれより以前ガポンに接近してゐた人々の間にツァールに請願書を提出しようといふ思想が發生してゐた。ガポンはこの時正にこの計畫、卽ち一月九日全人民、全勞働者階級が集合し、そして平和的な行列をなして、敎會の旗とツァールの肖像とを携へて冬宮のツァールの許へ行き、彼に請願書を提出しよう、といふ計畫を以て進出した。この請願書の中に我々は就中次のことを讀むのである——

『私達、ペテルブルグ市の勞働者、私達の妻、子供、援けなき老父母は、正義と保護とを求めるために、陛下のところへ參りました。私達は貧しき者であります。私達は抑壓され、力不相應の仕事を課せられ、私達は侮辱され、私達においては人格が認められて居りません……私達は實に忍耐致しました、しかし私達は愈〻益〻貧困、無法、無敎育の深淵に押しやられるばかりです。專制政治と恣意とが私達を窒息させてゐます……忍耐の限度が到來致しました。耐へられない苦痛の繼續よりも死の方がよい、といふ恐ろしい瞬間が私達のために到來致しました……』と。

勞働者階級を味方に引きつけるために、ガポン派は、政治的特赦、政治的自由、人民に對する大臣の責任、法律の前における萬人の平等、敎會と國家との分離、戰爭の中止、八時間勞働日その他勞働者の綱領の要求と全く一致するところの多くの要求の請願に起ち上らなければならなかつたのである。

數日間――一月六、七、八日――この請願書は大衆的な勞働者の集會において朗讀され、そこには社會民主主義者の辯士もまた進出した。我々ボルシェヴィキもまた、當時これらの集會に進出した。我々は勞働者に、請願書が忠良な、農奴的な聲明と共に、我々の綱領に書かれた要求を含んでゐることを指示した。これは、勞働者階級が自己の要求を決定しなければならない時には、彼等はそれを勞働者黨の綱領において見出すことを示してゐる。我々は勞働者に警戒させ、我々は彼等に、自由はツァールへの請願によつて獲得されるものではない、自由は奪取さるべきものである、と述べた。我々は勞働者に、彼等は銃殺されるであらう、と豫言した。しかし我々は冬宮への行列を阻止することができなかつた。

だから一月九日には、我々は勞働者と共に街上を進み、彼等と共に軍隊との最初の衝突に參加し、可能であつたところでは、バリケードを築き、可能であつたところでは、軍隊に抵抗した。一千人以上の勞働者がこの日殺され、更に多くの者が負傷した。數萬人の勞働者がこの日に、謂ゆる『警察社會主義』が勞働者階級にとつて有害であることを理解した。

一月九日は『血の日曜日』と呼ばれてゐる。それは我國の全勞働者階級および數百萬の農民層にとつて眞に『血の日曜日』であつて、彼等はこの日およびこれに續いた數日間に、ツァールおよびツァール政府が何人の利益を擁護するか、彼等が何人の味方であるかをハッキリと理解した。ウラヂミール・ロマノフ大公が軍隊の行動を處理し、そして驚愕したツァールはペテルブルグに現はれることを恐れたところの、一月九、十、十一日兵士、カザック および警察が子供さへも容赦しないで、勞働者を屠殺したところの、この數日間に、――勤勞者大衆は革命的大衆運動に起ち上つた。抗議の同盟罷業は熱い波となつて全國を席卷した。勞働者が同盟罷業せず且つ政治的要求を提出しなかつた都市は一つもなかつた。

この瞬間から我黨の影響は強化され、それは大衆的勞働者運動の先頭に立つに至つた。數萬の勞働者がツァール政府によつて農村へ追放され、そこの農村において煽動者となり、農民大衆を革命的鬪爭に高めた。動搖は兵士大衆の中へも、一月九日およびその後人民を射擊し、そして野獸化し且つ驚愕した支配者階級の任務を遂行しなければならなかつた灰色の外套を着た勞働者および農民大衆の中へも忍びこんだ。一月九日は他の國々の勞働者にとつてもまた巨大な意義を持つてゐた。それは、ロシア革命がすでに十分な力を持つてゐることを示した。一月九日以後引續いた出來事は、他の國々の勞働者大衆のうちに革命的氣分を高めた。

ロシア社會民主勞働者黨第三回大會の召集。多數派委員會局

ロシア社會民主勞働黨においては、我々がすでに見たやうに、新しい黨大會が是が非でも必要となつたやうな情勢が作られた。第二回大會の決定に服從しなかつたメンシェヴィキは、事實上黨中央機關をボイコットしてゐた。今や第二回大會の後マルトフは、第二回大會の決議をサボタージュして、『イスクラ』編輯委員會員となることを拒絶した。メンシェヴィキは『國外社會民主主義者同盟』會議を召集し、その席上彼等は中央委員會および大會の決議に對して公然と敵對的立場を取つた。レーニンは中央機關紙および黨評議會からの自己の脱會について聲明し、その聲明において、彼が『現在マルトフ派への讓歩と六人の補缺選擧とは黨の統一のために有利である』といふプレハーノフの意見に同意しないことを指示した。プレハーノフはたゞ一人となり、中央機關紙に三人のメンシェヴィキを補缺選擧した。更にメンシェヴィキはプレハーノフの援助によつて黨評議會をも占領した。若干の中央委員の妥協的氣分のために、ボルシェヴィキ中央委員會は、レーニンの敎へにも拘らず、動搖的立場を取つた。中央委員はメンシェヴィキを補缺選擧した。

レーニンは妥協派を中央委員會内におけるメンシェヴィキの手先として暴露した。この當時レーニンは國外において殆ど全く孤立してゐた、ロシアにおいては大多數の組織は彼の味方であつたけれども。『ゼムストヴォ運動』への勞働者の參加に關するメンシェヴィキの計畫が現はれた時、レーニンは、メンシェヴィキが勞働者黨の役割をブルジョアジーの尻尾の役割に歸せしめようと欲してゐること、ブルジョアジーがプロレタリアートの利益を『擁護する』、といふことにメンシェヴィキが全く同意してゐることを、勞働者に示すために、あらゆる可能な努力をした。レーニンは激烈な論文『「ゼムストヴォ運動」と「イスクラ」の計畫』を以て進出し、この論文の中で彼はメンシェヴィキの全政策を批判し、トロツキーの特殊な役割を指摘し、そしてレーニンは彼を諷刺家シチェドリンの主人公の一人の名によつて――彼の空語の故に『編輯されたバラライキン』と稱した。

これに次いでボルシェヴィキによつて、中央委員會とは別箇に、大會の召集の方向への決定的組織的歩みがなされた。國外においては『二十二人のボルシェヴィキ』の協議會が行はれ、次いでロシアにおいては三つの地方會議が開かれ、それらにおいて『多數派委員會局』が選擧された。

三つのボルシェヴィキ地方會議が第三回黨大會を召集することを委任したところの、この多數派委員會局（ベー・カー・ベー）は、最も精力的な同志によつて構成されてゐた。多數派委員會局は

ボルシェヴィキ委員會の結成について、分裂の歴史や、切迫した革命によつて提起されたすべての極めて重要な問題に對するレーニンの見解を正しく知ることについて、大なる活動をなした。この三つの會議、卽ち（一）南部會議（オデッサ、ニコラエフおよびエカテリノスラフ）、（二）コーカサス會議（四委員會）、（三）北部會議（ペテルブルグ、モスクワ、トヴェル、リガおよび『北部委員會』――ヤロスラフル、コストロマ、ニジニノヴゴロド、ウラヂミールのグループを有するもの）――は、我黨の先進的勞働者の最良の幹部を包括したところの地方を代表した。この支持に立脚しつゝ、多數派委員會局は更に大會の只集まで實際にボルシェヴィキ黨の實踐的指導的中心となつた。多數派委員會局の代表者――リトヴィノフ、ゼムリャチカ、グセフ、リャドフその他は、委員會巡りや、實際的活動へのそれらの結合や、日露戰爭、ゼムストヴォ運動に對する統一的戰術の作成等について巨大な活動をした。

第三回黨大會のこの準備時代に、同志スターリンは、コーカサスにおいてボルシェヴィキ黨のための鬪爭において巨大な役割を演じた。四つのコーカサスの黨委員會はこの鬪爭のおかげでボルシェヴィキ大會に代表されたのである。

一九〇五年一月初めボルシェヴィキの週刊機關紙『フペリョード』が組織された。

レーニンは第三回大會の前夜においてもまた、メンシェヴィキとの分裂の必要を理解しなかつた若干のボルシェヴィキの妥協的氣分に對して決定的に鬪爭した。エス・グセフおよびアー・ボグダーノフ宛の手紙において、レーニンは一九〇五年二月十一日かう書いた、『何のために僞善をなし且つ隱れるのであるか？　……何といふ喜劇だ！　……或ひは我々は戰はんと欲する者の鐵の組織によつて、眞實に團結し、そしてこの小さな、だが鞏固な黨によつて新イスクラ派の混合的要素の脆い怪物を粉碎し、或ひは我々は自己の行動によつて、我々が輕蔑された形式主義者として破滅するのが當然であつたことを證明するであらう……我々は分裂を宣言した、我々は大會にフペリョード派を招待しよう、我々はフペリョード黨を組織したい、そして組織破壞者とのありとあらゆる關係を引裂き、直ちに引裂かう、――然るに人々は我々に忠誠について語り、「イスクラ」と「フペリョード」との合同大會が可能であるかの如き振りをする……そしてもし我々が自己の無益な道德的純潔を誇る乾き切つた、貧血のオールド・ミスの厭らしい實例を示したくないならば、我々には戰鬪と戰鬪的組織とが必要だ』と。

＊ レーニン、第七卷、一〇一―一〇二頁。

第三回大會は四月二十五日（十二日）ロンドンに召集された。この大會には五十六票の表決權

を有する二十六組織から二十八人の代議員が出席した、他方黨全體は七十五票の表決權を持つゐた。最初の純ボルシェヴィキ的大會は自己の會議をロンドンにおいて開催した。大會にはウォロネジ、オルロフ、クルスク、ポレスク、ペテルブルグ、リガ、サマラ、北部、北西部、トヴェル、ツーラ、ウラルの委員會が代表された。その外に大會には多數派委員會局およびボルシェヴィキの指導的機關紙『フペリョード』の編輯部が代表された。そこにはメンシェヴィキの掌中にあつた黨評議會と中央委員會とは代表されなかつた。この大會には九つのメンシェヴィキ委員會の代議員もまた派遣されたが、彼等は大會には現はれなかつた。この大會と同時にメンシェヴィキは會議を組織し、それにはペテルブルグ、リガ、モスクワ、サラトフ、ヴィルナ、スモレンスク、ニコラエフ、オデッサ、キエフ、ハリコフ、ドン河畔ロストフ、ドンバス、コーカサスおよびシベリアのメンシェヴィキ・グループおよび委員會の代議員が參加した。かくして一九〇五年、全面的に革命的事件が展開され始めた時、勞働者階級の闘爭方針、種々の戰術問題に對する彼等の態度、革命に贊成しました反對して闘爭に參加した種々の社會階級に對する彼等の態度を正確に決定しなければならなかつた時、我々は二つの黨を持ち、その各〻は諸問題を個々に審議し、個々の大會において闘爭方針を定めた。

『社會民主主義革命における社會民主黨の二つの戰術』

我々はボルシェヴィキとメンシェヴィキとの間に存在した意見の相違の正確な評價を與へなければならなかつた。レーニンはこの評價を小册子『二つの戰術』において與へた。彼はその中においてボルシェヴィキの主要な中心的スローガン——當面するブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの必要、プロレタリーアートと農民との獨裁の獲得およびブルジョア民主主義革命の社會主義革命への轉生の可能性——を基礎づけた。

黨の行動、その戰術は與へられた瞬間の評價に依存して建てられ且つ革命における綱領的および戰略的任務に從屬される。我々ボルシェヴィキは、第一革命の前夜において、革命は我國の第一段階においてはブルジョア民主主義革命であり、その任務はツァーリズムを倒すこと、農奴制の遺物を廢絶すること、政治的自由を獲得することである、と考へた。しかしレーニンは、革命がブルジョア民主主義の段階に停止せず、プロレタリアートが更に遠く、社會主義革命の道に進むことを、常に力說した。プロレタリア的闘爭のかゝる評價によつて指導されつゝ、レーニンは一九〇五年革命の多くの特殊性を指摘した。

メンシェヴィキとの我々の意見の相違の源泉の一つは、――とレーニンは書いた、――メンシェヴィキがブルジョア革命としてのこの革命の規定の上に安心して、農民革命としての特殊な性質を分離しなかつたことであつた。『……ボルシェヴィキは一九〇五年春および夏の革命の最初から、……我々の戰術上の意見の相違の源泉を明瞭に指示し、ブルジョア革命の一形態としての農民革命の觀念を分離し、そしてその勝利を「プロレタリアートと農民との革命的＝民主主義的獨裁」と規定した*』と。

* レーニン、第九卷、四三一頁。

レーニンは、農民大衆の積極的參加が『……それ（第一革命――ヤロスラフスキー）をば、農民層が顯著な革命的役割を演じた舊時の大ブルジョア革命と接近せしめる*』と考へた。

* レーニン、第十二卷、二一〇頁。

一九〇七年十一月、すでに第一革命の經驗に基いて、レーニンは小册子『第一ロシア革命における社會民主黨の農業綱領』の結論の中にかう書いた、『ロシア革命の第一期の經驗は、それがたゞ農民的農業革命としてのみ勝利を收めうること、およびこの農業革命は土地の國有化なくしては自己の歷史的使命を全く遂行しえないことを決定的に證明した*』と。

* レーニン、第十一卷、四九六頁。力點は筆者のもの――ヤロスラフスキー。

我黨の農業綱領自體についてレーニンはかう書いた、『ロシア社會民主黨の農業綱領は、農奴制の遺物に、我が農業制度におけるすべての中世的なものに向けられたところの、農民革命におけるプロレタリア的綱領である*』と。

* レーニン、第十一卷、四三七頁。力點は筆者のもの――ヤロスラフスキー。

革命のブルジョア的＝農民的性質を力說する場合に、決して忘れてならないことは、問題の他の、最も重要な方面のこと、卽ちこのブルジョア的農民革命においてはプロレタリアートがボルシェヴィキ黨の指導の下に、首領（ヘゲモン）、主導者、指導者として進出したことだ。同じ著作『ロシア革命における社會民主黨の農業綱領』においてレーニンはこの極めて重要な事情を指摘した、『農民は今や、徐々に自己のブルジョア革命をなしつゝあるが、その內部における矛盾を見ず、かゝる矛盾を考へようともしない。勞働者社會民主主義者はそれを見、そして世界的＝社會主義的目標を提起しつゝ、勞働者運動の運命とブルジョア革命の結果とを結びつけずにはゐない』と。かくしてレーニンとボルシェヴィキとはこの第一革命をたゞプロレタリアートのヘゲモニーの下における農民革命と見たのみではなくて、彼等はその中にプロレタリア革命の序曲、端初を見た。レー

ニンは『ロシアにおける民主主義革命の勝利が社會主義革命の端初への、萬國の我々の兄弟、意識的プロレタリアの新しい勝利への信號となるであらう*』といふことを確信してゐた。

* レーニン、第七卷、三六五頁。力點は筆者のもの――ヤロスラフスキー。

一九一七年一月九日チューリッヒの勞働青年の集會における一九〇五年の革命に關する自己の報告において、レーニンは、第一ロシア革命におけるプロレタリアートの地位とその鬪爭方法とを特に强く力說した。『ロシア革命の獨自性は、――とレーニンは述べた、――正に、それがその社會的內容においてはブルジョア民主主義革命であつたが、鬪爭手段においてはプロレタリア革命であつたことにある。それがブルジョア民主主義革命であつたのは、それが直接志し且つ直接自分自身の力によつて達成しえた目的が、民主共和國、八時間勞働日、巨大な大貴族的土地所有の沒收であつたからだ――それらの方策はすべて殆ど全範圍にわたつて一七九二年および一七九三年にフランスにおけるブルジョア革命が實現したのである。

『ロシア革命はこれと共に、たゞプロレタリアートが指導的勢力、運動の前衞であつたといふ意味においてゞはなくて、特にプロレタリア的鬪爭手段、卽ち同盟罷業が、大衆を搖り動かす主要な手段であり、決定的な出來事の波狀的發展における最も特徵的な現象であつたといふ意味においてもまた、プロタリア革命であつた*』と。

* レーニン、第十九卷、三四五頁。

この當時は我國の勞働者階級は西歐のブルジョア革命とパリ・コンミューンとの經驗を持つてゐた。プロレタリアートは我々の革命において、革命的農民層の支持の上に立脚する主要な指導的勢力として進出し、農民層との戰鬪的同盟を强化し且つ彼等を自己の後に引率した。

ロシア革命は過去の西歐の革命とは全く異つた國內的および國際的情勢のうちに行はれた。先行した革命の極めて農富な經驗の外に、ロシア革命は、資本主義が西歐においてはすでに社會主義への移行のために完全に成熟し、ロシアにおいてはかなり高度に發展してゐた時代に行はれた。

これが帝國主義時代における最初のブルジョア革命であつた、といふ事情が、大なる意義を持つてゐた。ツァール・ロシアは世界帝國主義經濟の構成分であつた。帝國主義はこの革命のプロレタリア革命への移行のための條件を準備した。世界經濟の全體制のうちにおいて帝國主義は社會主義革命のための客觀的諸條件を準備した。資本主義の暴風雨的な發展が農奴制の極めて野蠻な、『アジア的』な殘存物の保存と並んで進行したロシアにおいて、ブルジョア民主主義革命が社

會主義革命に移行するためには、有利な諸條件の結合が必要であつた。ロシアにはかゝる諸條件が存在した。即ち地主に對する農民戰爭や、大衆的軍事的暴動や、被抑壓民族の反抗と結合された、勞働者の大衆的革命運動がこれである。それにロシアにはボルシェヴィキ黨が、最も試錬を經た戰鬪的革命本部が存在した。

一九〇六年第四回黨大會においてレーニンはかういつた、『十八世紀のフランスは封建的および半封建的諸國家に圍まれてゐた。ブルジョア革命を完成する二十世紀のロシアは、社會主義的プロレタリアートが完全な武裝を整へてブルジョアジーとの最後の搭鬪の前夜に立つてゐるところの國々に圍まれてゐる*』と。同じ思想をレーニンは論文『一七八九年型の革命か一八四八年型の革命か』の中にかう表現した、『我國においては國際的時局は一層有利である、何故ならプロレタリア・ヨーロッパはヨーロッパの諸君主の側からのロシア君主制の援助を不可能ならしめるからである』と。

* レーニン、第九卷、一五〇頁。

だから我々ボルシェヴィキは、このロシア革命が社會主義革命の序曲（端初）とならなければならない、と考へた。我々は當時（トロツキー主義者が主張するやうに、一九一六年にではなくて）、かゝる條件の下においてはブルジョア民主主義的ブルジョア的＝農民的革命は直ちに社會主義革命に轉生する、と考へたのである。

ブルジョア民主主義革命の勝利が根本的であればあるほど、この社會主義革命は一層速かに到來する、と我々は考へた。

この見地がメンシェヴィキの見地に全く對立すること、およびトロツキー派の見地と何等の共通點をも持たないことを見ることは、困難ではない。

メンシェヴィキにあつては、ブルジョアジーが指導し、そして進行するブルジョア民主主義革命における主要推進力である。プロレタリアートとその黨とは左翼的反對派を成し、そしてこの場合ブルジョアジーを脅さないやうに行動する。プロレタリアートは、ブルジョア民主主義的秩序の確立の埒外に出てはならないこのブルジョアジー革命においてただブルジョアジーの附屬物たるにすぎない。

我々ボルシェヴィキにあつては、プロレタリアートがこの革命の主導者、指導者、主要な推進力である。彼等は革命的農民と同盟して行動する（『左翼ブロック』）。

メンシェヴィキにあつては、プロレタリアートは自由主義的ブルジョアジーを支持し（カデットと

のブロック)、そしてメンシェヴィキにあつては、トロツキー派におけると同樣に、プロレタリアートは農民層の大衆に敵對的態度を取る。

ボルシェヴィキにあつては、プロレタリアートは農民層と共に、他日ツァールおよび地主の權力の顚覆の後革命的獨裁を實現する。

メンシェヴィキにあつては、プロレタリアートは臨時ブルジョア政府に對して極端反對黨を形成する。トロツキー派は空中に跳躍して、プロレタリアートと農民層との革命的＝民主主義的獨裁の時期を飛び越える。こゝから彼等の『恐るべき革＝革＝革命的な』スローガン、『ツァール無用、勞働者政府』が生ずるのであるが、それはレーニンによつて徹底的に暴露された。

今や誰が正しかつたかを見るのは、困難ではない。ボルシェヴィキが正しかつた。卽ち革命はメンシェヴィキとトロツキー派とが勞働者を押しつけた道に沿うて進行しなかつた。正にボルシェヴィキこそ革命の正しい道を見出し、その推進力を正しく規定することができたのである。

ブルジョア民主主義革命の社會主義革命への轉生に關するレーニンの學說

前述したところによつて、すでにレーニンと全ボルシェヴィキ黨とが、一九〇五年の革命をブルジョア民主主義革命として評價しつゝ(レーニンはそれをまた或る意味で農民革命と稱した)、社會主義革命へのその移行、轉生を可能と考へたことが分る。ブルジョア民主主義革命の社會主義革命への轉生に關する學說は、レーニン的プロレタリア革命論の基石である。それはマルクスの學說の直接の繼續であつて、マルクスは一八四八年においてさへブルジョア民主主義革命の社會主義革命への轉生を可能と考へた、尤も當時のドイツには、一九〇五年のロシアにおけるが如く、獨立勞働者黨も存在しなければ、帝國主義時代において社會主義革命へのかゝる移行を容易ならしめた他の諸條件も存在しかつたけれども。ボルシェヴィキ黨は二つの革命の間に決して『萬里の長城』を建設しなかつた。

『第二インターナショナルの英雄達は、次の如く主張した(また主張し續けてゐる)、卽ち一方では、ブルジョア民主主義革命と、他方では、プロレタリア革命との間には、兩者を多かれ少かれ長い間隔によつて分つところの、深淵または、いづにもせよ、萬里の長城が存在し、權力を掌握したブルジョアジーはその間に資本主義を發展させ、そしてプロレタリアートは力を蓄積し且つ資本主義に對する「決定的鬪爭」のために準備するのだ、と。この間隔は、數十年間——より長

くはないとしても――と認められてゐる。この萬里の長城「理論」が帝國主義の情勢の下において一切の科學的意義を奪はれてゐること、それがたゞブルジョアジーの反革命的指導の隱蔽、粉飾であり、またさうあらざるをえないことは、殆ど證明を要しないであらう。「開花的」資本主義が「死滅的」資本主義に轉化し、革命運動が世界のすべての國において成長するところの帝國主義が、例外なく、ツァーリズムから農奴制に至るまでの、すべての反動勢力と結合し、かくして西歐におけるプロレタリア運動から東洋における民族解放運動に至るまでのすべての革命的勢力の聯合を必要ならしめるところの、封建的＝農奴制的秩序の殘存物の顚覆が帝國主義に對する革命的鬪爭なくしては不可能となるところの、衝突と戰爭を孕む帝國主義の情勢の下においては、「社會主義革命の前夜」の情勢の下においては、ブルジョア民主主義革命が、多かれ少かれ發展した國においては、かゝる條件の下においてプロレタリア革命に接近しなければならないこと、前者が後者に轉生しなければならないことは、殆ど證明を要しないであらう*』。

* スターリン、レーニン主義の諸問題、二二―二三頁。

『人民の友』において――第一革命の十年前――レーニンはかう書いた、『すべての民主主義的要素の先頭に起ち上つた、ロシアの勞働者は、絕對主義を倒し且つロシアのプロレタリアートを（萬國のプロレタリアートと並んで）公然の政治鬪爭の大道によつて戰勝的共產主義革命に導くであらう*』と。

* レーニン、第一卷、一九四頁。

勿論、ロシア（および他の國々）における革命を素晴しく促進した一九一四―一九一八年の帝國主義戰爭がなかつたならば、ロシアにおけるブルジョア民主主義革命の勝利（一九一七年二月）と社會主義革命の勝利（十月革命）との間には、一九一七年におけるよりも遙かに長期間を要した如くに、情勢は形成されてゐたことがあらう。しかしブルジョア民主主義革命の勝利はすべての條件の下において我々ボルシェヴィキにとつて、社會主義革命への即時の移行の必然性を意味してゐた。一九〇五年レーニンはその指導的著作『民主主義革命における社會民主黨の二つの戰術』において、轉生に關する學說を全面的に發展させた。明瞭な、何等の疑ひを殘さない形態で、彼は當時かう書いた、即ち革命の完全な勝利の場合には『……我々は民主主義的獨裁のスローガンをプロレタリアートの社會主義的獨裁、即ち完全な社會主義革命のスローガンを以て「取り替へよう」（恐らく新しい未來のマルチノフ派の恐るべき悲嘆の下に）*』と。

* レーニン、第八卷、一一九頁。

レーニンは書いた、『プロレタリアートと農民層との革命的＝民主主義的獨裁は、世の中におけるすべてのものと同樣に、過去と未來とを持つてゐる。その過去は、專制政治、農奴制、君主制、特權である……その未來は、私有財產に對する鬪爭、經營主に對する賃銀勞働者の鬪爭、社會主義のための鬪爭である*』と。

* レーニン、第八卷、八四—八五頁。

論文『農民運動に對する社會民主黨の態度』の中にレーニンは同じ思想を次の如く發展させてゐる、『……民主主義革命から我々は今や、恰も我々の力、意識的および組織的プロレタリアートの力に相應して、社會主義革命に移行し始めてゐる。我々は連續的革命を主張する。我々は半途に止まらないであらう……冒險主義に陷らず、自己の科學的良心を裏切らず、安つぽい人氣を追求せずして、我々はただ一つのことをいふことができ且ついふ、「我々は全力を以て全農民層が民主主義革命を行ふことを援助する、我々プロレタリアートの黨ができるだけ速かに新しく且つヨリ高い任務——社會主義革命に移ることがヨリ容易くなるやうに」*』と。

* レーニン、第八卷、一八六—一八七頁。

これは、ただブルジョア民主主義革命が終結された時にのみ、プロレタリアートが社會主義革命に進みうることを意味したであらうか？　否、さうではない。レーニンにとつては、革命の勝利の徵候は一階級の掌中から他階級の掌中への權力の移行を意味してゐる。レーニンは、革命が全世界における資本主義の非常に高度の發展およびロシアにおける比較的高度の發展の時期に行はれることを眼中に置きつつ、『今日の革命の完全な勝利は民主主義革命の終結および社會主義革命のための決定的鬪爭の端初であらう*』、と聲明した。從つてレーニンは二つの革命の間における間隔、如何なる裂目も必要とは考へなかつた。ブルジョア民主主義革命から社會主義革命への移行の問題は、勿論何よりも先づ鬪爭する諸勢力の相互關係や、革命黨の組織や、勞働者階級とその同盟者による革命において我々の當面する任務の明瞭な理解の問題である。革命的＝民主主義的獨裁は、全農民層と同盟して、プロレタリアートの指導の下に樹立されるが、農民層の內部には二つの社會戰爭、卽ち地主に對する全農民層の鬪爭とクラーク層に對する貧農の鬪爭が存在する。全農民層と共同の民主主義的獨裁の勝利、專制政治の顚覆および農奴制の遺物の廢絕は、革命を停止させるものではなくて、反對に、革命的鬪爭は社會主義革命への轉生の道に沿うて展開され、クラーク層と中農の一部分とは反革命の陣營に逸脫し、そしてプロレタリアートは日傭人層および貧農と同盟して、中農の中立の下に、プロレタリア革命の勝利のために鬪爭する。

*レーニン、第八卷、一一八頁。

轉生の問題は鬪爭の問題であることをレーニンは一再ならず說明した。ブルジョア民主主義革命は、その前衞が共產黨を組織したところのプロレタリアートが、一九一七年におけるが如く、先頭に立つならば、といふ條件の下において、社會主義革命に轉生する。その時『第一のものは第二のものに轉生する。第二のものが序に第一の問題を解決する。第二のものが第一の問題を片づける。鬪爭、そしてただ鬪爭のみが、どの程度に第二のものが第一のものを轉生させるかを解決するのである*』。

* レーニン、第二十七卷、二六頁。

ロシアにおける三つの革命の進行によつて是認されたレーニンの學說のこの最も重要な部分は、コミンテルン綱領の中に入つてゐる。すでに一九〇五年、レーニンは、ロシアにおける革命はヨーロッパに移されるであらう、と考へた。轉生に關する學說はただロシアにおいてのみならず、他の國々においても、革命の全行程を明かにし、それは革命が種々の段階を經て社會主義に至る運動を示してゐる。プロレタリア的社會主義革命のための客觀的條件の缺如を口實にすることは、正しくない、特に帝國主義時代においては。だがこの客觀的條件の缺如をメンシェヴィキは屢〻口實にしたしまたしてゐる。『今や、――と同志スターリンは「レーニン主義の諸問題」の中に書いた、――統一體としての世界帝國主義經濟の全體系における革命の客觀的條件の存在について語らなければならぬ、そしてこの體系の中に工業關係において十分に發展しない若干の國が存在することは、全體としての體系がすでに革命に成熟してゐるならば、或ひは一層正確にいへば――全體としての體系が成熟してゐるから、革命への克服し難い障碍とはなりえないのである*』と。

* スターリン、レーニン主義の諸問題、二〇―二一頁。

しかし帝國主義時代におけるブルジョア民主主義革命の社會主義革命への轉生が、一國における社會主義の勝利の可能なことを意味することは、全く明瞭だ。一九〇五年には、レーニンが後に、一九一五年に資本主義の不均等的發展の法則を發展させた時に、彼が與へえたやうな、帝國主義の展開された分析は、まだ不可能であつた。けれども、すでに一九〇五年以前および一九〇五年の革命中にレーニンと全ボルシェヴィキ黨とがブルジョア民主主義革命の社會主義革命への轉生の可能性と必然性、社會主義革命の勝利の可能性を擁護したことを、我々はすでに見るのである。

一九〇五年のロシアのブルジョア民主主義革命の特殊性は、この革命がヨーロッパにおける最後のブルジョア民主主義革命の一つであつたことであつた。この革命は、それが解決した根本問題が農奴制度の破壞であつた、といふ意味において、農民革命であつた。これによつて革命は過去と分離したのである。しかし我々が見た如く、それは同時にプロレタリア革命でもあつた。何故ならプロレタリアートが革命を指導したのみならず、その主要な推進力でもあつたからである。彼等は半途で止まることができないで、彼等が國際プロレタリアートの側からの支持を期待しえたやうな國際的情勢の下に、獨立的任務——社會主義革命を提起した。

しかしロシアにおいて勝利した革命に對して國際帝國主義が喰つてかかつたら、どうであらう？　レーニンは、ロシアにおいて勝利した革命に對して何よりも先づドイツ帝國主義が進出し、萬國の帝國主義者が進出するであらう、といふことを豫見してゐた。國際反革命がロシアにおける舊い秩序の復興のためにロシアの地主と資本家とを支持したら、どうであらう？　外國資本が種々の利權の形でツァール・ロシアへかなりの資產を投資し且つ數十億を國債としてツァール政府へ提供した、といふことだけのためにさへも、外國資本はロシアにおける資本主義經濟の維持に直接關心を有したではないか。レーニンは、ロシア革命に對する西歐の帝國主義者の進出のかかる可能性を豫見した。さればこそ、社會主義革命への卽時の移行を辯護しつつ、ボルシェヴィキ黨は、ただ最後まで至る決定的闘爭のみが復古に對する保證を作り出すことを明瞭に理解してゐたのである。ロシアにおける革命の勝利の場合における復古に對する保證について語りながら、レーニンは第四回黨大會においてこの問題を極めて明瞭に提起した。彼はかういつた、『復古に對する條件的および相對的保證は、ただ革命ができる限り決定的に實現されること、それが調停者、妥協者およびあらゆる和解者の最小の參加の下に直接革命的諸階級によつて實行されること、この革命が實際に最後まで實行されることである。*』と。

* レーニン、第九卷、一五〇—一五一頁。

レーニンがロシアにおける社會主義革命への移行はただ西歐における社會主義革命の後においてのみ可能であると考へた、といふことは眞實であるか？　否、レーニンは決して問題をかやうには提起しなかつた、レーニンはただロシアにおける革命と西歐における革命との間における密接な相互關係の問題を提起したにすぎない。勿論ロシアにおける革命、特に勝利した革命は、西歐における社會主義革命の發展に巨大な刺戟を與へた。ロシアにおける革命を他の國々のプロレタリアートが支持しなかつたやうな瞬間は我々の運動史上においてなかつたし、一九一七年ロシ

アにおける社會主義革命は、多くの國々――ドイツ、フランス、イギリス、アメリカにおいて有力な支持を見出した。ヨーロッパにおけるプロレタリアートはまだ勝利してゐなかつたから、これはヨーロッパのプロレタリアートの直接の國家的支持ではなかつた。しかしこれは、西歐の帝國主義者の側からのロシアにおける社會主義革命に對する攻撃を麻痺させ、無力にし、弱めるには十分有力な支持であつた。しかしメンシェヴィキとトロツキー派とは、『ヨーロッパのプロレタリアートの直接の國家的支持なくしては、ロシアの勞働者階級は權力を維持し且つその一時的支配を長期に亘る社會主義的獨裁に轉化することができない*』と考へたのである。

* トロツキー、我々の革命。

プロレタリアートの力に對するトロツキー、メンシェヴィキおよび降服者のこの不信がロシア革命の全進行によつて完全に反駁されてゐることを、一九三三年に證明しなければならないであらうか。何故ならこの革命は一九一七年十月社會主義革命として勝利したから、何故ならそれは舊世界のすべての勢力の聯合的攻撃に耐へたから、何故ならそれは他の國々における社會主義革命の發展に巨大な刺戟を與へ、それは地球の六分の一の上に社會主義の根據地を作り出したからである。

トロツキーの『永久革命』論

革命が急速に上昇した一九〇五年に、トロツキーがローザ・ルクセンブルグとパルヴス*とによつて作られた『永久革命』論を主張したことは、我々のすでに見たところである。トロツキーは、革命が彼の『永久革命』論の正しさを證明したかの如く、一度ならず欺瞞的に主張した。彼は、彼の『永久革命』論がマルクスの永久革命論と少しも相違しないと一度ならず主張したし且つ主張してゐる。

* パルヴス――ドイツ社會民主黨の活動に大いに參加したロシアのメンシェヴィキ、亡命者。帝國主義戰爭時代には帝國主義者との直接の協同およびその公然の援助にまで墮落した。

永久革命に關するマルクスの學說はどの點にあつたか？　一八五〇年三月マルクスおよびエンゲルス――『共產主義者同盟』の組織者および指導者――は『「共產主義者同盟」宛の中央委員會のメッセージ』を書き、その中においてブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートの戰術を發展させた。當時、一八四八年の革命の敗北および一八四九年の暴動の鎭壓の後、マルクスは近き革命的昂揚を期待してゐた。マルクスは、この度は民主主義的小ブルジョアが運動の先

頭に立つであらう、ドイツ・ブルジョアジーの種々の分派が權力のために鬪爭するであらう、といふことを豫言した。小ブルジョア民主黨に對するプロレタリア黨の態度はどうあるべきであるか？　マルクスはこれにかう答へてゐる——

『小ブルジョア民主黨に對する革命的勞働者黨の態度は次の如くである。卽ち黨はその顚覆を目ざしてゐる分派に對しては民主黨と協同する。黨が自ら鞏固にならうと欲してゐるすべての場合には、黨はそれらに公然反對する……民主主義的小ブルジョアジーが革命をできる限り速かに且つ精々上述の要求を實現して終結させようと欲してゐるに反し、我々の關心および我々の任務は、多かれ少かれ有產者的なすべての階級が支配から驅逐されず、國家權力がプロレタリアートによつて奪取されず、プロレタリアの結合がただ一國においてのみならず、世界中のすべての支配的な國において、この國におけるプロレタリアの競爭を止揚し、そして少くとも決定的な生產力がプロレタリアの掌中に集中されるほど進步しない限りは、革命を永久的に行ふことである。我々にとつては私有財產の變更ではなくて、ただその破壞のみが、階級對立の隱蔽ではなくて、階級の止揚が、現存社會の改善ではなくて、新社會の建設が問題なのである*』と。

* マルクスおよびエンゲルス、『「共產主義者同盟」宛の中央委員會のメッセージ』、九—一〇頁、黨出版部、一九三三年刊。

この戰術の實行のためにマルクスはプロレタリアートに自己の獨立の黨、自己の戰鬪的武裝組織、自己の大衆組織を保持すること、議會の內外において獨立的政策を行ふこと、その際『勞働者が民主主義者の空語、例へば諸君のかゝる態度は民主黨を分裂させ、反動に勝利を得させるものだ、といふやうな空語に迷はされてはならぬ』ことを勸告した。彼等の戰鬪的スローガンは『永久革命』でなければならぬ。

我々の革命の全期間を通じて我々は正に革命のこの道を固執した。レーニンはすでに一八九四年に『人民の友』の中において、我々が見た如く、革命のこの道を印づけた。一九〇五年レーニンは『我々は永久革命に贊成だ』と書いた。プロレタリアートは自由主義的ブルジョアジーに對する自己の戰術を、自由主義的ブルジョアジーの反革命的本質を暴露しつゝ、主要な攻擊を農奴制擁護者＝地主に向けることに置いたが、その後自由主義的ブルジョアジーが一九一七年權力を掌握するや、プロレタリアートは彼等をもまた顚覆した。この意味において今日もまた奪取されたプロレタリアートの獨裁の基礎の上に階級的革命的鬪爭は共產主義の完全な勝利まで繼續するであらう。

『正に我々がいつた通りになつた。――とレーニンは論文「プロレタリア革命と背敎者カウツキー」の中に書いた。――革命の進行は我々の考察の正しさを確認した。最初は「全」農民層と共に君主制や、地主や、中世に對して（そして革命がブルジョア的、ブルジョア民主主義的なものである限りにおいて）。次には貧農層や、半プロレタリアートや、すべての被搾取者と共に、農村の富者、クラーク、投機業者をも含めて、資本主義に對して、而も革命が社會主義的なものである限りにおいて。前者と後者との間に萬里の長城を築くこと、プロレタリアートの準備の程度および彼等と農村の貧者との結合の程度の外に、何か他のものによつてそれらを互ひに分離することは、マルクス主義の最大の歪曲であり、その俗惡化であり、自由主義を以て取り替へることである*』と。

* レーニン、第二十三卷、三九一頁。

トロツキーおよび彼と共に多くの他のメンシェヴィキはマルクスの永久革命論といふ口實で一體何を說敎したか？

トロツキーは著書『一九〇五年』の序文において自己の理論を次の如く說明してゐる――

『正に一九〇五年一月九日と十月罷業との間に、著者には、「永久革命」論の名稱を得た、ロシアの革命的發展に對する見解が成立した。この奇妙な名稱は、ブルジョア的目的が直接その前に立つてゐるロシア革命が、だがブルジョア的目的の上に停止しえないであらう、といふことを意味した。革命は自己の當面のブルジョア的任務をば、プロレタリアートをして權力を掌握させることなくしては實現しえないであらう。だが權力を掌握したプロレタリアートは、革命のブルジョア的埒に止まりえないであらう。反對に、正に自己の勝利を確保するために、プロレタリア前衞は自己の支配の第一期にただ封建的所有のみならず、ブルジョア的所有にも最も深刻な侵害をなさなければならぬ。この場合彼等は、彼等の革命的鬪爭の第一期において彼等を支持したブルジョアの全集團とのみならず、彼等がこれと協同して權力を掌握した廣汎な農民大衆ともまた、敵對的な衝突に陷るであらう。壓倒的多數の農民人口を有する後進國における勞働者政府の地位における矛盾は、ただ國際的規模において、プロレタリアートの世界革命の舞臺においてのみ、その解決を見出すことができよう*』と。

* トロツキー、一九〇五年、四頁。力點は筆者のもの――ヤロスラフスキー。

メンシェヴィキのトロツキーは、一九〇五年の革命の波の發展と自己の同盟者＝メンシェヴィキの餘りに露骨な追隨主義との影響を受けて、『左』傾した。一九〇五年トツロキーが執筆した『ナチャ

ーロ』について、人々は當時『「ナチャーロ」――ポムチャーロ』（『「ナチャーロ」は疾走した』）と語つた。バルヴスとトロツキーとは、レーニンの表現に從へば、『無暗に左翼的な』スローガン、卽ちレーニンが容赦なく嘲笑したところの『ツァール無用、勞働者政府』を宣言したのである。

『永久革命』に關するトロキーの見解が永久革命に關するマルクスの理論と何等の共通點を持たず、ロシア革命の性質および推進力に關するボルシェヴィキ的理解と何等の共通點をも持たないことを確認することは、困難ではない。トロツキーとバルヴスとはかう判斷した、卽ち我々のブルジョアジーは非革命的である、從つて我々の革命はブルジョア革命たることができない、と。そこから、我々がすでに述べたやうに、『ツァール無用、勞働者政府』といふスローガンが生ずる。トロツキーはロシア革命の成功を、他の國々における勝利せるプロレタリアートの國家權力がそれを支持するかどうか、といふ點に直接依存せしめた。トロツキーはプロレタリア革命のそれ以外の同盟者を見なかつた。彼は農民層をプロレタリアートに敵對的な階級と見た。だが、もし他の國國においてプロレタリアートが勝利しなければ、どうなるか？　トロツキーはその後このことから、『一國における』（ソヴィエト聯邦における）社會主義の勝利は考へられない、といふ直接の結論を引き出した。トロツキーは、同盟者としての農民大衆を指導する力のあるロシア・プロレタリアーの力を信じなかつた。トロツキーは、權力を維持し且つ戰勝的に社會主義を建設しうる勝利したプロレタリアートの力と能力とを信じなかつた。トロツキーは、すべてのメンシェヴィキと同樣に、プロレタリアートにとつてのブルジョア革命の意義、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの意義、特に――勞働者階級と農民層との相互關係を全く理解しなかつた。レーニンとボルシェヴィキとが進行しつゝある革命におけるプロレタリアートと農民層との民主主義革命の問題を提起したのに反し、トロツキーはプロレタリアートと勤勞農民大衆との同盟の可能性を否認した。けれどもレーニンにとつて、ボルシェヴィキにとつては、かゝる同盟は社會主義革命へのプロレタリアートの運動の基礎であつた。トロツキーはプロレタリアートが國內には同盟者を持たないといふことから出發した。『革命は前進した、進出は當面の任務だ、そして我々は單獨だ』。

トロツキーの永久革命論に關聯して、同志スターリンは小册子『十月革命とロシア共產主義者の戰術』の中にかう書いた。『これまで人々は通常「永久革命」論の一方面のみを――農民運動の革命的能力に對する不信――を力說した。今や、公平を期するために、この方面に他の方面を――ロシアのプロレタリアートの力と能力とに對する不信を補充しなければならぬ*』と。かくして外

觀上革命的なトロツキーの『永久革命』論は、革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの否認に導いたのである。何故なら、トロツキーが說敎したやうに、プロレタリアートが孤獨であり、同盟者を持たないとすれば、彼等には指導すべき何人もないからである。革命的＝民主主義的獨裁を否認し、それを飛び越えることによつて、トロツキーはブルジョア民主主義革命の可能性を否認した。何故ならプロレタリアートは、單獨で、數百萬の農民大衆の支持なしでは、ブルジョア民主主義革命を遂行し且つ完成することができないからである。しかしトロツキーは、これによつてまた社會主義革命をも否認した、何故なら我國においてはプロレタリアートの獨裁への道はブルジョア民主主義革命を經て、プロレタリアートと農民層との革命的＝民主主義的獨裁を經て通じてゐたからである。されば外觀上革命的なトロツキーの理論は、實際には反革命的であつた、卽ちそれはプロレタリアートを武裝しないで、彼等を武裝解除し、彼等の力を增大しないで、それを弱めたのである。

* スターリン、レーニン主義の諸問題、八八頁。

臨時革命政府への參加

第一革命の進行および意義に對するボルシェヴィキとメンシェヴィキとの異つた理解は、また異つた戰術に導いた。實際、もしメンシェヴィキにとつて革命がブルジョア的である、――ブルジョアジーが權力を自己の掌中に握らなければならず、またこの革命の主要な推進力でもあるならば、勞働者黨は臨時革命政府に參加しうるかどうか？　メンシェヴィキはこれに對してかう答へた、『決して參加しえない。もし勞働者階級が臨時革命政府に參加するならば、彼等は責任を負はなければならぬ。彼等はブルジョア社會の埒內において片附けられないところの、私有財產關係に觸れるところの多く方策を實行しなければならないであらう。だが彼等はこれをなしえない、何故なら革命はブルジョア的であるから。だから彼等は反對派の役割に止まり、而もブルジョア的臨時革命政府を甚だしく壓迫してはならない』と。事の本質においてこれはブルジョアジーを助ける――プロレタリアートを權力に近づけさせまいとする努力であつた。

彼等はマルクス主義の擁護者の姿勢を保ちつゝ、我々にいつた、『諸君はブルジョアーや、ブルジョア政府と協同しようと欲してゐる、諸君はブルジョア政府の活動に對して責任を負はうと欲してゐる』と。この場合彼等は、農奴制の殘存物を破壞し且つ民主主義革命を最後までなし遂げなければならない、革命政府が問題となつてゐることを隱蔽した。彼等は、戰勝的武裝暴動の結

果發生した勞働者と農民との政府のみがかゝる政府たりうる、といふ事實を隱蔽した。彼等は、自由主義的ブルジョアジーが最後まで徹底的に專制政治や地主と鬪爭しえないこと、このブルジョアジーと地主との間の協定は不可避であることを隱蔽した。往々メンシェヴィキの論議の中には、當時ペー・アクセリロッド、プレハーノフ、ザスリッチその他のメンシェヴィキが持つてゐた國家や權力に對する以前のナロードニキ的無政府主義者的見解の反響が聞へる——權力に參加して、汚れないやうに、と。實際にはこれはブルジョアジーの利益の擁護であつた、何故ならメンシェヴィキはプロレタリアートの役割をブルジョアジーの援助者の役割に還元したからである。ブルジョアジーの方では勿論プロレタリアートが權力に參加しないことに關心を持つてゐた。だからブルジョア黨は權力の奪取の問題に對するメンシェヴィキのこの態度を賞讃した。

メンシェヴィキは臨時政府への參加の代りに何を提唱したか、プロレタリアートと農民層との革命的獨裁の代りに彼等は何を提唱したか？　地方的革命的自治を。これによつてメンシェヴィキは革命のＡＢＣの完全な無理解を暴露し、中央權力機構がブルジョアジーの掌中にある時に、革命的自治、卽ち地方における勞働者および農民の自治が可能であるかの如く問題を描き出した。すべての革命の經驗は、この權力遊びが、革命的自治遊びが、事實上、實際において、かゝる革命的自治が、精々自由主義的ゼムストヴォに變異するであらう、といふことを示した。

この問題におけるメンシェヴィキの破產は、その後、勞働者階級が彼等の側に移行した軍隊の援助を得てツァールの權力を顚覆した、一九一七年二—三月時代に、特に現はれた。メンシェヴィキは最初から權力をブルジョアジーの手に、ケレンスキー、ロジャンコ、リヴォフ、ミリューコフの政府の手に讓り渡し、その後自らこのブルジョア政府に參加した。一九〇五年には彼等は勞働者階級と農民層との民主主義的獨裁の革命的權力の設立に參加することを拒絕したが、一九一七年には資本家や地主と共に政府に參加した。

革命的權力の設立と革命政府への勞働者階級の參加とに對するメンシェヴィキの見解の完全な破產のこれ以上立派な實例を考へ出すことはできない。

たゞロシアにおいてのみメンシェヴィキが勞働者階級の鬪爭の最も尖銳な時期にブルジョアジーとの協同の道に立つたのではない、といふことを眼中におかなければならぬ。我々はこれを戰後時代にドイツにおいても（シャイデマン、エーベルト、ノスケの政府）、イギリスにおいても（マクドナルドの政府）、スウェーデンにおいても（ブランチングの政府）、ベルギーにおいても（ヴァンダーヴェルデの政府）、その他の國々においても見るのであつて、これらの國では、第二インター

ナショナルの人々、その指導者が、秘密に且つ公然と勞働者階級の利益を賣り且つ裏切つてゐる。

當時メンシェヴィキは我々を非難して、我々は勞働者階級と農民との間の差別を拂拭し、我々の階級的政策を農民的政策に溶かすものだ、といつた。メンシェヴィキは屢〻レーニンを社會革命黨員と呼んだ、――これがさうでなかつたことを證明する必要があるだらうか？　臨時政府への參加の條件として我々は、(一)獨立的階級的政策、(二)我黨の獨立を提起した。臨時政府に關する第三回大會の決議にはかう書かれてゐる――

『……力の相互關係および豫め正確に規定されえないその他の諸要因の故に、全能的な我黨が一切の反革命的企圖に對する容赦なき鬪爭および勞働者階級の獨立的利益の固守の目的を以て臨時革命政府に參加することが許されうる*』と。

*『全聯邦共産黨決議集』、第一部、四七頁。力點は筆者のもの――ヤロスラフスキー。

臨時革命政府に對する態度の問題に關するボルシェヴィキとメンシェヴィキとの見解の間に如何に巨大な相違があつたかは、この決議によつて明かである。

武裝暴動と總同盟罷業について

我黨の第三回大會の功績の一つは、それが武裝暴動の問題を非常に明瞭に提起したことにある。大會はすべての黨組織に次のことを委任した、『(a) 宣傳および煽動によつて來るべき武裝暴動のたゞ政治的意義のみならず、實踐的＝組織的方面をもプロレタリアートに明かならしめること、(b) 暴動の最初および進行中に重要な意義を有する大衆的政治的同盟罷業の役割をこの宣傳および煽動に際して明かならしめること、(c) プロレタリアートの武裝や、また武裝暴動およびそれの直接的指導の計畫の作成に最も精力的な處置を取り、これがために必要に應じて黨活動家の特殊なグループを作ること*』。

*『全聯邦共産黨決議集』、第一部、四六頁。

暴動の問題はボルシェヴィキによつてかやうに提起された。黨は何をしなければならなかつたか？　宣傳および煽動によつて暴動の不可避、その政治的意義を說明し、暴動の可能的な進行について正しい觀念を大衆の中に普及させること、他の國々における武裝暴動の經驗について大衆に物語ること、この經驗の中から現代にとつてすべての價値あることを引き出すこと、これである。しかしこれはたゞ一つの任務――宣傳である。それに劣らず重要な他の任務は、暴動を組織すること、暴動のための勢力を組織すること、プロレタリアートの武裝の任務、武裝暴動計畫の

作成、この暴動の指導、これがために特殊な戰鬪的グループを作り出すこと、勞働者自身の中から武裝勞働者の最初の基本的な戰鬪的幹部、最初の民兵、我々の赤衞軍および我々の赤軍の萠芽を作り出すことにあつた。

當時かゝる問題提起がたゞ我がロシアのメンシェヴィキによつてのみならず、また西歐においても敵意を以て迎えられたことを記憶しなければならぬ。西歐においては多年の間社會黨の指導者達は勞働者を次の如く說得して來た。卽ち勞働者階級の市街暴動の時代、バリケード鬪爭の時代は過ぎ去つた。都市はこの間に再建され、市街は一層廣く、眞直ぐに且つ政府軍の射擊にとつて一層有利になつた。武器はその時代から一層遠距離戰的になり且つ一層破壞的になつた。政府軍に對して戰ふことは現代の軍事的技術の下においては勞働者階級に不可能である。勞働者階級は議會選擧によつて鬪爭し且つ徐々に投票數と議會における代議士の數とを增大しなければならぬ。そしてその後、そこに議會における多數派が形成され、そして權力はそれ自體勞働者階級の掌中に移行するであらう、と。プロレタリアートによる權力奪取のかゝる理解が勞働者の欺瞞であること、——これはその後の歷史が證明してゐる。我々はすでに一再ならず近年、如何に諸々の國において社會黨が議會において代表者の多數派を占めたか、この多數派がブルジョアジーの權力を始末しようと考へもしなかつたかを見た。往々この多數派は（イギリスにおけるマクドナルドの『勞働黨政府』やドイツその他の國々における『社會民主黨政府』がさうであつたやうに）、ブルジョアジーに奉仕するものとなつた。

だが他方では、我がロシアにおける暴動の經驗および他の國々における多くの暴動の經驗は、今日の軍事的技術の下においてもまた、都市および農村における廣汎な民主主義的大衆に立脚し、政府軍の動搖する部分の共鳴に立脚するところの、勞働者階級の戰勝的武裝暴動が可能なことを示した。

當時メンシェヴィキは武裝暴動の必要に關する問題提起を敢て公然と反駁しなかつた。政治情勢は極度に灼熱され、大衆の憤怒は軍隊、警察、憲兵との街上の衝突の形態で爆發した。あらゆる示威運動の際、あらゆる顯著な同盟罷業の際には、地主に對する、農村に配置され、農民を嘲弄した看視兵や巡査に對する農民大衆の激怒が沸騰した。しかしメンシェヴィキは、善き願望と何の意味もない妥協的な決議とによつて武裝暴動を思ひ止まらせるために、必要なすべてのこと、彼等の力に叶ふすべてのことをなした。武裝暴動を組織することはできない、これは過程である、黨は勞働者を武裝する任務を自ら提起することはできない、黨はたゞ『自己武裝の焦眉の必要』

によつて彼等を武裝しなければならない、と彼等は說敎した。『自己武裝の焦眉の必要』によつて勞働者を武裝するといふ駁辯は、勿論メンシェヴィキを何物にも義務づけなかつた。

しかし暴動の問題においては、ローザ・ルクセンブルグの如き勞働者運動の活動家もまた、遙かに大なる程度にメンシェヴィキ的見地に立ち、過程としての暴動といふこの理論を支持した。トロツキーもまたペテルブルグ勞働者代表ソヴィエトの過程時代に、これと同じ見地を著しい程度に擁護した。

ボルシェヴィキは民兵の創設を、たとへ數的には小さなものであらうとも——プロレタリアートの戰鬪的勢力を自己の周圍に集めうる、主導的な、三組、五組の遊擊部隊、——すべてこれらを革命の準備の眞面目な任務と見た。我黨は暴動の準備のために戰鬪的組織の一聯の網を組織した。陸海軍における軍事組織は革命的な兵士および水兵の進出と勞働者の組織的進出とを結びつけなければならなかつた。レーニンはこの時期にかゝる進出を農村における氣分や、陸海軍における運動を支持しようとする農村の準備と特に結びつけた。一九〇五年に武裝暴動の組織のこの正しい基礎が、當時革命的勢力の三つの流——武裝勞働者の暴動、陸海軍における暴動、農民の暴動——を完全に合流させることができなかつたがために、勝利を齎さなかつたが、我々が世界最初の十月革命を指導した一九一七年十月には、これは完全に實現された。第三回大會における武裝暴動問題の提起は、大衆の中に武裝暴動の觀念およびその成功の諸條件を正しく且つ多方面的に宣傳するために、巨大な意義を持つてゐた。

勞働者階級の鬪爭にとつてこれに劣らず重要であつたのは、ボルシェヴィキによる第三回大會における總同盟罷業の問題の提起であつた。當時西歐の社會民主主義者は政治的總同盟罷業に對して否定的態度を取つてゐた。有名なドイツのメンシェヴィキ、今は故人となつたアウエルは、次の如き言葉をさへ吐いた、『總同盟罷業は總たわけだ』と。『勿論、——とアウエルはいつた、——資本家にあれやこれやの讓步を强ひるために、もし總同盟罷業が可能だとすれば、卽ち、革命もまた可能であらう。だがもし我々が革命を行ひうるならば、總同盟罷業がどうして我々に必要であらう』と。この外彼は、總同盟罷業が何よりも激しく勞働者自身に打擊を與へるだらう、といふことを指摘した。かゝる基礎の上に彼は、總同盟罷業は無意味だ、と考へたのである。そして當時のヨーロッパの社會民主主義者の中のたゞ極めて少數者、ヘンリエッティ・ローランド＝ホルスト、次いでローザ・ルクセンブルグの如き人々のみが、決して常に徹底的ではなかつたが、總同盟罷業の觀念を擁護したが、それを武裝暴動に轉化する必要を理解しなかつた。

第三回黨大會は政治的罷業、次いで總同盟罷業を『暴動の最初および進行中において重要な意義を有しうる*』闘爭手段として提起した。

*『全聯邦共產黨決議集』、第一部、四六頁。

大衆的政治的罷業に對するボルシェヴィキのこの評價は確認されたであらうか？

我々は今や次の如くいふことができる、即ち我々の革命の經驗は、特にそれが準備の或る段階において勞働者階級の武裝暴動と結びつけられる場合には、階級闘爭の手段としての大衆的政治的罷業の適用の正しさを輝かしく確認した、と。

農民運動に對する態度

第三回大會は地主、國庫、皇室および寺院の所有地の沒收といふ革命的要求を提起した。大會は黨の諸組織に、我黨が革命的農民運動を支持する任務を自ら提起するものであることを大衆の中に廣く説明すべきことを委任した。この場合當時我々は次の立場に立つてゐた。即ち今やまだ決定的な革命を待たないで、諸地方に革命的農民委員會を設立しなければならぬ、そしてこの委員會は今や、土地を地主から暴力的に奪取し、あれやこれやの民主主義的要求を實行する、と。

しかし我々は、人々が我々を非難したやうに、農民層がこの闘爭において、同一の利益を持つて、全面的に同一種類のものとして現はれるだらう、とは決して考へなかつた。否、我々は當時、第一に、かう考へた、『プロレタリアートの黨としての社會民主黨は、すべての場合およびすべての事情の下において、農村プロレタリアートの獨立的組織を撓まず志向し且つ農村ブルジョアジーの利益に對する彼等の利益の和解し難い對立を彼等に説明しなければならぬ』と。それと同時に我々は、農村プロレタリアートのこの獨立的組織が社會民主黨の旗の下に都市プロレタリアートと合流することを必要と認めた。

かくして我黨の第三回大會は農民（土地）問題においてもまた全く明白なボルシェヴィキ的方針を與へ、すでに當時、農民層の搾取および農奴化の手段として役立つすべての土地の沒收といふ要求を樹立し、すでに當時、プロレタリアートの獨立的階級組織と獨立的階級方針を保持しつゝ、革命的戰術を樹立した。

他の黨に對する態度

第三回大會は次の決議を採用した、『地方的活動の調和およびかくしてすべての社會民主主義諸

黨を單一のロシア社會民主勞働者黨に結合する可能性を準備する目的を以て、民族的社會民主主義諸組織との協定に全力を注ぐこと*』。

*『全聯邦共産黨決議集』、第一部、五〇頁。

大會は社會革命黨に對する自己の態度を規定しなければならなかつた。この態度を我々は第二回黨大會で規定し、そして社會革命黨は社會主義の旗の下に進出し且つ勞働者階級をその眞實の階級的方策から引離す限りにおいて害毒を齎す、と認めた。けれどもそれにも拘らず社會革命黨は、當時小ブルジョア的ではあるが、革命的な組織であつて、インテリゲンチャ、都市の小市民のかなりの部分および農民層の一部に對して影響を持つてゐた。だから、我々は『專制政治に對する鬪爭を目的とする社會民主主義者と社會革命黨組織との一時的戰鬪的協定は若干の場合には有益でありうる』と認めたのである。けれどもそこには『かゝる協定が如何なる場合にも社會民主黨の完全な獨立性を制限し且つそのプロレタリア的戰術、その原則の完全と純潔とを破壞してはならない』といふ條件が課せられた。

第三回黨大會は自由主義者に對する態度に關する決議を採用したが、その中には、我黨はツァーリズムに向けられたブルジョアジーの反對派的および革命的運動を支持する、と述べられてゐる。ロシア・ブルジョアジーの役割を注意に取り入れつゝ、黨はこの場合『あらゆる色彩を有するブルジョア民主主義的傾向の反革命的および反ブロレタリア的性質を勞働者に說明すること』および『勞働者運動を自己の掌中に握り且つプロレタリアートまたはその個々のグループの名において進出しようとするブルジョア民主主義のあらゆる企圖に對して……精力的に鬪爭すること』を勸めてゐる。

第三回黨大會における組織問題

我々ボルシェヴィキは當時もその後も、我々が地下運動の讃美者であるといつて、卽ち合法的な、公然の進出を利用することを欲しないで、何處までも地下的な黨でゐようと欲するといつて、非常に屢〻非難された。これは勿論全く誤つてゐる。我々はすでにそれ以前においてもまた、政府の機構の最小の弱點を利用しつゝ、勞働者階級を組織するために、たゞの一つの機會をもたゞの一つの最小の可能性をも等閑にしなかつた。

一九〇五年には、問題は『政府が自己に敵對的な階級の政治的進出の若干の自由』を許すことを餘儀なくされたやうな狀態にあつた。

メンシェヴィキはこの瞬間を如何に理解したか？　メンシェヴィキの一部は、一般に地下運動を清算して、勞働者運動を合法的闘爭の現存する可能性に順應させなければならない、といふ結論をここから引き出した。これは專制政治の顚覆の任務を全く拒否すること、政治的の點においてはブルジョアジーの憲法制定運動に贊成し且つたゞ經濟闘爭のみに止まることを意味してゐた。これは本質において經濟主義者の方針であつた。

ボルシェヴィキは問題をかやうに提起しなかつた。ツァール政府のうまい約束を信ぜず、その約束が如何に不確實であるかを知つてゐる我々は、自己の非合法的、地下的黨組織を保持することを必要と考へた。革命の粉碎の場合に我々は當時基本的勢力、黨の基本的機構を保持した。しかしそれと同時に第三回大會は次のことを決定した、即ち『(a)公然の進出のあらゆる機會を一般民主主義的要求にプロレタリアートの獨立的階級的要求を對置するため、かかる進出の進行中にプロレタリアートを獨立の社會民主主義的勢力に組織するために利用すること、(b)すべての合法的または半合法的勞働者協會、同盟その他の組織をそれらの中に社會民主黨の支配的影響を確保し、また可能性に應じて、それらをロシアにおける來るべき公然の社會民主勞働者黨に轉化するために利用すること』。即ち、すでに當時我々は、地下的な黨を保持し且つ强化しつゝ、勞働組合、倶

樂部等々を組織することが必要であり且つ可能である、と考へたのである。

レーニンはこの大會において勞働者を指導部に遙かに多く吸引することが必要だといふ思想を特に熱心に固執した。第三回大會は、第二回大會に提出されながら當時採用されなかつた規約の第一條を採用した。黨の綱領、その決定を承認し且つ組織の中において活動する者が、黨員である。

大會は宣傳および煽動に關する特殊な決議において、『運動の指導者の役割へ、――煽動者、宣傳者として、また特に地方的中央部および全黨的中央部の成員として、――できるだけ多數の意識的勞働者を吸引することの排他的な重要性』を力說した。

勞働者大衆の中からかゝる指導者を養成するために、大會は、通俗小册子の出版、煽動者および宣傳者の巡歷グループの設立、それに相應する文獻の出版およびサークルの成員のためのプログラムの作成の如き、宣傳および煽動のヨリよき組織について多くの方策を建てた。

この際當時、農民のための通俗小册子を作ることが必要だ、といふことに注意が拂はれた。

指導機關の組織自體もまた改變された。即ちそれ以後中央委員會は自己の中央機關紙の責任編輯者を任命した。黨評議會は廢絶された。中央委員會は遙かに廣汎な權能を賦與され、實際に黨

の指導的中心となり、指導のヨリ大なる調和、ヨリ大なる集中を獲得した。

大會は黨の偏向部分（メンシェヴィキ）に關する決議を採用したが、その中にはすでに當時メンシェヴィキを、黨活動の範圍を狹めようとする志向によつて自己を表はし、自由主義的ブルジョア黨に對する黨の戰術の獨立に反對し、民衆暴動における組織的役割を引き受けようとする我黨の可能性および願望に反對し、如何なる條件の下においても臨時革命政府に黨が參加することに反對するところの、經濟主義者の繼續者だと認めた。

メンシェヴィキは勞働者を次の如く說得し且つ威嚇した、卽ち臨時革命政府は『解放されつつある國民の對立的諸階級の間の相互の鬪爭を統制することによつて、ただ革命的發展を前進せしめるのみならず、また資本主義制度の基礎を脅かすその要素に對して鬪爭しなければならないであらう』と。

第三回黨大會は一九〇五年の決定的諸事件の前夜に革命の基本的な諸問題について極めて重要な決議を與へた。

かくて第三回黨大會は、その席上でボルシェヴィキの革命的戰術の諸問題について一定の決議が採用され、鬪爭の主要な、基本的な方針が樹てられ、黨の組織に大なる明確と調和とが與へられたところの、最初の純ボルシェヴィキ大會であつた。

メンシェヴィキ會議とその日和見主義的決議

ロンドンにおいて第三回（ボルシェヴィキ）黨大會が開かれた當時、メンシェヴィキがジュネーヴにおいて別に會議を開いたことは、我々がすでに言及したところである。この會議は何を決定したか？　ボルシェヴィキが暴動を組織する任務を提起した時に、メンシェヴィキは、我々は革命を解放することを助けなければならない、といふ觀念を提出した、――換言すれば、メンシェヴィキは戰勝的武裝暴動のために勞働者大衆を組織する任務を引き受けることを拒絕して、全く明瞭な實踐的任務をば革命の隱れた力を『解放する』といふ議論によつて代へたのである。ボルシェヴィキが蜂起した人民による權力奪取およびプロレタリアートと農民の革命的獨裁の政府の設立の問題を提起した時に、メンシェヴィキは、このブルジョア革命において臨時政府は解放されつゝある國民の對立諸階級の間の相互の鬪爭を統制しなければならない、たゞ革命的發展を前進せしめるのみならず、また資本主義制度の基礎を脅かす要素に對して鬪爭しなければならない、と考へた。

メンシェヴィキのこの方針はその後ブルジョアジーへの直接の援助に轉化した。プロレタリアー

トが社會主義革命の名において暴動の旗を敢て揭げたすべての國において、メンシェヴィキはブルジョアジーの忠實な犬として不變的に進出した。そしてさしあたりメンシェヴィキは『社會民主黨のために全革命期を通じて革命の進行中に交替する政府に對して左翼的革命的反對派の立場を保持すること』を勞働者階級に勸告した。メンシェヴィキはかゝる立場が『政府權力が社會民主黨の掌中に落ちる時には、社會民主黨を政府權力の利用に最もよく準備するものである』と勞働者に說得した。換言すれば、權力を自己の手に掌握しようと努力する勿れ、權力の奪取にあらゆる手段を盡して反對せよ。同時に如何樣にかしてこの權力は『掌中に落ちるであらう』と。プロレタリアートは、權力が天から落ちないこと、勞働者階級の手に偶然落ちないことを知つてゐる。勞働者階級は權力をブルジョアジーからたゞ奪取し、たゞ武裝鬪爭によつてのみそれを獲得することができる。そしてブルジョアジーが社會民主主義者を權力の地位に據えることに同意するとすれば、彼等は、メンシェヴィキがブルジョアジーの意思を實行するであらう、プロレタリア的政策ではなくて、ブルジョア的政策を行ふであらうといふことを確信して、さうするのである。

それと同時にメンシェヴィキは權力の部分的奪取と（共和制についてはメンシェヴィキ會議は言及さへしなかつた）地方における革命的コンミューンの形成との觀念を提起した。この觀念をレーニンは自己の小册子『二つの戰術』においてひどく嘲笑した、『都市または地方における部分的「權力奪取」の「合目的性」は全國家の臨時革命政府への參加と如何に相違するか？　一月九日事件が行はれたペテルブルグの如きは、「都市」の中には入らないであらうか？　多數の國家以上のものであるコーカサスは地方の中に入らないであらうか？……何時から社會民主主義者が無政府主義者の仕事、卽ちプロレタリアートの注意と目的とを分散させること、それを「部分的なもの」に向けて、一般的なもの、統一的なもの、全體的なものおよび完全なものに向けないことを引き受けてゐるのか？*』

* レーニン、第八卷、八〇—八一頁。

メンシェヴィキは暴動の問題においてストルーヴェの自由主義的、『解放的』態度の捕虜から離れることができなかつた。『革命を組織せよ』といふスローガンに對するメンシェヴィキの鬪爭および『革命の解放』といふ彼等の說敎は、何を意味したか？　革命におけるプロレタリアートの前衞的役割に對する組織的敵意、黨の指導的役割の否認、階級への黨の溶解、自然發生に對する屈從以外の何物でもない。『自然發生に對する屈服の理論は、——とスターリンはいふ、——自然發生的運動に意識的、計畫的性質を與へることに決定的に反對し、それは黨が勞働者階級の先頭に

立つこと、黨が大衆を意識性の水準に高めること、黨が運動を指導することに反對し、――それは運動の意識的要素が運動が自己の道を進むのを妨げないことに贊成し、それは黨がたゞ自然發生的運動に耳を傾け且つその尻尾について行くことに贊成する。自然發生の理論は運動における意識的要素の役割を控へ目に見る理論、「追隨主義」のイデオロギー、あらゆる日和見主義の論理的基礎である*』と。

* スターリン、レーニン主義の諸問題、一八頁。

革命の組織の任務に對するメンシェヴィキの否認と技術としての暴動に關するマルクス＝エンゲルス＝レーニンの學說に對する鬪爭は、プロレタリアートの黨が革命の先頭に立つことに成功する場合および特に鬪爭が勝利を得る場合に、メンシェヴィキによつて描き出された恐怖によつて喚び起されたものである。『考へて見給へ、讀者よ、――とマルチノフの「二つの獨裁」には述べられてゐる、――レーニンのユートピヤの實現の瞬間を。考へて見給へ、その黨員がたゞ職業的革命家のみの參加に狹められた黨が、「全人民的な武裝暴動を準備し、任命し且つ實行する」ことに成功したと。全人民の意思が今や革命の後正にこの黨を臨時政府に任命するであらう、といふことは明かではないか？　人民が他のいづれの黨でもなくて、正にこの黨に革命の當面の運命を委任するであらう、といふことは明かではないか？　この黨が、以前人民に向つて述べた確信を欺瞞することを欲しないで、自己の手に權力を奪取し、そして革命的方策によつて革命の勝利を固めるまで、それを保持することを餘儀なくされ、義務づけられるであらう、といふことは明かではないか？』と。

自由主義的ブルジョアジーへの順應、餘りに急進的な勝利した革命の恐怖（だが完全な勝利はプロレタリアートの前衞的役割なしには考へられず、そしてこのことはそれでまた、プロレタリアートが自己の指導者の指導の下に、自己の戰鬪的な、鍛錬されたボルシェヴィキ黨の指導の下に進むことを豫想する）は、實に、ボルシェヴィキの『プランキー主義』だの『陰謀主義』だの、『ジャコビン主義』だのといふメンシェヴィキの追隨主義的慟哭を喚び起した。技術としての暴動に對するボルシェヴィキの見解と暴動に對するプランキー主義的宗派主義的態度との相違について、ボルシェヴィキは何といひ、レーニンは何といつたか？　論文『マルクス主義と暴動』（一九一七年九月）の中にレーニンはかう書いた、『技術としての暴動に對する態度の故にマルクス主義をプランキー主義を非難するとは！　ただ一人のマルクス主義者も、正にマルクスこそが最も決定的に、正確に、非難されないやうにこの點について發言し、そして暴動を正に技術と呼び、暴動は技術

として取扱はなければならないこと、最初の成功を奪取して、成功から成功へ進み、敵に對する攻撃を中止することなく、敵の狼狽を利用等々しなければならない、と述べたことを否認しない時に、眞理のこれ以上驚くべき歪曲がありうるであらうか。

『暴動は、成功するためには、陰謀や、黨にではなくて、先進的階級に立脚しなければならぬ。これが第一。暴動は人民の革命の昂揚に立脚しなければならぬ。これが第二。暴動は、人民の先進的隊伍における積極性が最大であり、敵の隊伍および革命の弱い、中途半端な、非決定的な友の隊伍における動搖が最も強いやうな、成長する革命の歴史における轉換點に立脚しなければならぬ。これが第三。正に暴動の問題の提起のこの三つの條件によつて、マルクス主義とブランキ主義とは異つてゐる*』。

* レーニン、第二十一卷、一九五頁。

革命的農民委員會によるすべての地主所有地の沒收に關する明瞭な提議を提出した、第三回ボルシェヴィキ大會とは異つて、メンシェヴィキ會議は、『農民の中における活動について』の問題の提起のみに止まり、農民を革命の推進力と見ないで、その中において時に活動を行ふことを『妨げない』ところの多くの人口層の一つと見た。メンシェヴィキ會議は地主所有地の奪取のための農民委員會の組織に反對して、農民に來るべき憲法議會の土地問題に關する決議を平穩に待つべきことを勸告した。

一九〇五年のメンシェヴィキの第一回全露會議は、我々が當面してゐるのはたゞ社會民主黨の右翼のみではないことを示した、――メンシェヴィキにおいて我々は形成された黨に當面してゐた、そしてこの黨は、當時、第一革命の時代にすでに、勞働者階級へのブルジョア的影響の運搬者となり、勞働者階級を自由主義的ブルジョアジーの附屬物たらしめ、革命の先進的前衞の革命的戰術の代りに、ブルジョアジーに有利な追隨主義の戰術をプロレタリアートに押し付けようとした。勞働者階級の若干の層、都市の小市民の信賴に立脚しつゝ、メンシェヴィキが第一革命のプレーキの役割を演じ、勞働者階級の革命的エネルギーを鈍らせ、プロレタリアートの明白な針路を朦朧たらしめ、個々の部隊を革命的な道から引離したことは、少しも疑ひない。

第五章　參考文獻

レーニン、一九〇五年の革命に關する報告、全集、第十九卷、三四三―三五七頁。
レーニン、貧農に與ふ、全集、第五卷、二六一―三一七頁。
レーニン、旅順口の陷落、全集、第十二卷、四四―五〇頁。
レーニン、ゼムストヴォ運動と『イスクラ』の計畫、全集、第七卷、一―二〇頁。

レーニン、ロシアにおける革命の發端、全集、第七卷、七九—八一頁。
レーニン、組織委員會の形成およびロシア社會民主勞働者黨第三回臨時大會の召集に關する通告、全集、第七卷、二一—二三頁。
レーニン、ロシア社會民主勞働者黨第三回大會（ロシア社會民主勞働者黨第三回大會におけるヴェ・イ・レーニンの演說および決議草案）、全集、第七卷、二四七—二九二頁。
レーニン、ロシア社會民主勞働者黨第三回大會の決議、全集、第七卷、四三〇—四三八頁。
レーニン、三つの大會、全集、第七卷、三〇一—三〇六頁。
レーニン、社會民主主義革命における社會民主黨の二つの戰術、全集、第七卷、二七—一二七頁。
レーニン、社會民主黨と臨時革命政府、全集、第七卷、一八三—一九五頁。
レーニン、革命軍と革命政府、全集、第七卷、三七九—三八七頁。
スターリン、ボルシェヴィズムの歷史の若干の問題について。レーニン主義の諸問題、六〇八—六一三頁。

第六章　一九〇五—一九〇七年の革命の進行中における　ボルシェヴィキ黨の戰術の點檢

武裝暴動への途上

一月九日事件は全ロシア、即ちポーランド、沿バルト海地方、ドンバス、コーカサス、ウラル、サラトフ地方——大衆的プロレタリア運動の最も明瞭な中心地の數百萬の勞働者大衆を激昂させた。

これらの地方においては、往々ペテルブルグにおける血腥い一月事件に劣らない血腥い事件が勃發した。ポーランドでも、コーカサスでも、その他の地方でも、たゞ勞働者のみならず、農民もまた起ち上つた。

我々はすでに、個々の地方において大衆の憤怒が耐へ難い民族的抑壓によつて强化されたことを指摘した。

ツァール政府はこの大衆運動の發展を阻止しようとしたが成功しなかつた。憲兵は一月九日の

後似而非勞働者の中からツァールへの滑稽な『代表者』を組織し、ツァールは彼等を宮中に引見し、『よろしく賴む』といふやうな、何の意味もない愚かな數語を述べた。元老院議員シドロフスキーを議長とする勞働問題に關する特殊な委員會（シドロフスキー委員會）が任命された。

我黨はこの委員會に關聯して勞働者の間に廣汎なカンパニヤを行ひ、勞働問題が我國のすべての爾餘の政治問題から離れて解決されえないことを勞働者に說明した。ボルシェヴィキはこの委員會への工場からの全權委員の選出カンパニヤを專制政治に對する廣汎な煽動のための勞働者階級の組織のカンパニヤに轉化した。ボルシェヴィキのペテルブルグ委員會は多くの政治的要求を纒め上げた。シドロフスキー委員會は勿論これらの要求を滿足させえなかつた、何故ならそれらの實現のためには專制政治を顚覆しなければならなかつたからである。シドロフスキー委員會は革命運動によつて掃蕩されたが、勞働者運動は成長した。

二月十八日ツァール政府は、自由主義的社會層を鎭め且つ農民に賜物を投じようと欲して、謂ゆる『ブルィギン協議會』を組織した（ブルィギンは內務大臣であつた）。このブルィギン協議會は、八月六日發表され、我革命史上『ブルィギン・デューマに關する法令』として知られてゐる、國會に關する法令を作成した。自由主義者はこれを支持し、メンシェヴィキは曖昧な立場を取つて、勞働者を迷はせたけれども、國會は開かれようとは思はれなかつた。何故なら革命の彼がそれを蔽うたからである。このデューマにおいては勞働者は全く選擧權を剝奪されてをり、農民の投票は地主、商人および僧侶の投票の中に沒入してゐた。

當時全ロシアは極東における幾多のロシアの陸海軍の大敗北によつて興奮せしめられてゐた。一九〇五年二月ロシア軍は奉天において挽回し難い敗北を蒙つた。情勢を救濟するために、ツァール政府は全艦隊を集めて、それを極東へ送つたが、この艦隊は殆ど全部對島附近の戰鬪において滅亡した。軍艦の一部分は日本人に捕獲された。それは殆ど全人口におけるツァール政府に對する不滿を深めた。

勞働者の大衆的同盟罷業はこの頃非常に執拗になつた。イヴァノヴォ＝ヴォズネセンスクにおける同盟罷業は七十二日間繼續した。この同盟罷業は廣汎な大衆を組織し、彼等を政治的に敎育した。そこには最初の勞働者代表ソヴィエトが發生した。かゝるソヴィエトはこの頃勞働者運動の他の中心地、特にウラルに發生し始めた。その後それらは全國に設立された。大衆的政治的同盟罷業は方々において軍隊や警察との公然の衝突に移行した。ロッヅにおける同盟罷業は武裝的衝突に轉化し、數日間バリケード戰鬪が繼續した。

オデッサにおける總同盟罷業は黑海艦隊の最初の革命的暴動の瞬間と一致してゐる。すでに一九〇五年前に、こゝかしこで、不十分ながらも、軍隊における革命的活動が行はれてゐた。一九〇五年の大衆運動は、軍事的活動や、軍隊、卽ち陸軍および海軍における活動の問題を提起した。黨の活動のお蔭で到るところに軍事的組織が發生し、水兵や兵士のための機關紙が作られ、兵士や水兵宛の特殊なビラが發行され、陸海軍の多くの部分にサークルが作られた。極東における陸海軍の敗北は疑ひもなく、陸海軍に對して革命的役割を演じた。この敗北は、一方では、兵士や水兵の愛國心にひどく打擊を與へ、他方では、政府の完全な戰爭遂行無能力を示した。全國に廣く氾濫した農民運動が、兵士や水兵に影響を及ぼし且つ軍隊の革命的氣分および不滿を强化したことは少しも疑ひない。

『ポチョムキン』における暴動はこの不滿の最初の大衆的表現であつた。暴動を起した水兵は彼等に最も憎まれてゐた幹部に對して復仇し、そして當時總同盟罷業が行はれてゐたオデッサへ、戰鬪艦に乘つて他の數隻の軍艦と共に到着した。レーニンはこの暴動に巨大な意義を賦與した。彼は特に決定的な指示を與へてワシリエフ・ユージンを派遣し、彼をこの運動に參加させ、それを地方守備隊や農民の運動と連絡させようとした。しかしワシリエフ・ユージンは、戰鬪艦『ポチョムキン』がすでにオデッサ市から去つた後に、そこへ到着した。けれども、この運動に參加した水兵および個々の社會民主主義者の英雄主義にも拘らず、それは十分な支持を受けず、この時正しい指導を持つてゐなかつた。黑海艦隊の殘りの諸艦船がそれに參加しなかつた革命的戰鬪艦は、ルーマニアの海岸へ航行し、水兵をコンスタンツァに上陸させなければならなかつた。その後ツァール政府の手に陷つた水兵達は公判に附せられ、――一部は處刑され、一部は懲役に處せられた。しかし暴動の事實自體は排他的に重要な意義を有し、勞働者、農民および特に兵士および水兵大衆自身のために、暴動の日における兵士および水兵の勞働者階級への結合に關する思想を一層理解し易く且つ親しくし、革命軍の組織の問題を日程に上せた。

政府や反動的諸階級が全く何もしないでゐた、といふ譯ではない。否、彼等は自己流に組織し且つ準備したのである。この時期にはブルジョアジーの黑百人組的、反動的諸組織、『ロシア國民同盟』、『ミハイル・アルハンゲル同盟』、『公正秩序黨』が發生した。黑百人組はインテリゲンチヤおよび第一番に勞働者に向けられた虐殺(ポグロム)を組織した。

政府は民族的排外主義、民族的憎惡を煽動し、あらゆる暗の勢力を蹶起させ、都市および地方においてユダ人虐殺を組織した。コーカサスにおいてはタタール人とアルメニア人とを嗾しかけ、

アルメニア＝タタール人虐殺を組織した。

諸都市において勞働者は眞面目に自己防衛を考へ始め、最初の民兵——最初は自己防衛のために——を作り出した。この最初の民兵は、その後一九一七—一九二〇年の大内亂を征服した赤軍の基礎を置いたところの、一九一七年における赤衞軍の役割に類似した役割を演ずべく運命づけられてゐた。

勞働者の夏の同盟罷業は農民運動にも、同じくまた陸海軍の運動にも反響した。農民運動は鄕里の農村へ行政的に追放された罷業勞働者の影響を受けて強化された。陸海軍における動搖が強化された。そして勞働者が久しくプロレタリアートに緣遠い勢力の影響下にあつたところ、例へば、長い間ズバトフ派が勞働者階級の注意を革命から引離してゐたモスクワにおいてさへ、勞働者運動は今や、大衆の蓄積された巨大な革命的エネルギーの出口を求めるところの大衆的罷業革命運動となつて流れ出た。この時代には到るところに勞働組合組織が設立された。實際、最初この活動は種々のインテリゲンチヤ的職業——技師、醫師、辯護士、鐵道および郵便＝電信從業員の間に最も成功的に行はれた。この時代の勞働組合は經濟的要求の擁護と並んで多くの政治的要求を提出した。

發展した革命運動に壓迫されて政府は學生に讓步して、高等學校へ謂ゆる自治を提起した。革命運動に精力的に參加した學生層は、一九〇五年秋、諸都市のすべての大學において相對的な自由を利用して、高等學校の扉を人民の集會の組織のために開放し、そしてこれらの集會は、初めて熱烈な政治演說を聞いたところの、勞働者および都市小ブルジョアジーから主に成り立つてゐた。

一九〇五年十月の總同盟罷業

九月十九日モスクワにおいて印刷工の同盟罷業が開始され、それは忽ちただモスクワとペテルブルグのみならず、多くの他の諸都市の印刷所を卷きこんだ。印刷工の運動は諸工場において支持された。九月末にはモスクワ＝クルスク鐵道およびモスクワ＝ウラル鐵道において運動が始まつた。九月に形成された全露鐵道勞働組合がこの運動の指導を引き受けた。

十月七日に始まつたモスクワ鐵道分岐點の同盟罷業は、忽ちたゞすべての主要な鐵道分岐點を卷きこんだのみではない、——郵便局と電信局、工場、小勤務員、學生、辯護士や技師や醫師のインテリゲンチヤ組合が、同盟罷業に參加した。十月罷業は、最も遠隔な地方に至るまでの全國

と最も後れた層に至るまでの全勞働者とを包括したところの、總同盟罷業に發展した。勞働者階級は實際に革命を發展させる主導者、指導者となり、自由主義的ブルジョアジーは尻尾に附いて行つた。十月の總同盟罷業はプロレタリアートの力を示した、そしてツァール政府をして十月十七日の宣言を以て進出することを餘儀なくさせた。

十月十七日の宣言においては、人格の實際の不可侵を基礎とする市民的自由、信仰、言論、集會および結社の自由の『確乎たる』基礎を人民に與へることが約束され、立法議會を召集すること、八月十九日（六日）のブルィギン・デューマ法令において選擧權を剝奪された人口階級を選擧に吸引することが約束された。ウィッテ伯が內閣議長に任命され、彼は資本家と協定して、外債による金融的援助を彼等に約束した。この時代に發生した十月黨は、ブルジョアジーとツァール政府とのこの協定をその綱領の中に反映した。政府は勞働者階級に對して欺瞞策を行ひ、政府が廣汎な人民大衆の利益の擁護者であることを示さうと努めた。農民は狹量な約束の外に何一つ受取らなかつた。廣汎な政治的大赦が期待されたが、十月二十一日に政治犯の狹量な大赦が行はれ、それと同時に政府は多くの血腥い黑百人的虐殺を組織した*。そしてこの虐殺において數千人が殺され、一萬人以上が負傷した。革命家が虐殺され、ユダヤ人虐殺、アルメニア＝タタール人虐殺が組織され、學生が虐殺され、數百人の人々が集會に集つてゐる家が燒打された。當時次の流行歌が行はれた——

ツァールは吃驚して
宣言を發した——
死者には自由を與へ、
生者は捕へよ、と。

* 當時モスクワにおいて監獄から解放されたばかりの有名なボルシェヴィキ、ニコライ・エルネストヴィチ・バウマンが黑百人組に殺された。彼の名によつてモスクワにはバウマンスキー區ができ、そこには彼のために紀念碑が建てられた。

勞働者は民兵の設立に更に精力的に着手しなければならなかつた。大衆的政治的同盟罷業によつて奪取された十月十七日の最初の勝利が、彼等からヨリ以上の努力、ヨリ以上の鬪爭を要求することは、勞働者には明瞭であつた。

一九〇五—一九〇七年の農民運動

農民運動は一九〇五年一月事件の後新らしい刺戟を受けた。一九〇五年一月九日『血の日曜日』の後罷業勞働者の農村への大衆的追放は、多くの可燃性材料を不滿な、激昂した、叛亂的農民大

衆の中へ流し込んだ。すでに一九〇五年二月農民の動搖がオルロフ縣およびツーラ縣に始まり、それはその後チェルニゴフ縣に移り、次々と縣から縣、地方から地方を包括した。運動形態、闘爭方法は一九〇三―一九〇四年と殆ど同じであつた。卽ち領地の破壞、穀倉や食糧品の奪取、領地の放火、木材の伐採。しかし革命の進行、勞働者の同盟罷業闘爭および政治的進出は農民層に革命化的影響を與へた。春から地主所有地、そしてこゝかしこで敎會および寺院所有地の『勝手な』暴力的耕作、地主所有地における家畜の放牧、草地の占領が始まつた。運動は沿バルト海地方、北コーカサス地方、ポーランドや、トヴェル、サラトフその他の數縣において特に强く且つ組織的であつた。こゝでは我がボルシェヴィキ組織が非常に顯著な役割を演じた。『ルッスキエ・ヴェードモスチ』――當時の自由主義新聞は――社會民主主義者についてかう書いた、『社會民主主義者はヨリ大なる同情を得てゐる。彼等は殆ど毎日諸所で會合を開き、そこで演說を行つた』と。ウクライナでは社會民主主義同盟『スピルカ』が活動し、それはまた農民問題に關する論文をも揭載した新聞『プラウダ』をウクライナ語で發行した。トヴェル、ポルタワ、チェルニゴフ、エカテリノスラフその他の諸縣の地方委員會は大低ビラや宣言書を發行した。黨中央委員會は農民に與へるメッセージ、『農民諸君に訴ふ！』その他を發行した。農村においては集會や示威運動が組織され、農民サークル、地區および縣委員會が組織された。一九〇五年の夏には多くの地方において組織的な社會民主主義的同盟罷業が行はれた。

一般に『同盟罷業』といふ言葉が、特に一九〇五年十月罷業の後、農民の間に非常に普及された。

農民運動の他の普及された形態は地主のボイコットであつた。ボイコットとは、地代の引下げや、あれやこれやの土地または草地の農民への讓渡や、日傭勞働者の地位の改善等々に關する農民の要求を地主が滿足させるまで、農民が地主との如何なる相互關係をも一切拒否したことであつた。非常に屢〻農民は、地主が要求を滿足させるまで、すべての日傭人およびすべての僕婢に、地主の費用で生活しつゝ、彼等の仕事から手を引かした。この運動が如何に大きなものであつたかは、一九〇五―一九〇六年の秋冬の間に、たゞ十九縣のみにおいて損害を蒙り破壞された損失が、官廳資料によれば、二千九百萬金ルーブルに達したことによつて見ることができる。地主の屋敷の破壞されたものは、サラトフ縣二百七十二、タンボフ縣百三十、オルロフ縣八十四、ペンザ縣三十、クルスク縣一千九百二十七、ウクライナ二百以上、沿バルト海地方二百六十であつた。

如何に農民大衆の運動が都市における勞働者運動に續いて波をなして進行し、そして部分的には陸軍における兵士と海軍における水兵との暴動と一致したかを、我々は追跡することができる。一九〇六年の秋以來農民運動は著しく衰微した。一九〇七年末にはそれは非常に些かなものになつた。勞働者階級よりも組織の劣つてゐた農民層は、反動の攻撃に對しても抵抗力が劣つてゐた。

我々はすでに農民同盟の形で自己の組織を設立しようとした農民の企圖に言及した。農民同盟は著しく社會革命黨（部分的にはカデット）の影響下にあつた。それは主として富裕農民層を結合してゐた。全露農民同盟は一九〇五年末にはまだ若干の役割を演じた。けれども農民同盟の中央機關が破壞された後、それは農民大衆の中に重要な組織を有しないことが暴露され、異つた社會的グループの農民を結合しようとした試みの結果内的矛盾と意見の相違とによつて分裂し、そして富裕クラーク分子はこの同盟を自己の組織に轉化しようと志した。農民同盟は事件の進行に對して何等の著しい影響をも持たなかつた。

しかし農民同盟は第一國會へすでにかなり多數の代議士團を送り、彼等は『勤勞者團』といふ名で進出した。この『勤勞者團』は富裕農民層の側を支持し、一九〇五―一九〇七年の革命運動に參加した革命的農民大衆の側を支持しなかつた。

それにも拘らず我黨は農民同盟を農民グループとして取扱つて、メンシェヴィキが希望をかけてゐた自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーの黨――カデット黨とは別に取扱つた。我黨は、その中において貧農＝中農大衆の影響を強化するために、この農民グループとあれやこれやの戰鬪的協定を結ぶことが可能だ、と考へた。

革命に對する自由主義者の態度と我々の態度

一月九日の勞働者の進出は社會のすべての階級に強烈な印象を與へた。プロレタリアートの階級敵でさへ、國家的秩序における著しい變化と勞働者および農民のあれやこれやの讓歩なくしては、開始された革命運動が鎭まらぬことを理解した。そして地方および都市の活動家、資本家および地主さへもの一部によつて代表されたロシアの自由主義的ブルジョアジーは、革命的事件に壓迫されて、――だが決して自由主義者の宴會におけるメンシェヴィキの演說に壓迫されてではなく、――政治的および經濟的改革の覺書や案を以てツァール政府に向ひ始めた。貪慾な階級的利益は自由主義者にモスクワの一九〇五年地方活動家二月大會において彼等の決議を囁いた。そしてそ

こにおいて彼等は、農民は買戻しによつて土地を測り加へなければならないと決議した（當時の有名な文句、『農民は土地を測り加へなければならぬ、然らざれば彼等が我々を屠殺するであらう』。カデットの綱領の有名な條項は『公正な評價による買戻し』であつた、――勿論『公正』は所有主の、地主の公正を豫想した）。一九〇四年十一月大會に比較すれば、自由主義者は一歩前進し、普通選擧權の要求を提起した。卽ち勞働者階級の襲擊が彼等に『左傾する』ことを餘儀なくさせたのである。

一九〇五年六月十九（六）日、トルベッキー公爵を先頭とする十四人より成る自由主義者の代表團がペテルゴフ宮殿のツァールの許へ現はれた。憲法の支持者たる自由主義者の建白書にはかう述べられてゐた、『陛下よ、猶豫し給ふ勿れ。國民的偉大さの試錬の恐るべき時我等の責任は神とロシアの前にあり』。ツァール（および自己）を神の前における『責任者』と考へた、この農奴的代表團は、對馬附近における日本人によるロシア艦隊の擊滅の後に現はれた。それはツァール政府と取引を結ぶために、宮殿へ現はれた、何故ならカデット黨員＝自由主義者の綱領は、共和制無用、農民への土地返還無用、『上院』において『紳士』が萬事を指導するために、二院を有すること、といつたやうな取引を期待したからである。正に彼等についてレーニンは論文『プロレタリアートは闘爭し、ブルジョアジーは權力に忍びよる』を書いたのである。

十月時代に自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーの一部はこの取引を結び、『十月十七日黨』を設立した。自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーは革命の勝利の方を遙かに恐れ、そしてブルジョア的『秩序』さへ保存されゝば、ツァーリズムの厭ふべき反逆行爲と和解しようと用意してゐた。十月暴動の敗北の後このブルジョアジーはモスクワにおいてロシア勞働者の最初の暴動の鎭壓者および征服者――ドゥバソフ提督を歡迎した。

自由主義者の行動は彼等の役割に對する我々の評價をも彼等に對する我々の態度をも完全に確認した。技師や醫師がそれに加入した、一層民主主義的な自由主義者の一部（『同盟の同盟』）――謂ゆる勤勞インテリゲンチヤは、一九〇五年に革命運動に參加し、その右翼を形成したが、他の部分は反動と直接の取引を結んだ。勞働者階級と農民層との革命的襲擊は自由主義的ブルジョアジーをして自己の反革命的本質を示すことを餘儀なくさせた。

その後の出來事は自由主義的ブルジョアジーに對するボルシェヴィキの方針の正しさを更にヨリ多く確認した。

一九〇五年の革命におけるソヴィエトの意義

すでに一九〇五年夏ソヴィエトが大産業中心地に發生した。最初のソヴィエトはイヴァノヴォ＝ヴォズネセンスクに發生した。それは當時ウラルにも組織された。十月事件の絶頂において、十月の前半、勞働者代表ソヴィエトがペテルブルグに發生した。インテリゲンチヤ的政治的勞働組合の代表者——技師、醫師、辯護士等々もまた參加し、他の小ブルジョア的要素の代表者も少くなかつたこの勞働者代表ソヴィエトは、しかし、事件の進行中に革命的役割を演じなければならなかつた機關であつた。

ペテルブルグ勞働者代表ソヴィエトはペテルブルグにおける政治的總同盟罷業を指導し、侵略的な方法で言論の自由を實現し、革命的な方法で『勞働者代表ソヴィエト報知』を出版し、八時間勞働日の申告手續の實行を布告し、十一月二日『野戰軍法會議を廢止せよ！』、『死刑を廢止せよ！』といふスローガンの下に政治的同盟罷業を行つた。黑百人組および政府の側からの虐殺的氣分および計畫の存在を見て、ペテルブルグ・ソヴィエトは大衆に武裝せよと呼びかけ、自衞民兵の組織を促進した。强行的に準備されてゐたペテルブルグにおける虐殺は、これによつて豫防された。ペテルブルグ勞働者代表ソヴィエトは租稅、土地買戻金の支拂を拒絶せよと呼びかけた。賃銀および給料を金で支拂へといふ要求が提起された。貯蓄銀行の預金を引き出せと呼びかけられた。勞働組合の組織を促進し、直屬の『失業委員會』を設立した。それ以上のその存在はたゞ一つの意義を持つてゐた、卽ち暴動の組織に轉化すること、がこれであつた。けれどもペテルブルグ勞働者代表ソヴィエトはたゞ勞働者（およびインテリゲンチヤ）代表ソヴィエトたるにすぎず、それはペテルブルグ軍管區の軍隊の革命的氣分を利用することができず、それはこの仕事——軍隊における活動——の方面に餘りにも注意を向けること少く、そして最初は、ペテルブルグから軍隊を撤退せよ、といふトロツキーによつて與へられたスローガンの如き誤つたスローガンを與へた。しかし多くの都市においては——例へばモスクワにおいては——遙かに大なる役割を演じた勞働者および兵士代表ソヴィエトがこの時代に發生した。外バイカル地方においてさへ、勞働者、兵士およびカザック代表ソヴィエトが發生した。

政府權力が存在した中心地たるペテルブルグにおける勞働者代表ソヴィエトの形成は、他の革命的中心地における勞働者代表ソヴィエトの設立事業にとつて巨大な意義を持つてゐた。ツァール政府は、その政府機構と並んで事態の進行と共に愈〻益〻革命的權力の機關となるところの他の

機關が存在することに長く耐へることができなかつた。だからツァール政府はペテルブルグ勞働者代表ソヴィエトの虐殺のためにあらゆる手段を取つた。この虐殺は勞働者、農民、兵士および水兵大衆の益〻發展する運動の情勢の下に、モスクワその他の地方における十二月暴動の前夜に行はれた。勞働者の方へ向ひ且つ彼等の鬪爭へ結合することを決議した農民同盟が、當時積極的に進出し始めた。兵士、農民、水兵および勞働者の叛亂と暴動とが四面に勃發した。かゝる情勢の下に、諸都市に形成されたソヴィエトを解散し、革命的組織の指導者を逮捕し、全露農民同盟の幹部會を逮捕し、そして先づ第一にペテルブルグ勞働者代表ソヴィエト執行委員會を逮捕すべき命令が發せられた。政府は同盟罷業や勞働組合に關する幾多の懲罰規定を發布し、幾多の組織を粉碎し、暴動を起した大衆を無容赦に片附けよといふ殘酷な命令を發した。粉碎されたペテルブルグ勞働者代表ソヴィエトは今一度勞働者を政治的總同盟罷業に召集しようとした。しかしすでにこの限度は過ぎてゐた。運動は暴動に移つた。

すでに當時、一九〇五―一九〇六年に、ボルシェヴィキがソヴィエトの全く正しい評價を與へたこと、すでに當時彼等がソヴィエト遊びを拒絶したことを見るのは、困難ではない。このソヴィエト遊びをばメンシェヴィキは多くの場所において、一九〇五―一九〇六年にも、またその後一九〇七年にもなし、そしてロシア、次いでドイツその他の國におけるソヴィエトを無權力の議會またはその無權力の附屬物に轉化しようと志したのである。

ボルシェヴィキはソヴィエトを暴動の機關と見た。そしてそれは多くの場合に權力の萠芽的機關に轉化しえたしまた實際に轉化した。メンシェヴィキはソヴィエトを自治機關と見た*。ボルシェヴィキとメンシェヴィキとの一九〇五年におけるソヴィエトに對するこの異つた態度は、ボルシェヴィキが優勢であつたソヴィエトの活動に刻印を押した。そこではこれらのソヴィエトは暴動組織の中心、暴動を準備した勞働者、兵士および水兵の參謀本部となつた。多くの場所において（アラバイフスクその他の工場地方において）すでに一九〇五年の夏勞働者および農民代表ソヴィエトが組織されたウラルでは、黨はソヴィエトを通じて勞働者および農民の運動を指導した。すでに當時ソヴィエトは黨から大衆への調革の役割を演じた。しかし事實上權力がツァール政府の掌中にあつた時に、メンシェヴィキがソヴィエトを無權力的な『自治機關』に轉化しようと志したのに反して、ボルシェヴィキはソヴィエトをプロレタリアートと革命的農民層とによる權力の奪取の機關に轉化しようと志した。

* トロツキー派はその後黨『內』に反對派のブロックを組織して、一九二七年の初め、ソヴィエトにとつてまだ相應する

前提が存在しなかつた時、ソヴィエトがこの時代の支那革命の條件の下においては權力機關にも暴動機關にもなりえなかつた時、支那におけるソヴィエト組織のスローガンを提起した。然るに支那の勞働者や農民が決定的にソヴィエトのために闘爭し始めた時、トロツキー派は、ソヴィエトのスローガンは時機尙早だ、憲法議會のために闘爭しなければならないと宣言した。

一九〇五年の十二月武裝暴動

自由主義的ブルジョアジーの一部（『十月十七日同盟』）と取引を結んで、政府は全線にわたつて決定的な攻擊に轉じた。この攻擊はすでに容易な仕事ではなかつた。暴動の根據地、革命運動の根據地は全國に擴がつてゐた。それは益〻鮮やかに、益〻執拗に炎上し、それらは益〻新しい大衆を摑み、益〻勞働者および農民大衆の深みにおいて最も新しい支持者を見出した。政府は最も危險な點に攻擊を集中した。ペテルブルグ勞働者代表ソヴィエトの粉碎、農民同盟幹部會の逮捕、農民暴動に包まれた多くの縣における戒嚴狀態の布告、『逮捕者を持つな』、『同情者を容赦するな』といふ殘酷な命令、革命運動の首領の逮捕やソヴィエトおよび罷業委員會の解散に關する命令は、プロレタリアートの前に次の問題を全面的に提起した、――或ひは戰はずして屈服し、かかる困難およびかゝる犧牲を以て征服されたすべてものを拋棄して、地下へ入るか、或ひは一戰を試み且つこの戰闘において勞働者階級の革命的力を示すか、である。廣汎な勞働大衆と結びついてゐたモスクワ勞働者および兵士代表ソヴィエトは、武裝暴動のために積極的な準備をした。モスクワ・ソヴィエトは、政治的總同盟罷業を武裝暴動に轉化するために、前者を宣言することが決議された、十二月五日および六日のすべての集會において決定的に表明されたところの、勞働者階級の階級的意思を考慮に入れてゐた。

モスクワのプロレタリアートは、暴動を開始するに際して、自己の戰闘的組織――約一千人の民兵を持つてゐたが、その大半はボルシェヴィキ黨に屬し、その殘りは社會革命黨およびメンシェヴィキ・グループに屬してゐた。勞働者階級に壓迫されてメンシェヴィキもまた戰闘的スローガンを採用するかの如き外觀を裝はなければならなかつた、そしてメンシェヴィキは民兵の設立に參加しなければならなかつた。實際、その後彼等はこれを後悔して、十二月暴動を拒否した。ユー・ラーリン（當時メンシェヴィキ）はロンドン大會において、一九〇五年十二月事件において『メンシェヴィキがメンシェヴィキ流に行動しなかつた』ことを後悔した。指摘しなければならないことは、暴動問題に關する決議が狹い陰謀團においてではなくて、大衆的工場會議において行はれ、そこで勞働者自身が暴動に對する贊否を發言し且投票したことである。壓倒的多數は暴動に贊成し

た。政治的總同盟罷業が宣言され、それは毎日益〻多くの大衆を卷きこみ、勞働者のみならず、勤務員をも包括した。けれども同盟罷業はなほ完全でなく、それはペテルブルグにおいては不十分にしか支持されず、そしてこのことが最初から暴動の成功の機會を弱めた。モスクワではたゞ『勞働者および兵士ソヴィエト報知』だけが出てゐたにも拘らず、郵便はペテルブルグの新聞を提供した。鐵道（ニコライフスク鐵道）は政府の掌中に殘つてゐた。この鐵道の運輸は停止されず、そして政府はペテルブルグからモスクワへ近衞聯隊を暴動鎮壓のために送ることができた。モスクワ自體においては守備隊が動搖した。暴動の前夜ロストフスカヤ擲彈兵聯隊その他において革命的進出が行はれた。部分的にはこの運動による支持を期待して暴動が開始されたのである。

今や發表されたツァール政府機關の記錄は、初めの數日における政府の恐慌と狼狽、一方ではモスクワを失ふ恐怖、他方では首府の運命に對してペテルブルグ自體を政府が信じなかつたこと、そこから軍隊を送り出す恐怖を證明してゐる。けれども漸く十二月十日に最初のバリケードは現はれた。環狀に、光線形に建設されたモスクワは二つの主要なバリケードの環によつて蔽はれた。ツァール政府は首府を砲擊することを躊躇しなかつた。政府は叛亂者の勢力に數倍も優れた軍隊を持つてゐた。數千人の勞働者が暴動に參加し、小市民、往々小商人さへもが彼等を援助した。これは、勞働者の暴動がモスクワの若干の小ブルジョア層においてもまた同情を得たことを證明してゐる。十二月十九日まで間斷なき戰鬪が行はれた。暴動の指導機關は戰鬪の前夜一部分逮捕され、一部分は隔離された。武裝的進出は、互ひに連絡を絶たれた個々の區の暴動に轉化した。統一的な指導的中心を持たず、嚴密に作成された鬪爭計畫を持たなかつたので、各區は主として防禦に限られた。後にレーニンが指摘したやうに、これが暴動の弱點の源泉であり、部分的にはその敗北の原因であつた。暴動の主たる要塞――クラスナヤ・プレスニヤに對して自己の勢力を向けたセメノフスキー近衞聯隊が、特にモスクワにおいて殘忍な行動をした。こゝには最良の民兵が集中され、同志セドイ（ジノヴィー・リトヴィン）がそれを指導してゐた。モスクワ暴動は暴動を起した勞働者によつて表はされたあらゆる英雄主義にも拘らず、鎮壓された。

モスクワ暴動は孤獨的なものではなかつた。革命的暴動は多くの他の都市や地方をも卷きこんだ。沿バルト海地方（ラトヴィア）、ジョルジアおよびエカテリニンスカヤ鐵道地方（ゴルロフカ暴動）における鬪爭は、特に根强かつた。或る場所においてはそれはただ武裝的自衞手段であり、他の場所においてはそれは、ツァール權力の顚覆に向けられた組織的な、熟慮された進出であつた。

ボルシェヴィキとメンシェヴィキとはこの暴動に如何なる評價を與へたか？

メンシェヴィキのプレハーノフは武裝暴動の後間もなく黨に非難を投げつけた、『武器を執るべきではなかつた』と。メンシェヴィキは彼等によつて出版された暴動に關する資料集において、モスクワには何等の暴動もなかつた、何故なら（見給へ）ただ民兵のみが鬪爭したから、何故なら全勞働者階級が暴動に參加しなかつたから、何故なら勞働者階級はただ『自己のスローガンのために』のみ鬪爭したからだ、といふことを證明した。約六千人の勞働者が齒まで武裝した敵に對してモスクワの街上においてたゞ不完全な武器のみを執つて數日間鬪爭した、といふ事實を、メンシェヴィキは武裝暴動と評價することができなかつた。彼等はあらゆる手段を盡してそれを卑しめ且つ嘲笑し、暴動の道は鬪爭の望ましい道ではなく、勞働者階級にとつて鬪爭の空想的な道だ、といふことを證明しようとあらゆる手段を盡して努力した。

ボルシェヴィキはさういふ態度を取らなかつた。彼等にとつてはモスクワ武裝暴動の經驗はたゞ勞働者階級の武裝暴動の成功の可能性を確認したにすぎなかつた。暴動がすべての關係において十分準備されてゐなかつたことは、何等の疑ひもない。プレハーノフの非難――『武器を執るべきではなかつた』――に對してレーニンはかう答へてゐる、『反對に、ヨリ決定的、精力的且つ攻擊的に武器を執るべきであつた、たゞ平和的同盟罷業のみの不可能なことゝ、恐れず且つ容赦せざる武裝鬪爭の必要なこととを大衆に說明すべきであつた*』と。

* レーニン、第十卷、五〇頁。

レーニンは多くの論文において暴動のすべての巨大な意義を指示し、その組織における缺陷と誤謬とを暴露した。レーニンはその後この經驗の眞面目な研究が必要なことを一再ならず指摘した。彼はプレハーノフの乞食的な、日和見主義的な聰明を嘲笑した。レーニンはかう書いた、『我が革命的クロパトキン達』は次の原則を保持してゐる、『與へられるなら、取れ。打たれるなら、逃げよ。打ち破られたら、それは卽ち執るべき武器がなかつたのだ、と*』。

* レーニン、第九卷、三三頁。

その後、すでに一九〇六年、レーニンは、モスクワ暴動の意義を評價しつゝ、一九〇五年の最大の革命運動のこのメンシェヴィキ的評價にまた鋭く反對した。レーニンは一九〇五年十二月の結果としてプロレタリアートが受取つた敎訓を指摘した。第一の敎訓は、暴動の組織の不十分である。例へばモスクワでは、バリケードを建設せよといふ指令は、諸區へ非常に後れて、中央においてすでにバリケードが建設された時に屆いた。『我々社會民主主義的プロレタリアートの指導

者は、十二月には、自己の軍隊の配置が非常に拙くて、自己の軍隊の大部分が會戰に參加しなかつた司令官に似てゐた。勞働者大衆は積極的な大衆的行動に關する指令を求めたが、見出すことができなかつた*』。

* レーニン、第十卷、四九—五〇頁。

十二月暴動の他の教訓は、我々が軍隊を獲得するために不十分にしか鬪爭しなかつたことである。『すべての歴史的＝國民的運動において實際に不可避的な軍隊の動搖は、革命的鬪爭の激化に際しては、軍隊を獲得するための眞の鬪爭に導く……そして我々は、我々がこの點において政府に後れたことを率直且つ公然と認める勇氣を持たなければならぬ。我々は政府が支配し且つ引率した動搖しつゝある軍隊を獲得するためのかゝる活潑な、大膽な、進取的且つ攻擊的な鬪爭のために、我々の持つてゐた力を利用することができなかつた*』。

* レーニン、第十卷、五〇頁。

レーニンは次のことを第三の教訓と考へてゐる。即ち『……暴動は技術であり、そしてこの技術の主要法則は、死物狂ひに大膽な、取り返し難く決定的な攻擊にある、と書いたマルクスの今一つの深刻な、そして日和見主義者によつて忘れられた命題を、十二月はハッキリと確認した。我々はこの眞理を不十分にしか把握してゐなかつた。我々はこの技術、飽くまで攻擊といふこの規則を不十分に自ら學び且つ大衆に教へた*』。

* レーニン、全集、第十卷、五一頁。

レーニンは、モスクワ暴動が新しいバリケード戰術を提起したことを指摘した。この戰術はバルチザン戰爭であつた。

『モスクワはそれを提起したが、決して發展させず、多少とも廣汎な、眞實に大衆的な規模において決して展開させなかつた。民兵は少く、勞働者大衆は大膽な攻擊のスローガンを與へられず且つそれを應用せず、バルチザン部隊の性質は餘りに雜然としてをり、彼等の武器および戰法は不十分であり、群衆を指導する彼等の腕前は發展してゐなかつた*』。

* レーニン、第十卷、五二頁。

これらの教訓を基礎にしてレーニンは次の結論をなした、『我々の活動を一層廣汎に展開し且つ自己の任務を一層大膽に提起し、ロシア革命の偉大な日の教訓を把握しよう』と。彼は新しい暴動に準備せよ、と呼びかけた。

『偉大な大衆的鬪爭が——とレーニンは書いた、——接近してゐることを記憶しよう。これは

武裝暴動であらう。暴動はできるだけ同時的でなければならぬ。大衆は彼等が武裝的、流血的、絶望的鬪爭に向つて進んでゐることを知らなければならぬ。死を輕んずる風が大衆の中に普及され、そして勝利を確保しなければならぬ。敵に對する攻擊は最も精力的でなければならぬ。防禦ではなくて、攻擊が大衆のスローガンとならなければならぬ。敵の容赦なき殲滅が彼等の任務となる。鬪爭の組織は可動的、彈力的に形成されるであらう。軍隊の動搖的要素が活潑な鬪爭に引き入れられるであらう。意識的プロレタリアートの黨はこの偉大な鬪爭における自己の責任を遂行しなければならぬ*』。

* レーニン、第十卷、五三頁。

國會に對する黨の戰術。國會のボイコット。ボイコットの破棄

我々はすでに次のことを知つてゐる、卽ちボルシェヴィキ黨はブルィギン・デューマをボイコットせよと呼びかけたが、他方メンシェヴィキは、このデューマの選擧を利用することが可能だと考へ、かくして勞働者階級を決定的鬪爭から、革命的鬪爭方法から引き離し、ブルィギン・デューマが何物かを勞働者階級に與へうるかの如き欺瞞を勞働者階級の中に播き散らした。益〻成長する革命運動の情勢の下においては、メンシェヴィキの戰術は勞働者大衆の同情を得なかつた。

革命はブルィギン・デューマの選擧が行はれる前にそれを片附づけてしまつた。一部のメンシェヴィキ自身の中には大衆の革命的壓力の影響を受けてかなり重大な前進が始まつた。

十二月暴動は政府に多くの讓步をすることを餘儀なくさせた。一九〇五年十二月十一日『選擧權を有せざりし全人口階級を可能の程度に應じて』國會へ參加せしめることに關する命令が出た。一九〇六年二月二十日國會に關する新法令が發表された。革命運動の成長はツァール政府をして選擧法を改變することを餘儀なくさせたのである。この法令によつて、國會は立法權をさへ享有することゝなつた。十二月暴動は幾多の他の立法行爲を喚び起したが、それらは、ツァール政府が新しい勢力關係を固め、そして專制政治が自己の基本的地位を維持することを援助するやうな『憲法』を作らうとしたことを證明してゐる。一九〇六年三月四日には集會の自由に關する法律が現はれた。疑ひもなくこの法律もまた勞働者階級の組織的鬪爭によつてもぎ取られた讓步であつたが、これは哀れな法律であつて、すべてを『地方警察署長』の監視に屬せしめた。一九〇六年三月四日には臨時結社規則が發表されたが、それもまた勞働者階級の血腥い鬪爭によつて

征服されたものを切り縮め、刈り込まうと志した。

すべてこれらの立法行爲は、まだ勞働者階級の『壓力』や、彼等の革命的氣分の衰微および革命的な波の減退を決して證明しない情勢の下に現はれたのである。否、十二月暴動の粉碎にも拘らず、沿バルト海地方、ポーランド、コーカサス、シベリア、中央ロシアへの懲罰隊の殘忍な制裁にも拘らず、合法新聞、罷業委員會の多數の逮捕、ソヴィエトの解散と逮捕にも拘らず、一九〇六年初めの革命運動は、勞働者階級の益々荒れ狂ふ、行動を熱望する革命的エネルギーを證明してゐる。國會に對する態度の問題はこの情勢の下において解決されなければならなかつた。ボルシェヴィキは當時國會のボイコットを宣言し、メンシェヴィキは第一および第二段階における國會選擧への參加を主張した（選擧が直接ではなくて、三段階および四段階でさへもあつたことを述べておかなければならぬ）。勞働者は勞働者クーリヤ以外から自己の代表を出すことができなかつた。勞働者にとつては特殊な勞働者クーリヤ（卽ち特殊な選擧グループ）が作られた。五十人以上の勞働者が働いた各工場は、一人の全權委員を選擧する權利を持ち、大工場は一千人につき一人であつた。この全權委員が選擧人を選擧した。勞働者出身の一兩人の選擧人が、他の階級および身分出身の百五十—二百人の選擧人が參加した總選擧會に列席することができた。かくの如き

が新——ウィッテ——デューマ*であつた。メンシェヴィキはデューマの半ボイコットを提議したが、それもまた到るところにおいてゞはなかつた。すべての選擧運動および勞働者クーリヤを利用しなければならない、と彼等は語つた。勞働者をして全權委員を選擧させ、全權委員をして選擧人を選擧させる。そしてこの選擧人がかゝるデューマをボイコットすることおよび選擧後の改正を要求することを宣言しなければならない、と。然るにボルシェヴィキは、大衆的革命運動がヨリ決定的な鬪爭形態に向つて進み、勞働者階級の新しい、ヨリ有力な暴動の組織の希望が存在するやうな瞬間に、このウィッテ・デューマの選擧の如き議會遊戯によつて勞働者階級を誘惑することは有害だ、と考へた。

* ツァールの大臣ウィッテ伯が新選擧法の起草者の一人であつたから、このデューマはかく稱せられたのである。

國會がロシアに存在した政治的秩序を實際に改變し且つ階級的勢力の相互關係を改變しうるといふ憲法的幻影に對して、ボルシェヴィキは決定的に鬪爭した。第一國會をボイコットすることによつて、ボルシェヴィキはメンシェヴィキのこの憲法的幻影を暴露した。

ボリシェヴィキによつて提議されたボイコットの戰術は、大多數の組織によつて承認された。それにも拘らず或る場所では黨の周邊にあつた社會民主主義者が選擧を通過した。時にコーカサスに

おいては、社會民主黨は小ブルジョアジーに立脚し、この第一國會へ數人の社會民主主義者と同情者とを送ることに成功した。第一國會はその構成において著しく自由主義的、カデット的であつた。

ボルシェヴィキが選擧會自體と何等の關係を持たないやうに第一國會のボイコットを勸めた、と考へてはならぬ。ボルシェヴィキは積極的ボイコットを行ふことを提議した。ボイコットに關する決議が採用された會議は、當面の選擧運動の期間を最も廣汎な煽動の目的に利用し、集會を組織し、できるだけ多數を選擧會に侵入させ、この會合において貧弱な國會に對抗して憲法議會を革命的方法によつて召集する必要を對立させること、この會合においてデューマのボイコットへ呼びかけ、この會合においてプロレタリアートの革命的鬪爭への結合に關する決議をなすこと、それと同時にプロレタリアートの公然の進出を組織し、そして國會選擧當日全般的總同盟罷業、宣言發表および示威運動を決行することを決議した。

國會のボイコットの經驗について語りつゝ、レーニンは一九二〇年『共產主義における「左翼主義」の小兒病』の中にかう書いた、『ロシアの經驗は我々に、ボルシェヴィキによるボイコットの一つの成功的な正しい（一九〇五年）適用と、他の誤つた適用（一九〇六年）とを與へた。第一の場合を分析することによつて我々は次のことを見る、卽ち、大衆の議會外的（特に同盟罷業的）革命的行動が排他的な速さで成長し、プロレタリアートおよび農民層のただ一つの層も反動的權力の何等の支持をも示さず、革命的プロレタリアートが廣汎な、後れた大衆に對する影響を同盟罷業鬪爭および農業運動によつて確保したところの情勢の下においては、反動的權力による反動的議會の召集を許さないことに成功したのである*』と。

* レーニン、第二十五卷、二〇五頁。

從つてレーニンはその後ブルィギン國會選擧のボイコットは正しく且つ有益であるが、一九〇六年における第一國選擧のボイコットは、『容易に訂正しうる誤謬』ではあるが、誤謬だ、と考へたのである。

第一國會は、それが右翼グループの利益、土地所有者の利益が觸れる問題に全面的に近づかうとするや否や、その中で農民がヨリ大膽に語るや否や、一九〇六年解散された。國會の新選擧に對するボイコットの繼續の戰術が合目的的であるかどうか、といふ問題が起つた。第一國會の不完全なボイコットの經驗と廣汎な人口大衆において憲法的幻想、卽ち國會が政治的自由を與へるといふそれに對する期待とは、革命的大衆運動の若干の衰微と並んで、我黨をして一九〇六年十

一月ボイコットの問題を再檢討し且つ第二國會選擧への參加に關する決議を提起することを餘儀なくさせた。

當時國會がさうであつた代議機關の選擧への我々の參加を、我々は第二インターナショナルの日和見主義者とは全く異つた考察によつて是認した。我々は、日和見主義者のやうに、選擧により又この議會への代表者の選擧によつて勞働者階級が部分的ながらも權力を奪取することができるといつて、大衆を眠りこませなかつた。否、我々はこの議會の演壇から進出する可能性をば、大衆の中において革命的煽動をなし、國會の演壇から我々のボルシェヴィキ思想を宣傳し、この演壇から我々の綱領、我々の戰術を擁護する手段と見た。メンシェヴィキの憲法的幻想に對して鬪爭しつゝ、我々はそれと共に、勞働者階級はブルジョア國家によつて作られる如何なる代議機關にも一般に參加すべきではない、といふ考察によつて議會選擧をボイコットする時におけるが如き、議會に對する態度に對して鬪爭した。我々は勞働者階級の前に、このボイコット主義的文句の背後には單純に政治鬪爭の逃避が隱れてゐることを暴露した。

第二回國會の選擧においては、我黨は『武裝暴動の必要を承認し且つ民主共和國のために鬪爭する』黨のみとの協定を許したが、この場合我々の統一戰線の戰術は、『社會民主黨の政治的煽動の獨立性を少しも制限することなしに、たゞ一般候補者名簿を提出することに擴張され』たのである。勞働者クーリヤについていへば、我々ボルシェヴィキは、如何なる他の黨との協定をも許さないで、無條件的に獨立的な進出の必要を認めた。

メンシェヴィキの戰術は異つてゐた。彼等は第一國會のボイコットを無條件的な誤謬と考へ、このボイコットを悲しんだ。彼等はまた第二國會の選擧への參加に贊成した。それのみならず、彼等はデューマを政治的演壇として利用するためではなくて、デューマの活動に參加するために、このブルジョア＝地主議會における組織的活動のために、デューマに入れと呼びかけた。この場合、彼等は、一方では、勞働者階級を、我々ボルシェヴィキが『農民化し』、殆どナロードニキ黨に轉化したかの如く說得し、そして他方では、勞働者の眼中にロシアの自由主義者の性質の全く僞りの理解を維持し、この自由主義者を反革命に對する鬪爭における同盟者として描き出したのに反して、ボルシェヴィキは革命的農民層を自己の同盟者と見た。

メンシェヴィキ黨はこの勞力を、この主要な同盟者を押し退けて、勞働者階級をカデット黨の附屬物たらしめようとした。レーニンが一再ならず力說したやうに、この點に、國會鬪爭に參加した諸勢力に對する關係におけるボルシェヴィキとメンシェヴィキとの間の基本的な差異がある。

第一國會の解散と第二國會選擧に關聯してレーニンによつて書かれた選擧人に與ふるメッセージにおいて、レーニンはかう書いた——

『デューマのボイコットは人民代表者の召集を虐殺者から取り上げようとする試みであつた。デューマのボイコットは、單なる紙片を信ずるなといふ人民への警告であり、眞實の權力のための闘爭への召集であつた。ボイコットは、自由主義的ブルジョアジーが解放事業を裏切つたが故に、成功しなかつた*』と。

* レーニン、第十卷、一五二頁。

かやうに、まだ近い新しい武裝暴動に對する期待が存在した瞬間における第一國會のボイコット、勢力の相互關係が變化した時、革命の近い昂揚に對する期待が實現されず、そしてデューマが大衆の注意を惹いてゐる時における國會選擧への參加。しかし何れの場合においても我黨は、デューマ戰術がデューマ外の闘爭に全く從屬されなければならないと考へた。このデューマ、議會闘爭においてもまた、革命的農民層に立脚する諸黨との協定を許すところの、勞働者階級黨の確乎たる方針——これがボルシェヴィキ黨の戰術であつた。

この場合下級の段階においては我々は、何人とも協定を結ぶことなしに、獨立的候補者名簿を提出することを提議し、たゞ上級の段階においてのみ革命的黨との協定の『左翼ブロック』を許した。

大衆が暴動に準備し、多くの場所においてバリケード闘爭が行はれた瞬間におけるブルィギン・デューマおよびウィッテ・デューマさへもの選擧への參加。國會の選擧および選擧遊戯を以て、そしてこの場合あらゆる種類の諫止をつけ加へて、直接的革命的闘爭からの大衆の引き離し、——これがブルィギン・デューマおよび第一ウィッテ・デューマに對するメンシェヴィキの戰術であつた。カデットとのブロック（聯合）、自由主義者、君主主義的ブルジョアジーとのブロック——これがこの時期におけるメンシェヴィキの戰術であつた。

一、革命運動の巨大な昂揚が存在し、國會選擧への注意の集中が大衆を主要な直接的任務——武裝暴動の準備から引き離す虞れがあり、そして國會選擧の條件自體が決して大衆の組織に有利でなかつたやうな瞬間および條件の下において、ボルシェヴィキが國會のボイコットに贊成したことは、我々がすでに見たところである。しかのみならずかゝる條件の下にかゝる國會の選擧へ注意を惹きつけることは、國會が勞働者階級の生活の何等かの燒眉の問題を解決しうる、といふ欺瞞的な幻想（期待）をプロレタリアートの一部の中に強めることゝなつたのである。

けれどもボルシェヴィキは、デューマのボイコットに贊成しつゝ、決してあらゆる議會の參加の反對者ではなかつた。異つた條件の下においてはボルシェヴィキ黨自身が國會選擧のために勞働者階級を組織し、自己の黨、自己の國會フラクションの行動をすべての爾餘の黨に對立させた。

我々は國會の如き雜種的な、狹量な議會における我々の役割を自己流に、ボルシェヴィキ流に理解した。我々は、國會の多數派を成したブルジョア黨の頭を越えて革命的宣傳を行ふためにそこへ行つた。我々は國會フラクションを革命的大衆の組織のための中心たらしめようと志した。

二、この合法的、議會的活動と並んで我々は軍隊や、勞働者階級および農民層の中において非合法的革命的宣傳を行つた。そして國會への參加は我々にとつてはたゞこの我々の活動の援助でなければならなかつた。

三、大衆的革命的鬪爭の時期における私有財產の占取に關する問題においては、我々は當時階級的政治的敵手の財產の占取、沒收を可能であり且つ必要でさへもあると原則的に考へた。我々は當時農民に地主の土地を占取することを勸め、敵の武器や貨幣財產の占取を許した。

四、革命の衰微が始まつた時、黨の戰術を新しい運命——革命の衰頽の運命に順應させなければならなかつた時、我々は我々の戰術を改變することができた。我々はこの場合我々の基本的な任務、我々の革命的綱領を拒否しなかつた、我々は最も困難な條件の下における我々の非合法的活動を拒否しなかつた。

正にこの點に——昂揚期に自己の力を最大限に發展させる能力のうちに、暫時停止期に戰術を用ゐる能力のうちに、反動期において新しい情勢の下における新しい戰鬪のために、戰鬪能力を保存し、黨の基本的幹部を保存し且つ鍛錬する能力のうちに——正にこの點にボルシェヴィキ黨の戰略および戰術がある。

第一ロシア革命もその後の出來事もこのボルシェヴィキの戰術および戰略の正しさを輝しく確認した。

第六章　參考文獻

レーニン、專制政治とプロレタリアート、全集、第七卷、二六—三四頁。
レーニン、ロシアにおける革命の發端、全集、第七卷、七九—八一頁。
レーニン、二つの戰術、全集、第七卷、一〇八—一一四頁。
レーニン、全露的政治的罷業、全集、第七卷、三三一—三三三頁。
レーニン、革命の最初の成功、全集、第八卷、三五二—三五七頁。
レーニン、プロレタリアートと農民層、全集、第八卷、三八二—三八五頁。

レーニン、農民運動に對する社會民主黨の態度、全集、第八卷、一八一—一八八頁。
レーニン、小ブルジョア社會主義とプロレタリア社會主義、全集、第八卷、三六〇—三六六頁。
レーニン、プロレタリア的闘爭と自由主義的仲買業、全集、第七卷、三三九—三四五頁。
レーニン、プロレタリアートの闘爭とブルジョアジーの奴隷根性、全集、第七卷、三六二—三六六頁。
レーニン、社會主義と無政府主義、全集、第八卷、四〇九—四一一頁。
レーニン、軍隊と革命、全集、第八卷、三九五—三九七頁。
レーニン、ブルイギン・デューマと暴動、全集、第八卷、一四三—一四九頁。
レーニン、國會と社會民主主義的戰術、全集、第十九卷、一一—一九頁。
レーニン、カデットの勝利と勞働者黨の任務、全集、第九卷、七九—一四三頁。
レーニン、デューマの解散と勞働者黨の任務、全集、第十卷、一—一九頁。
レーニン、ボイコットについて、全集、第十卷、二六—三二頁。
レーニン、モスクワ暴動の教訓、全集、第十卷、四八—五三頁。
スターリン、レーニン主義の諸問題、二二—二六頁、第九版。

第七章　十二月暴動と反動時代との間

一九〇五年十二月のタンメルフォルス會議。

統一戰線の戰術

當時一つのロシア社會民主勞働者黨の二つの部分、二つの分派と形式的には見られながら實際においては、事實上は、第二回大會以來二つの獨立的な黨であつたところの、ボルシェヴィキとメンシェヴィキとの間における意見の相違が、如何に深刻に進行したかを、我々はすでに知つてゐる。レーニンは自己の論文の一つにおいて、ボルシェヴィズムの根源が、革命的社會民主主義者が經濟主義者と闘爭を行つた九〇年代に發することを指摘してゐる。一九〇三年以來ボルシェヴィズムはすでに政治思想の獨立的流派として、マルクス主義の『花崗岩的な』基礎の上に、右からは日和見主義者に對する闘爭のうちに、『左から』は中央主義に對する闘爭のうちに、成長したところの黨として存在した。すでに第二回大會以後メンシェヴィキ黨もまた自己の中央部を持ち、事實上特殊な黨として存在した。我々がすでに前に見たやうに、ロンドンにおいて第三回黨大會が開かれ

た時、メンシェヴィキは別にジュネーヴにおいて會議を開いたが、之れは事の本質においてメンシェヴィキ大會であつた。

けれども、運動に參加したヨリ廣汎な勞働者仲間は、意見の相違の詳細なことを全く且つ常に理解してはゐなかつた。ボルシェヴィキとメンシェヴィキとは下らぬことについて爭つてゐる、彼等における任務は共通だ、と勞働者仲間には往々考へられた。別々のボルシェヴィキおよびメンシェヴィキ委員會およびグループの存在を條件づけるところの論爭と意見の相違は、勞働者階級を引き裂き、往々彼等を無力にし、行動しなければならない時に、力を論爭に浪費する、と彼等には考へられた。黨における綱領が我々において共通であること、および兩者——ボルシェヴィキとメンシェヴィキ——とが共に社會民主主義者と稱せられたこともまた、彼等を困惑させた。だから革命運動に參加した廣汎な勞働者仲間は、統一を主張した。

『何人にとつても、——と當時レーニンは論文「黨の再組織について」のうちに書いた、——勞働者社會民主主義者の壓倒的多數が黨の分裂に極めて不滿足であつて統一を要求してゐることは、祕密ではない*』と。

* レーニン、第八卷、三七九頁。

この統一、または我々が今日表現するやうに、統一戰線の戰術は、事件の全進行によつて根强く押し進められた。

第四回（統一）大會の少し前、レーニンはかう書いた、『戒嚴狀態、銃殺および笞刑、充滿せる監獄、飢餓に疲れはてたプロレタリアート、多くの非合法的據點の破壞と合法的據點の缺如とによつて强化された組織上の混亂、最後に、黨の統一の復興といふ困難な仕事と一致した戰術に關する論爭、——すべてこれらは、黨の力の若干の分散を不可避的に喚び起す。統一黨大會の召集はこの分散から脫出する形式的手段だ……*』。と

* レーニン、ロシアの現狀、プロレタリアートの戰術、全集、第九卷、二〇頁。力點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

すでに第四回大會の後、『舊「ボルシェヴィキ」分派所屬統一大會代議員の黨に與ふるメッセージ』と題せられた特殊なメッセージには、かう述べられてゐる、『……人民鬪爭の來るべき恐るべき、決定的な事件に鑑みて、全ロシアの意識的プロレタリアート、その全民族の實際的統一を達成することが何よりも重要だ*』と。

* レーニン、第九卷、一七〇頁。

しかしこのことは、メンシェヴィキとのかゝる合同大會のために、我々が自己のボルシェヴィキ的

綱領や、自己のボルシェヴィキ的戰術を放棄したことを決して意味しなかつた。我々は黨全體の前に我々の見解の差異を最も鋭く示し、メンシェヴィキの日和見主義を暴露するためにこそ、この合同大會へ行つたのである。さればこそレーニンは第四回統一大會の後かう書いたのである、『我々は社會民主黨の右翼および左翼のヨリ明瞭且つ決定的な分界を大會の最大の觀念的事業と認める……統一大會は決定のために、どの點で我々が一致し且つどの點で我々が喰ひ違ふか、どの程度に正に喰ひ違ふかの正確且つ爭ふ餘地なき決定のために、大量の實務的文獻的資料を與へた*』と。

* レーニン、第九卷、二二二頁。

革命的事件の進行自體が勞働者階級の廣汎な層においてボルシェヴィキの戰術に優位を與へた（小ブルジョア層においてメンシェヴィキの成功が利用されたのと正に同樣に）。だからボルシェヴィキ黨の指導者の間では、一九〇五年の後半に、一定の方針が立てられた、卽ちメンシェヴィキに贊成した勞働者との統一戰線を樹立するために、形式的統一に進むべく彼等を略取するために。レーニンと全ボルシェヴィキ黨とは、この行動をば、たゞ、ボルシェヴィキが鬪爭の唯一の、正しい革命的な道を提起することを勞働者に說得するための道と見たのである。けれどもレーニンは常にかう考へた、卽ちたとへ形式的にもせよ、統一されるためには、分界をつけ自己の特殊な方針を判然と規定しなければならない、と。

革命の最初の雷鳴と共に、最初の最小の可能性と共に、レーニンはロシアへ歸り、ペテルブルグにおいて活動した（非合法的にフィンランドに居住しつゝ）。プレハーノフは外國に停まつてゐた。レーニンは一九〇五年十月十日プレハーノフ宛にかう書いた——

『……貴下の巨大な知識と巨大な政治的經驗とはロシアのプロレタリアートに必要です、——すべてこのことは新しい基礎を作り出し、そしてこの基礎の上に立つて我々は、極めて容易に舊いことを忘れて、生きた仕事の上で協力することができるでせう。ジュネーヴの活動からペテルブルグの活動への移行は、分裂から統一への移行のために黨關係においても極めて好都合な心理的移行です。そして私は、第二回大會時代以來なかつたところの、そして恐らく速かには反覆されないところの、かゝる瞬間を取り逃さないやうに、と切に希望するものです*』と。

* 『レニンスキー・スボールニク』、第五卷、五二七頁。

しかしプレハーノフはやはり二—三月革命の勝利まで外國に止つてゐた。そしてその時には、一九一四年の戰爭以來、彼はすでに社會排外主義者の公然の役割で進出してゐたのである。しか

し一九〇五年の革命においては、メンシェヴィキ指導者の日和見主義にまだ最後まで感化されてゐない部分の勞働者をボルシェヴィキの周圍に結成するために、『統一大會へ』進むこの目的を以てプロレタリアートの統一戰線を作り出さなければならなかつた。ボルシェヴィキは、この時機に一九〇五年十二月、フィンランドのタンメルフォルス市において、十二月暴動の勃發の直前（この暴動は大組織からの非常に多くの代議員の到着を妨げた）、かゝる統一への道を定めたところ、ボルシェヴィキ會議を開くために、彼等の力の及ぶすべてのことをした。この會議は、我黨の中央委員會とメンシェヴィキの組織委員會、竝びに中央機關紙部が平等主義の上に合同しなければならないことを決議した。合同した中央部は、大會ができるだけ速かに召集されるために、黨の統一大會について宣言しなければならぬ。同じくこの會議において、民主主義的中央集權、『選擧された中央部に觀念的および實踐的指導における全權を賦與すること、竝びにこれらを更迭しうること、最も廣汎な公開とそれらの行動の嚴重な責任を伴ふところの廣汎な選擧主義』の實行を基礎にして、黨を再建することが決議された。

この會議はボルシェヴィズムの歷史において大なる意義を持つてゐる。レーニンの計畫によればそれは全分派的統一大會に先だつ、第四回ボルシェヴィキ大會でなければならなかつた。この會議においては、會議においてコーカサス・ボルシェヴィキの代表者であつた同志スターリンが大なる役割を演じた。彼は當時すでに外コーカサス地方のボルシェヴィキの指導者と認められ、『最硬派』（トヴエルドカメンネイシー）ボルシェヴィキとして黨に知られてゐた。

一九〇五年のタンメルフォルス會議においては國會選擧に關する『積極的ボイコット』の戰術が建てられ且つ確認され、農業問題については『土地の國有化』綱領に近づいた決議が採用された。

會議は『すべての黨組織に選擧主義を基礎とする地方諸組織の再組織を即時且つ最も精力的に行ふ』べきことを提議した。

けれども、當時我々が實際に民主主義的中央集權を實現することができた、といふやうに事態を考へてはならない。當時活動の條件はすでに遙かに自由ではあつたけれども、何よりも先づ警察的條件がこれを妨げた。大都市においては學校が革命的組織に使用され、あちこちでゼムストヴォその他の機關が自由主義者の協力の下に集會の組織のために利用された。當時サークルや會議にとつて集會を開くことは比較的容易であつた。けれどもかゝる條件は決して到るところにおいてゞはなかつた。恰も一九〇六年一月レーニンは、『復興された專制政治に再び適應しなければ

ならぬ、必要なところでは、何處でゞも、再び地下へ潛りこまなければならぬ』と書いた。

保安課と憲兵隊とは我々の組織を破壞することを中止しなかつた。非常に屢ゞ我々の組織の逮捕された指導者の代りに、中央委員會または地方的中央部によつて任命され、または地方において指名された同志が、即時に補充された。その外に我々の委員會には軍事的および戰鬪的組織の代表者が入つたが、これらの組織において民主主義的選擧を行ふことはたゞ危險であつたのみならず、殆ど不可能であつた。それにも拘らず、一九〇六―一九〇七年我々の許には、總會または會議で選擧された工場、區および市委員會が存在した。それと同時にヨリ廣汎な地方會議もまた開かれ、そこで地方的中央部が選擧された。

タンメルフォルス會議はすでに諸地方において始まつた武裝暴動の最中に終つた。勿論、武裝暴動は、ボルシェヴィキとメンシェヴィキとのそれに對する異つた態度にも拘らず、下層の活動家達を益ゞ接近させた。統一への憧憬は更に強くなつた。タンメルフォルス會議の決議は聯合委員會、即ちボルシェヴィキとメンシェヴィキとの兩組織がまだ完全に合同しないで、分派的に構成された組織として維持され、そして上層において、これらの諸組織の上部に、兩組織の代表を基礎とする聯合（統一）委員會が形成された時におけるが如き統一形態の創造への合圖となつた。こゝかしこでは統一は更に前進して、下部組織をもまた包括した。

第四回ストックホルム統一大會とその決議

第四回大會は一九〇六年ストックホルム（スウェーデン）において開かれた。大會の組織においては當時『若い社會主義者』、特に彼等の指導者ヒンケ・ベルゲグリンが特に我々を援助した。大會においては大多數がメンシェヴィキに屬した。それは勿論、黨および勞働者階級の大多數がメンシェヴィキに同情し、メンシェヴィキ的見地に立つてゐたことを意味しなかつた。全くさうではない。今日では何處でも大會への規則正しい選擧が可能であるが、當時においてはこれは決して到るところにおいて可能性ではなかつた。多くの組織、恰も最も革命的な、最もボルシェヴィキ的な氣分を有した組織が、武裝暴動に積極的に參加したために、大いに破壞されてゐた。決してすべての組織が完全に代表されたのではない。しかのみならず『自由の日』に非プロレタリア的要素もまた黨に流入してゐた。メンシェヴィキのマルトフはアクセリロッドに宛てゝ、非常に多くの『解放派』（自由主義的ブルジョアジー）がメンシェヴィキとなつてゐる、と書いた。コーカサスにおいては社會民主黨組織の黨員の九〇％が小ブルジョアジーに屬し、從つてそこではメンシェヴィキが大

なる影響を持つてゐた。だからストックホルム大會においては大多數がメンシェヴィキだつたのである。しかし正にこのことが大會の構成を決定したが故に、從つてストックホルム大會の決議もまた幾多の問題についてメンシェヴィキ的決議となつたのである。ストックホルム大會には民族的社會民主黨の代表者もまた出席した。卽ちロシア社會ファシストの今日の『指導者』、第二インターナショナルに於けるボルシェヴィキの最惡の敵、アブラモヴィチをも含めて、ブンドから三人、ポーランドおよびラトヴィアの社會民主黨組織からワルスキー、エフ・ジェルジンスキーおよびヤー・ガネツキー、またラトヴィア社會民主勞働者黨の三人の代表者が出席した。この大會においては、ボルシェヴィキとメンシェヴィキとの形式的合同が行はれた、卽ち統一中央委員會が選擧され、それには多數派のメンシェヴィキと三人のボルシェヴィキ——ルィコフ、クラシンおよびストロエフ＝デスニツキーとが參加した。この同じ大會においてロシア社會民主勞働者黨と民族的社會民主主義諸組織、卽ちラトヴィア社會民主黨、ポーランド、リトワニアの社會民主黨および就中ブンド——との合同が行はれ、この場合ブンドはユダヤ人プロレタートの社會民主主義組織として黨に參加し、その活動において地方的埒によつて制限されなかつたが、ラトヴィア人およびポーランド人の組織は、謂ゆる地域的自治を獲得した。卽ちこれらの組織が活動したところでは、民族の差別なしにすべての社會民主主義者がそれらに參加した。ボルシェヴィキの中からはこの大會に、レーニン、スターリン、ルィコフ、クラシン、デスニツキー、ヴォロフスキー、アルテム（セルゲエフ）、ルナチャルスキー、ルミャンツェフ、ルドネフ（バザロフ）、テオドロヴィチ、ウラヂミロフ、ステパン・シャウミャン、リャドフ、グセフ、クルブスカヤ、ウラヂミルスキー、フルンゼ、ヴォロシロフ、ヴァレンツォワ、クビャク、セドイ（リトヴィン）、ボゼルン、ノヴゴロドツェワ、スタソワ、ナコリャコフ、ブブノフ、ドゥナエフ、ヤロスラフスキーその他が參加した。

『共產主義における「左翼主義」の小兒病』において〇三—一九一二年に數年間メンシェヴィキと形式的に一つの社會民主黨にゐたが、プロレタリアートへのブルジョア的影響の運搬者および日和見主義者としての彼等に對する觀念的および政治的鬪爭を決して中止しなかつた*』と。

* レーニン、第二十五卷、二一三頁。

この大會において審議された最も重要な問題は、農業問題、革命的瞬間とプロレタリアートの階級的任務との評價、國會に對する態度、武裝暴動の問題と組織問題であつた。當時ボルシェヴィキとメンシェヴィキとは、武裝暴動や、バルチザン鬪爭や、收奪に對する態度の問題、また國會に

對する態度の問題の如き、戰術問題、プロレタリアートの行動の問題を別々に決定した。ボルシェヴィキは宣言された內亂の承認から出發した。メンシェヴィキは社會主義的措辭によつて隱蔽された合法的民主主義者の黨たらんことを益〻志し、革命的鬪爭の方針に無緣であつた。

メンシェヴィキは統一大會において多數派であつたにも拘らず、彼等は、勞働者を突き退けないために、黨員資格に關する我々ボルシェヴィキの提議を採用しなければならなかつた。ボルシヴィキによつて第二回大會に提議され、そして第三回大會において我黨の規約に入つたところの、規約の第一條が採用された。ボルシェヴィキは最初から民族的社會民主主義組織——ポーランド人、ラトヴィア人、ブンド派の代表者に決議權を與へることを提議したが、メンシェヴィキはさうすることを拒否した。何故なら當時ボルシェヴィキ側が優勢になるだらうといふことを彼等は恐れたから、何故なら革命的戰術の多くの問題においてラトヴィアおよびポーランドの社會民主主義者は當時——極めて不徹底的ではあるが——ボルシェヴィキを支持したからである。諸組織は民主主義的中央集權の基礎の上に建設されなければならぬ、卽ちそれらは選擧的でなければならないと同時に黨は中央集權的に建設されなければならない、といふ決議を、黨は採用した。我々は中央集權的黨を建設することが必要だと考へた、我々は、黨中央機關紙部が大會において選擧されないで、黨中央委員會によつて任命され且つそれに從屬され、以て中央委員會がその方針を指導することが必要だと考へた。

第四回統一大會には農業綱領の再檢討の問題が課せられてゐた。ボルシェヴィキは、農業(土地)問題がツァーリズムに對する鬪爭、プロレタリアートと農民層との革命的＝民主主義的獨裁の勝利のための鬪爭の一般的問題の一部分であるといふことから出發した。ボルシェヴィキは土地の國有化の綱領を提起した。土地の國有化は革命的農民委員會によるすべての地主所有地の沒收(無賠償で取り上げること)および勞働者農民の新權力へのその讓渡を第一に豫想する。土地國有化のスローガンは全農民層の革命的鬪爭への動員の仕事を容易ならしめた。ブルジョア民主主義革命において實現された土地の國有化は、ブルジョア民主主義革命の社會主義革命への轉生の途上における資本主義に對するプロレタリアートと貧農との鬪爭を容易ならしめた。

すでに、第二回黨大會前『イスラク』編輯部において、レーニンが綱領の作成に際して一定の條件の下における土地の國有化の可能性を主張したことを、指摘しなければならぬ。當時すでにプレハーノフは、ロシア革命の條件の下における土地の國有化が前進ではなくて、退却であることを證明した。

ボルシェヴィキの土地國有化の綱領に對してメンシェヴィキは自治體有化の綱領を提起した。この綱領の本質は次の點にある、即ち農民に利用されてゐる分割地は、彼等の所有たることが認證され、そして地主所有地は謂ゆる民主主義的自治に移され、そして農民は、もしそれを欲するならば、この土地を賃借することができる、と。メンシェヴィキの土地自治體有化の綱領は農民を革命的鬪爭に呼びかけなかつた。農業問題におけるメンシェヴィキの綱領は、事の本質において革命の中途半端な終結を考慮したものである。二つの方針——プロレタリア的方針と小ブルジョア的方針とが農業綱領の問題においてもまた發言された。

自治體有化に鋭く反對しつゝ、レーニンは、地主所有地の農民の間における分配といふ綱領を提起した代議員（『分配主義者』）のグループを支持することに同意した。レーニンは、分配の綱領は誤つてはゐるが、有害ではない、と考へた。それは、地主から土地が取られた後、農村において資本主義的諸要素に對する階級鬪爭が廣汎に展開される、といふ見透しを持たない限りにおいて、誤つてゐる。メンシェヴィキの自治體有化と異つて分配綱領は主たる敵——農奴制的土地所有に打擊を齎すことを助長するが故に、それは有害ではない。メンシェヴィキ自治體有化綱領と土地分配論者の中途半端な綱領とのいづれかを選擇しなければならないとすれば、後者に贊成しなければならなかつた、何故ならそれは農村における階級鬪爭に點火したからである。

第四回統一大會は、土地自治體有化の綱領を採用した、しかし若干の修正を加へて。

ストックホルム大會の戰術的決議

メンシェヴィキは多數派であつたけれども、彼等の中には大なる不安定、大なる動搖および逡巡が支配し、そして他方では、勞働者大衆の氣分は、メンシェヴィキが現在の瞬間の評價の問題に關する自分自身の決議をこの大會に提出さへしえなかつたほど、革命的であつた。大會に先だつて彼等は、大會が採用することを豫想したところの現在の瞬間の評價に關する決議草案を黨機關紙に掲載したが、大會においては、批判に壓迫されて自己の草案を撤回し、そしてそれを審議することさへ遠慮した。

多數派でありながら、何故メンシェヴィキは『現在の瞬間とプロレタリアートの任務の評價』に關する自己の決議草案を撤回したか？　ボルシェヴィキとメンシェヴィキとは、當時自己の決議において、革命は新しい昂揚に向つて進みつゝある、我々の任務はそれを最後まで導かうと欲することである、と認めたことを述べなければならぬ。然るにボルシェヴィキはメンシェヴィキと異つて、

たゞプロレタリアートのみが革命的農民層と共にこの任務を遂行することができることを證明した*。ボルシェヴィキはこの見地を徹底的に保持した。然るにメンシェヴィキはブルジョアジーとの同盟に贊成し、そしてこれが彼等から大衆を押し退けた。そして國會に關するメンシェヴィキのアクセリロッドの報告においてはプロレタリアートのヘゲモニーの觀念が嘲笑された。

* レーニン、ストックホルム大會に關する報告。

レーニンは大會において、メンシェヴィキが革命の尻尾にくつゝいてゐて、それを指導しないことを輝かしく報告した。實際彼等は農民層とではなくて、自由主義的＝君主主義的、カデット的ブルジョアジーと手に手を取つて進んでゐる。彼等は徹頭徹尾憲法的幻想に取りつかれてゐる、即ち、武裝的闘爭なくして――『國會における平和的闘爭によつて、人民權力に到達しうるかの如く、自ら欺瞞され且つ人民大衆を欺瞞してゐる』と。事の本質においてメンシェヴィキは武裝暴動の如き革命的闘爭形態を嘲笑した。メンシェヴィキのニコリスキーは、ボルシェヴィキが『廣汎な大衆の革命運動を主要な運動形態』と考へてゐるといつて、ボルシェヴィキを嘲笑した。然るにメンシェヴィキは正に合法的、デューマ的、議會的形態を主要な運動形態と考へたのである。メンシェヴィキのニコリスキーはかういつた、『廣汎な人民大衆の革命運動は存在しさへもしない』と。『君のカデット的眼鏡を外せ！――とレーニンはこのメンシェヴィキに答へた、――然らば君はロシアにおける農民運動をも、軍隊における動搖をも、失業者の運動をも見るであらう、君は今日「隱れて」ゐるが、穩健なブルジョアさへもそれを否認しようとはしないところの、闘爭形態を見るであらう*』と。

* レーニン、第九卷、二〇二頁。

第四回大會と第五回大會との間における黨の闘爭

ボルシェヴィキとメンシェヴィキとが第四回黨大會において行つた闘爭は第四回大會後更に甚しく燃え上つた。地方における報告において、我々ボルシェヴィキは、統一大會で採用された決議を説明しつゝ、革命の根本問題に對する我々のボルシェヴィキ的見解を擁護した。到るところにおいて大會に關する報告は、二人の報告者、ボルシェヴィキの一人とメンシェヴィキの一人とが登場して、集會において討論をなし、第四回大會の論爭を繰返した、といふやうなやり方で行はれた。デューマの戰術や農業（土地）問題に關する決議の如き、我々が一致しなかつた大會の決議は、特に鋭く批判された。

しかのみならず、カデット・デューマの支持、責任デューマ内閣といふカデットの要求の支持といふメンシェヴィキによつて提起されたスローガンの形で、大會の後メンシェヴィキ的中央委員會によつて取られた右翼的進路は、メンシェヴィキ的中央委員會の方針に對する最も決定的な闘爭の必要を喚び起した。事の本質においてメンシェヴィキの要求は、勞働者階級がツァーリズムおよび自由主義的カデット的ブルジョアジーと取引を結ばなければならないことを意味した。ツァール權力の保存の下においては責任デューマ内閣の要求はたゞこの取引の隱蔽にすぎなかつた。

一九〇六年七月、國會は、デューマにおいて土地問題に關する熱烈な討論が燃え上つた時、ツァールによつて解散された。ボルシェヴィキは、憲法議會のために全人民的暴動を準備せよ、といふ呼びかけを以て、勞働者、農民および兵士に呼びかけること、即ち『極めて近い將來に農民層の進出を豫想しつゝ、直接の召集を準備し且つ期待する』ことを提起した。メンシェヴィキ的中央委員會は、カデットの言ひなりになつて、ヴィボルグにおいてカデットによつて組織された會議に參加し、國會の全權の復興のスローガンを提起した。しかしデューマはカデットのデューマであつたのだから、――メンシェヴィキはこれによつて、彼等が獨立の階級的政策を實行しえないこと、彼等が勞働者階級の政策を自由主義的ブルジョアジーの必要および利益に從屬させてゐることを、今一度示したのである。ボルシェヴィキはかゝる決議に服從しなかつた、彼等はペテルブルグ委員會、モスクワ委員會の如き多くの黨委員會において支持を見出し、そしてメンシェヴィキ的中央委員會のこの決議に抗議した。ボルシェヴィキ諸組織に壓迫されて中央委員會は自己の決議を數回變更した。メンシェヴィキは、國會の解散に對する抗議、豫め失敗に運命づけられた抗議としての即時の總同盟罷業の宣言と、勞働者階級、農民層、陸海軍の革命的部分の革命的勢力をたゞ破壞し、分散させたにすぎない部分的進出との間を輾轉反側した。ボルシェヴィキはかゝる示威運動の馬鹿らしいことを指摘し、眞面目に一般的暴動を準備せよと呼びかけた。

デューマの解散の後における出來事はボルシェヴィキの正しさを完全に確認した。そして七月の終りにスヴェアボルグにまた次いでクロンシュタットに暴動が勃發した時、メンシェヴィキ的中央委員會は、暴動のすべての重要性を考慮しないで、それに部分的進出の意義を賦與し、そして勞働者階級を暴動の積極的支持へ、暴動へ召集しないで、たゞその示威運動的支持にのみ召集した。『……デューマの解散の後我々の中央委員會によつて經驗されたもの以上の日和見主義的戰術の完全な破綻を考へることは困難だ』、――とレーニンは論文『政治的危機と日和見主義的戰術の破綻』の中に書いた*。

＊ レーニン、第十卷、四四頁。

ボルシェヴィキは臨時黨大會の召集のために決定的な鬪爭を行つた。何故なら幾多の事實は、メンシェヴィキの政策が勞働者階級を最大の敗北に、政治鬪爭における獨立性の完全な喪失に、勞働黨自體の破壞に導きうることを示したからである。メンシェヴィキの隊伍においてはプロレタリア的政策のすべての基礎の日和見主義的修正が强化された。こゝから『廣汎な勞働者黨』の設立といふ淸算主義的計畫が生れたのである（これについては後に）。

自由主義的ブルジョアジーへのメンシェヴィキの降服は、一九〇六年十一月に召集された第二回全露會議によつて明瞭に暴露された。臨時黨大會（ボルシェヴィキの提案）と無黨勞働者大會（メンシェヴィキの提案）との問題および第二國會の選擧における黨の戰術の問題が審議されたこの會議において、メンシェヴィキはブンド派の支持の下にカデットとのブロック（協定）が許されるといふ決議を採用した。その後ドイツ社會民主主義者が『小さな惡』の政策を說敎し、ヒットラーに道を提供したと全くそつくり、ロシアのメンシェヴィキは、カデットに投票しなければならぬ、さうでないと黑百人組がやつてくるだらう、と語つた。ボルシェヴィキは、この會議において少數派であり、そして自己の政治的中央部の指導の下に勞働者階級における自己の獨立的政策を實行しな

がら、而も協定の問題を決定する權利を地方組織に與へた修正を實現した、――これは、メンシェヴィキ的中央委員會が組織をして義務的にカデットとの協定に進ましめることができなかつたことを意味した。勿論メンシェヴィキはこの會議において臨時黨大會の召集を否決した。けれどもポーランド社會民主黨がこれに參加した多くの組織の要求に影響されて、かゝる大會を一九〇七年の初めに召集することが決議された。

すでに大會前に多くの組織が事實上分裂してゐた。全市的組織の決議にも拘らず、メンシェヴィキがカデットと協定を結んだペテルブルグ組織においてもまた分裂が行はれた。特殊な小册子『デューマの選擧とメンシェヴィキの僞善』において、レーニンはメンシェヴィキを無容赦に、致命的に批判した。『メンシェヴィキは、――とレーニンはこの小册子の中に書いた、――勞働者に逆つて、カデットの援助の下に自己の味方をデューマへ引摺りこむために、カデットと協定した、――ここに社會民主主義から小ブルジョア的ブロックへ、小ブルジョア的ブロックからカデットへのすべてこれらの巡歷の單なる解答がある＊』と。

＊ レーニン、第十卷、三一一頁。

メンシェヴィキ的中央委員會はこの進出の故にレーニンを黨の裁判に附した、そして黨の裁判は

二回會議を開いたが、何等の決定にも到達しなかつた。レーニンは反訴を以て進出した。第二回目の會議において演說をなし、この演說の中でメンシェヴィキの裏切的政策を暴露した。分裂主義の非難に答へてレーニンはかういつた。『分裂とは、見解の鬪爭を組織の內からの影響の基礎から組織の外からの影響の基礎へ、同志の矯正と說得の基礎からそれらの組織の殲滅の基礎へ、叩きのめされた組織に對する勞働者(および一般に人民)大衆の煽動の基礎へ移すところの、あらゆる組織的聯關の切斷である。一つの黨の成員の間において許されえないことが、分裂した黨の諸部の間において許されうるし且つ義務的である。*』と。だからレーニンは自己の行動をたゞ正しいと考へたのみならず、また義務的だと考へたのである。『君はプロレタリアートの隊伍に騷動を持ちこんだと人は私にいふ。私は答へる、私は選擧の前夜にメンシェヴィキによつて叩かれた部分のペテルブルグのプロレタリアートの隊伍に故意に且つ計畫的に騷動を持ちこんだのだ、そして私は常に分裂の場合にはかくの如く行動するであらう、と。**』。

* レーニン、第十一卷、二二〇—二二一頁。

** 同上。

『小さな地位のための』メンシェヴィキとカデットの取引のこの歷史において何よりも敎訓的なのは、カデットがこの取引に應じなかつたことである。かくてメンシェヴィキは勞働者黨の政策を小さな無原則的策動に、完全な獨立性の喪失に貶下し、引下げた。その小ブルジョア的本質はこの時代に廣汎な勞働者大衆の前に暴露された。

ロシア社會民主勞働者黨第五回ロンドン大會。その構成

第四回ストックホルム大會の後一年を經てロンドンにおいて第五回黨大會が開かれた。大會は第二國會の解散の前夜に、卽ちツァール政府が、代議士の大多數が君主制に協調し、革命に反對の氣分を有し、そしてたゞ改良を希望し、若干の改革と現存制度に對する若干の修正とを希望してゐるやうな國會さへもが政府にとつて危險だ、と信じて、國會解散の動機を求めてゐた時に、開かれた。我々は第五回大會をデンマークのコペンハーゲンに召集する豫定であつた。全代議員がそこへ向つた。けれどもデンマーク政府は我々が大會を開くことを禁止した。我々はスウェーデンへ向はうとした。スウェーデンの同志は我々のために大會をマルメ市において組織することを約束したが、そこでもまた我々は會合することを禁止された。そこで大會は全成員と共にロンド

ンへ移つた。ロンドンでは長い間の放浪、航行の後、我々は遂に大會を開くことができた。それはイギリスの平和的社會主義者（フェビアン）によつて貸與された、バルムス街（Balms-Street）の舊『同胞教會』(Brotherhood Church) の一室において開かれた。全部で三百三十六人の代議員が集まつたが、その中ボルシェヴィキ百五人、メンシェヴィキ九十七人であつた。四人は『非分派主義者』であつたが、その中にはメンシェヴィキのトロツキーもまた加はつてゐた。殘りは民族的社會民主主義組織、卽ちブンド、ポーランドおよびラトヴィア社會民主黨、ウクライナおよびアルメニア社會民主主義組織の代表者であつた。

ロンドン大會における民族的社會民主主義組織。

中央主義との鬪爭

かゝる構成の下においてはボルシェヴィキはすべての問題について自己のボルシェヴィキ的決議を通過させることができる、と考へることができた。そして大體においてロンドン大會はボルシェヴィキの勝利、彼等の戰術の勝利、勞働者階級における革命的マルクス主義＝ボルシェヴィズムの勝利を示したけれども、幾多の問題についてボルシェヴィキは、民族的社會民主主義組織、特にブンド派が、占めてゐたところの動搖的、日和見主義的、往々明かにメンシェヴィキ的な、往々中央派的な立場のために、自己の方針を貫き、それを組織的に强化することができなかつた。民族的社會民主主義組織の代議員はトロツキーを頭首とする『非分派主義的』代議員の小グループを多くの問題において支持した。そしてこの後者はこの大會においてもまた、その後革命の衰微時代におけると同樣に、事の本質において、メンシェヴィキの水車に水を注ぐところの協調的、和協的方針を取らうとした。メンシェヴィキ的中央委員會の報告についてボルシェヴィキは進出して、黨の方針の破壞、統一大會さへもの決定の破壞の多くの事實を指摘し、そして民族社會民主主義組織もまたこれらの事實を承認したが、しかし大會は巧みに問題を回避して、ボルシェヴィキの決議を採用しなかつた。この決議において我々は、中央委員會が次のことによつて統一大會の決定から退却したことを指摘しようと考へたのである。卽ち（一）責任（カデット）內閣の要求を提出したこと、（二）權力機關としてデューマのための鬪爭の要求を提出したこと、（三）カデットとの多くの協定において無賠償の土地沒收を放棄しようとし、それに代へるに土地收用（買收）の要求を以てしようと準備してゐたこと、（四）第四回大會の決定に反して中央委員會が第二國會の選擧戰當時、カデット、自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーと協定を結ばうとしたこと、（五）第

二國會において自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーとの同じ協定方針を取つたこと、（六）デューマ外の闘爭に注意を集中し且つ一方では勞働者階級および農民層の代表者と、他方ではその他の代議士との間に起つた衝突を最後まで導く代りに、妥協政策を取つたこと、（七）ペテルブルグその他の場所においてさうであつたやうに、黨の統一を破壞したこと、これである。そしてこれらの問題においてもロンドン大會においてはあらゆる妥協的な決議の害毒、民族的社會民主主義組織の代表者がその表現者であつたところの中央主義の害毒が、特に現はれた。これらの事實を評價する代りに、卽ちボルシェヴィキがしようと考へてゐたやうな行動を黨が批判する代りに、ブンドの代議員やラトヴィアの代表者は、中央委員會の報告について何等の決議をも提出しないで、單に當面の問題に移るべき提議を提出した。メンシェヴィキはたゞこれを喜び、そしてブンド派やラトヴィア人の提議を支持した。そしてこの提議は、贊成百四十三票、當時大會に出席してゐたボルシェヴィキの反對九十票、ポーランド社會民主主義者の留保四十八名で通過した。同じことは、デューマ・フランクションの報告や、新中央委員會の選擧や、プラジョア新聞へのメンシェヴィキの參加の問題の審議の場合の如き、日程の若干の他の重要な點の審議の場合にも行はれたのである。

ロンドン大會の一部のこの行動は、彼等が中央主義の立場を取つたことによつて說明される。エル・ルクセンブルグも、レオ・ツィシコも、ポーランド、ラトヴィア社會民主黨の多くの他の同志もこの立場を取つた。トロツキーもまた多くの問題について中央派的立場を取つた。この中央主義の害毒を我黨はすでに當時經驗し、中央派の不徹底に對して黨は當時においてもまた決定的な闘爭を行つた。

しかしこれは勿論、すべての問題についてラトヴィア人およびポーランド人がかゝる中途半端な、妥協的な、中央派的な方針を取つたことを意味しない、――反對に、かなり重要な若干の問題において、例へば、勞働者大會や、非プロレタリア黨に對するロシア社會民主勞働者黨の態度に關する問題において、我々ボルシェヴィキは、民族的組織、特にポーランド人の代表者のかなり多數によつて支持された。けれども民族的組織の中に我々が當時すでに完全に形成されたボルシェヴィキ組織を持つてゐたにも拘らず、代議員の一部の前述の立場のために、ロンドン大會は、それが受取りうべき明白なボルシェヴィキ的方針を受取らなかつた。實際において民族的組織の內部では當時流派の闘爭が行はれてをり、そこには自己のボルシェヴィキとメンシェヴィキとがあり、特にポーランドおよびラトヴィアの同志の間ではさうであつた（その大多數がメンシェヴィキに屬し

てゐたブンド派の間には、ボルシェヴィキは極めて少數であつた)。そしてその後間もなく革命の衰微期に、例へば、手工業者、店員およびユダヤ人インテリゲンチヤの小ブルジョア的大衆を主として代表したブンド派の組織においては、メンシェヴィキ的見解が十月革命まで、ソヴィエト權力の勝利まで決定的な優勢を保つてゐた。ラトヴィア社會民主黨におけるこの流派闘爭は革命の衰微期においてラトヴィア社會民主黨の分裂に、その中からのメンシェヴィキ派の輩出に導いた。然るにこれに反して、主としてポーランドの大工業中心地のプロレタリアートを代表したポーランド社會民主黨においては、著しい動搖と浮動にも拘らず、中央派の繼續的な影響にも拘らず、ボルシェヴィキ的見解が優勢を占め、それはポーランド社會民主黨の最も顯著な部分をボルシェヴィキ黨の隊伍に導き入れた。

ロンドン大會における戰術問題

ブルジョア諸黨に對する態度に關する問題について、ボルシェヴィキは、大會においてこの決議に對して行はれた極めて激烈な闘爭にも拘らず、自己の決議を通過させることに成功した。ボルシェヴィキの決議は、『農奴所有者＝地主の組織』たる、黑百人黨（當時の『ロシア人民同盟』――君主主義者、『統一貴族會議』その他）をはじめとして、當時闘爭したあらゆる黨の階級的本質の正しい規定を與へてゐる。決議は、『十月十七日同盟』、『商工業黨』、『平和的改新黨』の如き黨を、『地主の一部、そして特にブルジョアジーのヨリ後れた層の階級的組織』として評價した。これらの黨に對してボルシェヴィキは最も無容赦な闘爭を行ふべきことを提議した。自由主義的＝君主主義的ブルジョアの黨およびこれらの黨の主要なもの――卽ちブルジョアジーのヨリ進步的な層の經濟的利益、特に都市および農村の小ブルジョアジーの一部を自己に引きつけたインテリゲンチヤの經濟的利益を代表したところのカデットに對しては、我黨は彼等の活動を暴露し、これらの黨が民主主義的小ブルジョアジーの指導權を獲得しようとする試みに對して闘爭すべきことを提議した。當時多かれ少かれ農民層および都市小ブルジョアジーの廣汎な大衆の利益および見地を表現し、そして自由主義者のヘゲモニーへの從屬と地主的土地所有および農奴所有者國家に對する決定的闘爭との間を動搖したところの、ナロードニキ的およびトゥルードヴィキ的黨派（人民社會主義者、勤勞派、社會革命黨員）に對しては、我黨は彼等の非社會主義的性質を暴露し、プロレタリアートと小經營主との間の階級的對立を抹殺しようとする彼等の志向に對して闘爭することを提議すると共に、黨は全力をあげて彼等を自由主義者の影響および指導の下から引き離すこ

とを提議した。

大會のかなり多數によつて採用された（ボルシェヴィキと共にポーランド人、ラトヴィア人およびブンド派の一部が投票した）ところの、國會に對する態度に關する決議には、デューマ鬪爭の一般的性質はプロレタリアートのデューマ外の鬪爭に從屬されなければならないこと、そして特に大衆的經濟鬪爭の利用およびその利用への奉仕が重要なことが指摘されてゐる。議會的方法によつては政治的自由を實現することが不可能であること、『その勝利――人民大衆の掌中への權力の移行――の完全を確保しうる革命の唯一の出發點として絶對主義の武裝的勢力に對する人民大衆の公然の鬪爭』の不可避なことが依然として殘ることが、指摘されてゐる。

けれども、多くの基本的な問題についてボルシェヴィキを支持しながら、民族的諸組織はボルシェヴィキの勢力を組織的に强化することを恐れ、そして問題が中央委員會の選擧に到達した時、それらはメンシェヴィキが中央委員會を構成することを援助し、そしてボルシェヴィキは委員會において僅かに一票で多數派となつた。ロンドン大會で採用された諸決議にメンシェヴィキは不同意であつたから、これは、今後たゞ地方の組織における鬪爭を意味したのみならず、また、中央委員會の內部における激烈な分派鬪爭をも意味したのである。大會がすでに約十五萬人の組織された

黨員を代表したことは、かゝる情勢を特に危險ならしめた。ロンドン大會の後各所を巡歷して、ボルシェヴィキは、ヨリ以上の鬪爭が不可避であること、メンシェヴィキとの平和は我々の許においてはないであらうしまたありえないこと、勞働者の面前におけるメンシェヴィキの完全な暴露のため、勞働者運動におけるボルシェヴィキ黨の見解の完全な勝利のための鬪爭を行はなければならないことを知つた。

『勞働者大會』および『廣汎な勞働者黨』に關する
メンシェヴィキ的觀念の暴露

まだブルギン・デューマの問題が討論されてゐた當時、メンシェヴィキのペー・ペー・アクセリロッドは、『勞働者大會』の召集計畫を提議した。當時、一九〇五―一九〇七年、この問題はボルシェヴィキにおいてもメンシェヴィキにおいても非常に熱心に討論された。小册子や論集が出版された。レーニンはこの問題に數論文を献げた。特にこの觀念を擁護したのは、メンシェヴィキのペー・アクセリロッド、ユー・ラーリンおよび前ペテルブルグ勞働者代表ソヴィエト議長フルスタレフ＝ノサリであつた。

この計畫は一般に次の點にあつた、卽ち社會民主主義者も、社會革命黨員も、無政府主義者も、すべての勞働組合、勞働者協同組合、クラブ等々も參加するやうな大會を召集することがこれである。この大會は、彼等の言葉によれば、『全露勞働者黨』とか、『全露勞働者同盟』とか、『無黨派黨』とか、『廣汎な勞働者黨』とかを設立しなければならないのであつた。かゝる組織の必要は何によつて基礎づけられたか？　勞働者大會の支持者は問題を次の如く說明した、卽ち今や勞働者は種々の黨に加入して互に論爭してゐる――これがために彼等の壓力は弱められてゐる。だがこゝにもし我々が、その政治的見解の相違なしにすべての人が加入するやうな黨を設立するならば、その時には種々の黨のかゝる鬪爭は存在しないであらう、と。レーニンは彼等にかう答へた――

『……今日の諸條件の下においてかゝる試みは平和をも、積極的な活動をも、ラーリンが「廣汎な黨の內部における宣傳的結社」の役割を親切にも振りあてゝゐるエス・エルとエスデキ*との協力をも齎さないで、鬪爭、不和、分裂、觀念的混亂、實踐的解體の無限の增大を齎すであらう**』と。

* 當時社會民主主義者はエスデキと稱せられた。

** レーニン、第十卷、一八九頁。

實際、社會民主黨のみにおいてボルシェヴィキとメンシェヴィキとが互ひに論爭してゐた時に、そこへ更に社會革命黨員も、無政府主義者も、白ロシアの社會革命黨と、舊ズバトフ派等々も參加する場合、平和が到來する、といふ確信が一體何處にあつたか？　勿論、鬪爭はかゝる種々の、雜多の黨の內部においてたゞこれがために增大しなければならなかつた。

『勞働者大會』の支持者はかういつた、『社會民主黨においてはインテリゲンチャがあまりに多い、だが「勞働者大會」が開催されるならば、かゝる過多はなくなるであらう』と。

レーニンは彼等にかう答へた、卽ち『何故諸君のインテリゲンチャは、革命の完成をプロレタリア的要素に委して、身を退くことから始めないのか？』『諸君文筆家および少數派の實際家によつて立案された「自己組織」の中において同じ現象が反覆されない、といふ保證は何處にあるか？』と。更にレーニンは、そこには何等の『自己組織』もないこと、たゞ實際的組織的觀念の貧弱さを隱蔽する『インテリゲンチャ的こじつけがある』にすぎないことを明かにした。勞働者には決して『自己組織』といふ考は起らないであらう、と。そしてレーニンは質問した、『もし諸君が社會民主黨に小ブルジョア的革命家や、社會革命黨員その他を引張りこむならば、一體何處

から「廣汎な勞働者黨」が得られるのか？』と。

メンシェヴィキは更に、『ロシア社會民主黨の勢力とプロレタリアートの政治的に自覺した要素との結合』が望ましいとか、『「勞働者大會」の目的はロシアの勞働者の政治的結合の基礎を据ゑることにある』とかいふやうな基礎づけを提出した。レーニンはかう質問した『だがロシア社會民主勞働者黨とは何であるか？　これはロシアの勞働者の政治的結合ではないか？　ロシア社會民主勞働者黨は自己の構成のうちにプロレタリアートの政治的に自覺した要素を含んでゐるではないか？』と。かくしてメンシェヴィキはたゞたゞ自ら貧弱さの證據を差し出したのみであつて、レーニンは彼等に、『勞働者大會』の設立の思想を提出することによつて、彼等が社會民主黨の先進的前衛をプロレタリアートの『無黨派的』組織に從屬させようと努力してゐることを指示した。

廣汎な勞働者黨の設立といふ議論は一體何處から始まつたか？　この基礎には三つの原因がある、とレーニンは說明した。

インテリゲンチャ的な、ありふれた革命の疲勞――これが第一の原因だ。彼は論文『メンシェヴィズムの危機』のうちにかう書いた、『裏面に何等廣大な觀念があるのではなくて、たゞマルクス主義のための執拗な鬪爭によるインテリゲンチャの疲勞があるのみだ*』と。

*レーニン、第十卷、一八九頁。力點は筆者のもの――ヤロスラフスキー。

レーニンが第二の原因と考へてゐるのは、ロシアの社會民主主義的日和見主義*が發展して、それが勞働者運動をブルジョアジーの影響に從屬させようと志したことである。そして實際に、ブルジョアジーが、明白な革命的な政治的階級的方針を有する明瞭且つ決定的に形成された政治的勞働者組織の設立よりも、『廣汎な勞働者黨』の設立に遙かに大なる程度に共鳴したことを、我々は知つてゐる。

*　日和見主義者とは、革命的鬪爭を行はず、周圍の條件に順應し、一時的成功のために根本的任務および目的を放棄する者のことである。

レーニンが第三の原因と考へたのは、メンシェヴィキが活潑な大衆的勞働者運動の時代に作り出された組織――勞働者代表ソヴィエト、勞働組合その他の組織の意義を把握しえなかつたことである。メンシェヴィキはすでに當時、その後彼等が革命の衰微期、清算主義の時期に完全に發展させた思想を發展させてゐた。フルスタレフ＝ノサリはかういつた、『黨は自己の手に大會の召集に關する仕事を取り上げる必要はない。その召集の發議は勞働組合および大會召集特別委員會に屬しなければならぬ』と。かくしてメンシェヴィキはたゞたゞ我々の黨に自殺することを提議し

たのである。

一九〇七年のロンドン大會において、フルスタレフ＝ノサリは、勞働者大會の不成功を（見よ！）フルスタレフとトロツキーとが逮捕されたことによつて說明した。ボルシェヴィキは當時、勞働者階級のあれやこれやの大なる組織的計畫がフルスタレフとトロツキーとが逮捕されたために歷史において實現されえなかつた、といふこの哀れな思想を十分嘲笑した。もし觀念が生きてゐたら、十人のフルスタレフとトロツキーが逮捕されたとしても、それは生活において表現されてゐたであらう。然るに觀念そのものが死んで生れたものであつたから、それから何一つ生れなかつたのだ。一九〇七年のロンドン大會で一つの決議が黨によつて採用されたが、その中には、『勞働者階級に對する社會民主主義的影響との鬪爭のためにアナルコ・サンディカリストによつて取り上げられた無黨勞働者大會の觀念は、階級的發展にとつて無條件に有害である』ことが述べられてゐる。大會は黨の機關紙におけるこの問題の討議をなほ許したが、それと同時に大會は、『勞働者大會の準備に關する廣汎な勞働者大衆の中における宣傳的および組織的活動を個々の黨員にとつても、ロシア社會民主勞働者黨の諸組織にとつても許されない』ことゝ認めた。

勞働組合とそれに對するボルシェヴィキの態度

一月事件の後勞働組合の設立に對する勞働者階級の憧憬が强まり始めた。プロレタリアートの大衆運動はかゝる組織なくしてはやつて行けなかつたのである。一九〇五年九月モスクワには既に二十六の多かれ少かれ出來上つた勞働組合聯合會が數へられた。勞働組合組織は決定的にすべての都市における大衆的同盟罷業運動中に成長した。勞働組合の組織者は大部分我黨員であつて、彼等は最初から勞働組合組織を黨と結合させた。當時の勞働組合の規約を見るならば、我々はその中に極度の雜多の色彩を見るであらう、そして往々勞働組合の經濟的要求と並んで我々はその中に多くの政治的要求を見るであらう。それに先立つズバトフ組織の實踐もまたこれを助長した。勞働者は、政治の否定が彼等を『警察社會主義』に導くことを見たのである。廣汎な勞働者大衆は當時如何なる組織においても『政治なくしては』やつて行けなかつた。公然組織されることが困難であつたから、こゝかしこに非合法的勞働組合が組織された。實際、我々の間にはまだ勞働組合の組織の反對者があつて、彼等には、それが無駄な仕事であり、勞働組合の組織に從事することは眞實の革命家には似合はしからず、これはたゞ眞實の政治的任務から『引き離す』に

すぎない、と考へられた。一九〇六年ストックホルム大會で採用された決議の中には、組合が無黨派的でなければならないこと、すべての黨員が組合に加入し、それに積極的に參加して、組合員の間に連帶性と階級意識とを發展させ、『以て鬪爭と煽動との中に組合と黨とを有機的に結合し』なければならないことが述べられてゐる。ボルシェヴィキは、すでに當時、勞働組合が社會主義の學校、共產主義の學校でなければならないといふ思想を提起した。ボルシェヴィキはすでに當時勞働組合の『中立』といふメンシェヴィキの計畫に對して鬪爭した。我々のボルシェヴィキの決議の中には、『黨は勞働組合に參加する勞働者をあらゆる方策によつてプロレタリアートの階級鬪爭および社會主義的任務の廣汎な理解の精神で敎育し、自己の活動によつてかゝる組合における事實上指導的な役割を獲得することを志さなければならない』と述べられてゐた。

ストックホルム大會においては我々は民族別の勞働組合組織に決定的に反對し、そして一九〇七年のロンドン大會においては勞働組合に關する我々の決議が採用されたが、その中には我々がすべて『社會民主黨の統一的指導を勞働組合が承認すること、そしてまた黨との組織的連絡を樹立することを助長』しなければならない、と述べられてゐた。それによつて我々は『獨立的勞働組合』および『中立的』勞働組合、卽ち勞働者階級の政治組織や、その政治的活動に對して何等の關係をも有しないやうな組合の觀念を拒否したのである。獨立的、『中立的』勞働組合は正にブルジョアジーに有利である、何故ならブルジョアジーは、例へばイギリスの勞働組合において、勞働者階級の政治的利益から獨立した、だがその代りにイギリスのブルジョアジーの利益に非常に隷屬したやうな政策を支持しようと努めてゐるからである。

一九〇五——一九〇七年の革命の敗北の原因。ボルシェヴィキの評價

ボルシェヴィキは第一ロシア革命の敗北の原因を如何に評價したか？　第一に、一九〇五—一九〇七年の革命の敗北の原因は、ツァール政府をしてブルジョアジーとの取引に赴かしめたところの、國際的情勢であつた。ロシア帝國は國際的反動の防壁であつた。全世界の資本主義的ブルジョアジーは、勞働者農民革命の勝利がツァール君主制の存在よりも遙かに危險であることをよく理解してゐた。この資本主義的ブルジョアジーはただ少しくヨーロッパ的にこの君主制を結髮することを希望した。彼等はツァール專制政治に對する多少の修正、多少の改良* を支持することを厭はなかつた、何故ならこれらの改良はロシアにおける資本主義のヨリ以上の發展にとつて有利

であつたからである。西歐の資本はこのことに關心を持つてゐた。さればこそ西歐の資本家はウィッテ伯のツァール政府が借款を契約することを援助し、そしてこの借款によつてツァール政府はブルジョアジーの一部を買收し、そして日露戰爭と革命とによつて作り出された困難な金融恐慌から脫出したのである。

＊ 革命と區別して改良といふのは、根本的な點において現存制度を保存するが如き現存制度に對する修正のことであるが、一方革命は、他の階級に權力を與へ、この制度を根本的に改變する。改良の支持者は革命の支持者――革命家と區別して改良家と稱せられる。

第二に、自由主義的ブルジョアジーは人民を裏切つた。彼等は革命の初めには何でも好きな約束を與へた。一九〇五年十月十七日の後、我々は、如何にこのブルジョアジーの一部が反動的な『十月十七日黨』――十月黨を組織するかを見る。この黨の形成は自由主義的產業ブルジョアジーと地主との取引、協定の結果であつた。何故なら自由主義的ブルジョアジーは、西歐のブルジョアジーと同樣に、プロレタリアートと農民層との勝利を專制政治の存在よりも遙かに大なる程度に恐れたからである。彼等は西歐の革命の經驗によつて、彼等が專制政治と有利な取引を結びうることを知つてゐた。

形式的には統一されながら、實際には別々の道を進んだ二つの黨が、勞働者階級に對する影響のために鬪爭した。一つの黨、ボルシェヴィキ黨は、勞働者階級を前衞として、先進部隊として、革命の主導者として推し進め、彼等を革命的農民との同盟に召集した。トロツキー派からダンおよび當時右翼に立つてゐたマルチノフの如きメンシェヴィキに至るそのあらゆる色彩を有する他の黨は、プロレタリアートの同盟者としての農民層の革命的役割を否定し、實際においてプロレタリアートのヘゲモニーを否定した。それにも拘らず、一九〇五―一九〇七年の革命は、一九一七年の革命の勝利を準備した、それは一九一七年の革命の一般的豫行演習であつた。論文『第一革命の第一段階』においてレーニンは一九一七年かう書いた――

『一九〇五―一九〇七年のロシア・プロレタリアートの最大の階級的戰鬪と革命的エネルギーとの三年間なくしては、數日間におけるその最初の段階の完成といふ意味で、かくも急速な第二革命は、不可能であつたらう。第一（一九〇五年の）革命は地盤を深く爆破し、數世紀來の偏見を根こそぎにし、數百萬の勞働者と數千萬の農民とを政治生活と政治鬪爭とに覺醒させ、相互に――そして全世界に――ロシア社會のすべての階級（およびすべての主要な黨）をその眞實の性質において、その利益、その勢力、その行動能力、その當面および最後の目的の眞實の相互關係

において、示した*』と。

* レーニン、第二十卷、一三—一四頁。

しかし一九〇五—一九〇七年の革命の敗北の基本的な且つ主要な原因は、勞働者階級、並びに特に農民層の進出の不十分な準備、不十分な組織にあつた。この不準備についてレーニンは一九二〇年十二月二十五日クラスナヤ・プレスニヤの勞働者宛の手紙の中にかう述べてゐる、『モスクワ勞働者の忘れ難い英雄主義はロシアの全勤勞者大衆に鬪爭の模範を與へた。しかしこの大衆は當時まだ餘りに未發展であり、あまりに分散されてをり、そして武器を執つてツァールの地主的君主制に對して起つたプレスニヤおよびモスクワの英雄を支持しなかつた*』と。

* レーニン、第二十六卷、六〇頁。

一九〇五年の革命に關するスウィス勞働者への報告において、レーニンは、農民の不十分な組織を革命の敗北の根本原因の一つとして指摘してゐる、『遺憾ながら、農民は餘りにバラバラに、非組織的に、攻擊において不十分に行動した、そしてこゝに革命の敗北の根本原因の一つがある*』と。

* レーニン、第十九卷、三五四頁。

その同じ不十分な組織をレーニンは一九〇五年の革命における勞働者および兵士のためにもまた指摘してゐる、『軍事的形態における勞働者と農民は暴動の魂であつた。運動は民衆的なものになつた。ロシア史上初めてそれは被搾取者の大多數を包括した。そこにおいて何が不足してゐたかといへば、それは、一方では、信賴の病氣に餘りにも苦しんだところの、大衆の忍耐、決斷であり、他方では、軍服を着た革命的社會民主主義的勞働者の組織が不足してゐた。卽ち彼等は自己の手に指導を奪取すること、革命軍の先頭に立つことおよび政府權力に對する攻擊に移ることの能力を持つてゐなかつた*』と。

* レーニン、第十九卷、三五一頁。

第七章　參考文獻

レーニン、ロシア社會民主勞働者黨統一大會（レーニンの演說と決議草案）、全集、第九卷、一四五—一六九頁。

レーニン、ロシア社會民主勞働者黨統一大會への戰術的綱領。ロシア社會民主勞働者黨統一大會への決議草案、全集、第九卷、三七—五〇頁。

レーニン、ロシア社會民主勞働者黨統一大會に關する報告、全集、第九卷、一七五—二二六頁。

レーニン、大會の結果について、全集、第九卷、二三七—二三九頁。

レーニン、ロシア社會民主勞働者黨統一大會の決定および決議、全集、第九卷、四六三—四七二頁。

レーニン、ロシア社會民主勞働者黨第五回大會への決議草案、全集、第十卷、三八二—三八九頁。
レーニン、革命的社會民主黨の綱領、全集、第十卷、三九〇—三九七頁。
レーニン、ロシア社會民主勞働者黨第五回大會(レーニンの演說および決議草案)、全集、第十卷、二二九—二六八頁。
レーニン、ロシア社會民主勞働者黨ロンドン大會の決議および決議草案、全集、第十一卷、五一七—五三八頁。
レーニン、ブルジョア諸黨に對する態度、全集、第十一卷、二七一—二八六頁。
レーニン、立腹した當惑、全集、第十一卷、一四一—一五二頁。
レーニン、勞働組合の中立、全集、第十五卷、一三八—一四八頁。

第八章　第一革命時代の大衆鬪爭の指導における黨

ロシアにおける勞働者階級の組織の特殊條件

我黨は新しい型の黨であつた。これは、社會主義獲得の徹底的革命的鬪爭のためのマルクス＝レーニン主義の革命的學說の花崗岩的な基礎の上に結合された、職業的革命家の組織であつた。これは、レーニンが屢々軍事的組織と稱したところの、戰鬪的な黨であつた。これは鐵の規律によつて結合された黨であつた。數的には比較的小さかつたが、而もそれは勞働者、勤勞者の極めて廣汎な大衆と結びついてゐた。それは右翼および『左翼』の日和見主義に對する鬪爭のうちに、中央主義に對する鬪爭のうちに、和解主義に對する鬪爭のうちに成長し且つ鞏固になつた。

我黨は主として地下的、非合法的活動の條件の下に成長した。この點に大多數の他の國の社會黨および共產黨さへものとのその相違がある。我黨は、勞働者サークルを組織しようとする小さな試みの故に人々が多年の流刑生活をなし、これがために數年間の禁錮および懲役さへもの犧牲

を拂つた時に、形成され始めた。ボルシェヴィキ黨の我々の自由な言葉は地下から道を切り開かなければならなかつた――タイプライターで印刷された原稿の檄文から、また手で書かれ謄寫版で增刷されたもの、その後には他の擴大機構――地下の印刷所で印刷されたものから、やつと一九〇五年に我々は、公然の集會を組織し、公然と新聞および書籍を出版するヨリ合法的な可能性を得たのである。

西歐においては種々の傾向の勞働組合、卽ちプロレタリアートの階級鬪爭のこの大衆的組織は、大部分勞働者階級の政黨が設立されるよりも前に設立され、そして勞働者階級の黨はこの大衆的勞働組合から勞働者政黨の組織のために進步的要素を汲み取ることができたのに反して、我々の許では、地下のロシアでは、勞働組合はすでに政黨――勞働者階級の組織が形成された時に組織された。この黨的政治的組織が勞働組合組織事業を引き受けなければならなかつた。

西歐の多くの國においてはブルジョア民主主義革命が勞働者階級の社會主義政黨の完全に形成されるよりも早く完成されたのに反し、我國では、勞働者階級は、ボルシェヴィキ黨を先頭に持ちつゝ、ブルジョア民主主義革命を指導し且つ完成する任務を引き受け、農民層を味方につけ、そして西歐においては農民層がブルジョアジーと共に解決したやうな問題を彼等と共に解決しなければならなかつた。

我々の黨組織が第一革命において如何に建設され且つ如何なる狀態にあつたかを理解するためには、我々はロシア革命史のこれらの三つの最も主要な特殊性を眼中に置かなければならぬ。

組織は如何に建設されたか

ロシアの社會民主主義者がこれに曝されてゐた最も嚴しい追求の條件の下においては、公然存在する勞働者黨の建設を考へる餘地はなかつた。黨は不斷の政治的追求の壓迫の下に、地下に建設されなければならなかつたし、それを維持する可能性を與へるやうな組織形態を工夫しなければならなかつたし、警察の追求、逮捕、流刑、組織の破壞にも拘らず、勞働者階級との必要な聯關を保持し且つ强化しなければならなかつた。

だから一九〇四年以前には我々は極めて少數の選擧された委員會を持つてゐた。中央委員會は任意の組織へその指導のために同志を派遣し、任命することができ、委員會は互選すること、卽ち下からの何等の選擧なしに、任意の同志を黨組織の指導のために自己の構成に導き入れることができた。指導的中央部は祕密にされ、卽ち隱蔽されてゐなければならなかつた。組織の指導者

の名はたゞ少數の組織員にのみ知られてゐた。委員會の全員はたゞその成員および上級指導機關——地方又は中央委員會にのみ知られてゐた。諸委員會は、當時稱せられてゐたやうな、機能的特徴によつて、通常構成されてゐた、卽ち同志達は選び分けられて、その各人が何等かの機能を持つてゐた、卽ち委員會の活動の何れかの特殊な部分を遂行した。かくして委員長の外に委員會には責任宣傳者、責任組織者、技術の組織者、軍事的組織者がゐた。委員の數は多くはなかつた——五人乃至九人。往々委員會の成員に大地方の組織者が參加した。組織に關する一切の報告が委員長の許に集中された。彼の手許には委員、地方の組織者、報告室（卽ちあれやこれやの同志が調査のため、協議のため、あれやこれやの同志や黨務に關する報告のために出入することができた室）、文書の倉庫、文書の頒布のための連絡室、武器の倉庫、ビラその他の文書が印刷された場所、爆彈製造所その他のすべてのアドレスが保存されてゐた。委員長の許には中央機關や外國との通信のための符號が保存されてゐた。大都市においては地區別に煽動者＝宣傳者のグループが組織され、責任宣傳者がそれを指導した。委員會の責任宣傳者は煽動、宣傳のすべての組織を指導し、宣傳者を集め、如何なる方向に活動を行ふべきか、といふやうな指示を彼等に與へ、宣傳サークルにおける活動計畫を彼等と共に作成し、移動集會や、大衆的集會、卽ち或ひは工場附近において、或ひは何處か町外れや、空地または森林や、または原野において、或ひは放棄された石切場又は住宅において開かれたところの小さな移動集會における演說のために指示を與へた。サークルは小人數であつたが、その場合黨員は互ひに普通大部分は姓によつて知らないで、各人が黨に加入する時に採つたところの變名によつて知つてゐた。時々この變名は生涯保存されて、同志の本名に取つて代つた。かくてウラヂミール・イリーチ・ウリヤノフはその生涯彼の黨名レーニンを持つてゐた。かくて同志スターリンを多くの地下運動者は、今もなほ『コバ』と呼んでゐる。時々同志達は、何處にでも潛り込んでゐるスパイに對してヨリ善く自己の本名を隱蔽し且つヨリ以上の追求の可能性をスパイから奪ふために、數箇の名を持つてゐた。

工場および地方の組織者は組織的活動を行つた。工場においては或ひは宣傳のためのサークル、或ひは工場委員會が組織された。工場委員會は、往々三人乃至五人の、地下組織に加入した先進的勞働者の極めて小さな細胞であつた。地方の組織者は、規則正しく集會を召集し、一般的指令を與へ、勞働者階級の間における煽動のための手綱として役立ちさうな最も顯著な事實に關する報告を彼等から受取り、この報告を黨の委員會に傳へるために、すべての工場委員會を知つてゐなければならなかつた。同じことは工場の勞働者との相互關係における宣傳者や煽動者の報告の

蒐集といふ意味においてもなされなければならなかつた。何等かの組織運動の計畫を立てるために、時々地方組織者の集會が開かれた。しかし困難な警察的條件の下においては、この一般的な集會は、失敗、逮捕を避けるために、比較的稀れに組織されなければならなかつた。何故ならかやうな逮捕や失敗は活動を往々一週間もそれ以上も麻痺させ、中斷したからである。

第一革命時代における我黨の數的および社會的構成

勿論、我々が地下で活動したやうな條件の下においては、組織の全員の正確な名簿を持つことは問題となりえなかつた。何處にも當時は殆ど何等の黨員券も、何等の黨員手帖もなかつた。各工場組織者は工場組織員を記憶によつて知つてゐた。極めて稀れに彼はこれらの黨員の名簿を地方委員會または委員長に傳達した。これは、組織が數的に極めて小さかつたことを意味しない。すでに當時我黨のペテルブルグ委員會の如き組織はメンシェヴィキのペテルブルグ『グループ』と共に約三千人の勞働者黨員を有し、モスクワにおいては一九〇五年中頃ボルシェヴィキ組織の成員は約二千五百人であつた。バクーの黨組織その他多くのものもまた強力であり多數であつた。

ボルシェヴィキ組織とメンシェヴィキ組織との黨員數はほぼ同一で、一九〇五年に、ブンド派とポーランド社會民主主義者の組織とを別にして、約三萬人であつた。

けれども指摘しなければならないことは、ボルシェヴィキ組織が工業中心地において優勢であつたのに反して、メンシェヴィキが手工業者、インテリゲンチヤ、學生層、都市小市民層および部分的には農民層の間で遙かに大なる影響を持つてゐたことである。マルトフは彼の『ロシア社會民主黨史』（一三一頁）において、『コーカサスにおいてはメンシェヴィキは農民および小ブルジョアジーの中で優勢であつた、そしてメンシェヴィキが勞働者階級の中で影響を持つてゐたところでは、彼等は階級闘爭、政治闘爭よりも職場の闘爭、職業的闘爭にヨリ多く傾いた勞働者を結合した』ことを認めてゐる。一九〇五年以後我黨の成員數は著しく增加した。一九〇七年のロンドン大會にはすでに十五萬人の黨員が代表された。彼等のうちすべての場合に半數は勞働者であつた。

組織における選擧主義

メンシェヴィキは組織問題において自己の民主主義を（特に言葉の上で）强く力説した。トロツキー派をも加へて、メンシェヴィキは、すでに一九〇五年に選擧主義の實行を要求したが、當時實

際においてこの選擧主義は民主主義、選擧主義の有害な遊戯であつて、たゞ憲兵や警察をして容易に我々の黨組織に侵入させたにすぎない。しかしメンシェヴィキの諸組織においてはこの選擧主義がヨリ多く言葉の上のものであつたことを指摘しなければならぬ。

實際においてはメンシェヴィキは任命主義を實行し、組織を上から建設した。メンシェヴィキの組織は主にインテリゲンチヤ的組織であつた。だがレーニンは、政治闘爭を指導する能力を有する勞働者の幹部を作ることが必要だといふ意識の中に我黨を教育した。この意味で第三回黨大會の決議は採用された。一九〇五年五月五日(四月二十二日)に書かれたこの問題に關するレーニンの言葉が保存されてゐる、『委員會の委員に適する勞働者がゐない、と人々がいつた時、私は靜坐してゐることができなかつた。問題は長引いてゐる。明かに黨内には病氣がある。勞働者を委員會に入れなければならぬ*』と。

* レーニン、第七卷、二八四頁。

一層公然と會合することが可能となるや否や、ボルシェヴィキは選擧主義を實行し始めたが、勿論それと同時にあれやこれやの組織に黨員を派遣する權利を中央委員會のために維持し且つ互選、卽ち選擧によらないで新しい黨員を自己の構成に入れることの權利を委員會のために殘した。一九〇五年秋、地方都市委員會は一層自由に選擧され始めた、――卽ちこれがために會議が組織され始めた。しかしこれは地方委員會の全員が選擧的であつたことを意味しなかつた。卽ち從前の如く總指導的中央部(黨中央委員會)は責任的活動家、組織者および宣傳者、卽ち地方における主な指導者を地方へ任命した。一九〇六年、特にストックホルム大會の後、我々の組織は著しく改造された、――その中では選擧主義が一層徹底的に實行された。すでに一九〇五年冬、ボルシェヴィキのタンメルフォルス會議において、觀念的および實踐的指導の仕事における全權を選擧された中央部に賦與すること並びにその交替と最も廣汎な公開とその行動の嚴密な責任を伴ふところの選擧主義の實施の必要が承認された。

我々ボルシェヴィキにとつては組織における民主主義は決して目的ではなかつた。それはたゞ大衆のヨリよき組織の手段であり、活動への積極的參加へ彼等を引き入れる手段であつた。民主主義の形態、その範圍、規模は、全體における勞働者階級の先進的な層の闘爭の條件に從つて、政治的情勢に從つて變化したしまた變化しなければならなかつた。その後、第十回黨大會において、大會は黨建設の問題について、『革命的マルクス主義の黨は革命的過程のすべての段階に適する、絶對に正しい黨組織の形態を否定する、反對に組織形態と闘爭方法とは與へられた具體的歴

史的情勢と、この情勢から直接に生ずる任務とによつて全く決定される』と聲明した。

メンシェヴィキの特徴的な特性は、彼等が常に言葉の上で自己の民主主義を自慢したしまた自慢してゐて、民主主義がそれ自體においてあらゆる病める組織に對する萬能藥であるかの如く、事態を描き出すことである。

勞働者出版物は如何に組織されたか

地下的活動の時代には、我々は新聞や本をヨリ自由な條件の下にある外國で印刷することなくしてはすまなかつた。新聞『イスクラ』、『フペリョード』、部分的には『プロレタリー』もまた外國で印刷された。(一時我々は『イスクラ』を外國から母國へ送られたのちロシアで――キシネヴォで、また『プロレタリー』をペテルブルグで印刷したけれども)。これと全く同樣に雜誌『ザリャー』もまた外國で印刷され、大量的普及のための小册子と本も外國で印刷された。それらは運送や配達の便宜のために薄葉紙に印刷されなければならなかつた。國境に文書の運送の特殊な地點が組織され、『運輸が調整された』。この任事のために多くの同志――彼等からは排他的な巧妙、大膽、仕事に對する献身が要求された――が、多年を費して外國からの文書の輸送技術を完成した。同志ピャトニツキーやエヌキーゼはこの點において特に大なる仕事をなし遂げた。彼等は二重底の旅行鞄で運搬し、稅關の監視者や憲兵の警戒を裏切り、被服の下に入れて自ら運搬した。しかし文書の大部分は我黨によつて組織された特殊な密輸入地點を通じて行つた。しかしただ文書だけが輸送されなければならなかつたのではない――活動家をそこから送らねばならなかつたし、また一九〇五年からは武器もまた送られなければならなかつた。けれども革命的鬪爭の必要は外國の出版物によつては滿たされなかつた。卽ち新聞は不十分な部數しか印刷されず、『イスクラ』は往々百人當り一枚しか手に入らず、それは祕密に次々と送られて、擦り切れ、最後の讀者に屆く時には、謂ゆる『穴まで』讀まれて、判讀し難い狀態であつた。非合法小册子も同樣に汚くなるまで讀まれた。そこで黨委員會がビラ、宣言を發行すると、それらはロシアの國內で種々の方法で復製された、そしてこれらのビラは巨大な部數で印刷されたことを述べなければならぬ。かくて一九〇五年一月中だけでも次の如く發行された――

	ビラ	部數
キエフ委員會によつて	二六	七〇、〇〇〇
オデッサ 〃	二八	八〇、〇〇〇
セヴ・ストポーリ組織によつて	二三	一六、四一〇

シムフェロポーリ 〃	二三	一七、〇〇〇
トムスク委員會によつて	二三	一一、〇〇〇

一九〇五年五月モスクワ委員會によつて一種のビラが八萬七千枚、オデッサ委員會によつて二十三種のビラが二萬八千三百四十枚發行され、北部委員會によつて八種のビラが三萬九千五百枚發行された。恐らく他の何れの國も第一革命時代の我國におけるが如き非合法的勞働者出版物の發展を知らないであらう。各委員會は、事件に活潑に反響しつゝ、往々革命の最も重要な瞬間に殆ど毎日ビラを發行したが、それらは、全く新聞には取つて代らなかつたけれども、大衆的政治的煽動の手段として役立つた。

然し新聞もまた當時かなり多く出てゐた。かくて『イスクラ』は毎週、そして往々週二回一萬—一萬五千部出た。その個々の號はロシアで複製された。新聞はたゞロシア語で出たのみではない。かくてブンド派は新聞『アルバイター・シュティンメ』(『勞働者の聲』)を發行し、ラトヴィア人は新聞『チニャ』(『闘爭』)を、ポーランド社會民主主義者は『チェルボヌィ・シュタンダルト』(『赤旗』)を發行した。これらの新聞もまた規則正しく發行された。その外に——實に、非常に多くの地方において我々は合法新聞を利用した。これはすでに一九〇五年のことで、當時我々はペテルブルグで新聞『ノーヴァヤ・ジズニ』を、モスクワで『ボリバー』と『スヴェトチ』を發行し始め、次いで『ヴォルナー』、『エーホ』その他を發行した。漸く可能性が生ずるや否や、我々は、勞働者運動に關する小册子を澤山出版したところの、自己の公然の、合法的出版所を經營し始めた。『モロト』、『プレヴェーストニク』『コーロコル』、スキルムンタ、『ノーヴァヤ・ジズニ』がこれであつた。これらの出版所は第一革命時代に數百萬の小册子を出版した。我々の小册子は他の出版所によつてもまた出版された、卽ちドン河畔ロストフのバラモノヴァ、モスクワのミャグコヴォイその他がこれである。

農民層および學生の中における黨の活動は如何に組織されたか

黨はたゞ勞働者階級の中においてのみならず、また農民層の中においても活動を行つた。農民層の中においては當時(そしてその後もまた)社會主義者の組織を作ることは遙かに困難であつた。かゝる獨立的な任務を我々は當時自ら提起しないで、農民層における主要な我々の任務は、進行しつゝある革命の任務の正しい理解を農民層の中に普及させ、廣汎な農民層に革命的農民の

先進的且つ唯一の眞實の同盟者としてのプロレタリアートの役割を說明することにある、と考へた。それと同時に我々は特殊な我々の任務——都市のプロレタリアートと農村のプロレタリアートとを結合することを忘れなかつた。だから農村における賃銀勞働が廣汎に發展してゐるところでは、我々の許にはただ都市の勞働者のみならず、また農村の日傭人の組織が存在した。こゝかしこの大きな領地には、特殊な農村グループが存在し、そして一九〇五—一九〇六年には、農民層の中における活動の實行方法の共同的討議のために農民の中における活動家の會議が組織されさへもした。

我黨は學生層の間で大なる活動を行つた。學生層は革命時代には疑ひもなく非常に大なる革命的昂揚を經驗した。彼等の中には、社會的に農民層や都市小市民に近いかなり顯著な全く民主主義的な部分が存在し、それらは當時全く誠意を以て一般運動に合流した。學生の壓倒的多數が自ら社會主義者と考へ、自ら種々の黨、グループ、分派に加はつた。一九〇五—一九〇六年およびまだ一九〇七年においてさへも、高等學校の學生層は革命的宣傳および煽動事業において、また特に、かなりの勞働者層がこれに參加した大衆的集會のために高等學校の講堂を提供することによつて、集會の自由を實現することにおいて我々を援助した點において、大なる役割を演じた。

學生層の中にはこの時代に小さなものではあるが、鞏固な、勞働者階級の鬪爭と結合された人々の核心が分離した。大きな大學都市には特殊な學生の社會民主主義局、特殊の學生の社會民主主義グループが存在した。學生層の全大衆を結合してゐた學生局へ、我々ボルシェヴィキは自己の代表者を入れることに努力した。かくてペテルブルグ學生會議または學生局において我々は一時自己の代表者の多數を持つてゐた。これは我々に黨の目的のために廣汎に學校を利用する可能性を與へた。そこには我々の出張所があつた。男女の學生を以て我々は文書の普及のため、基金募集組織のためのグループを形成した。例へば武裝暴動時代のモスクワにおけるが如く、あちこちに當時學生の民兵があり、それらは勞働者階級の隊伍において鬪爭した。

我々は當時特殊な共產青年組織、青年の特殊な組織を持つてゐなかつた。その中で我々が社會主義の宣傳を行つた青年學生より成る學生のサークルが存在した。一般的革命的昂揚の時代にはこゝかしこで中等學校もまた革命運動に參加した*。

* ユダヤ人組織ブンドは未成年者——學生、手工業者——を謂ゆる『小ブンド』に組織し、その大衆的勞働者運動の時代には諸都市において『未成年者』——『少年』——學生等々の『同盟罷業』が行はれたことを指摘しなければならぬ。

黨は反宗教的組織を作らず且つ反宗教的宣傳の問題を第一位に推し進めなかつた、と意味にお

いて、黨は當時特殊な反宗敎的宣傳を行はなかつた。

この問題は當時の我々の活動において何等の顯著な地位に突き出しうるやうな問題ではなかつた。しかしこれは、我々が宗敎を『私事』と看做したことを意味しない。正に鬪爭の最も尖鋭な瞬間、一九〇五年十二月暴動の前夜に、――レーニンが特に論文『社會主義と宗敎』を書くことを必要と考へたことを注意すれば十分だ。この論文の基本的命題は、レーニンによつて論文『宗敎に對する勞働者黨の態度について』および『宗敎と敎會に對する階級と黨』（一九〇九年、第十四卷、六八―八五頁）およびもつと後の論文『戰鬪的唯物論の意義について』（第二十七卷、一八〇―一九〇頁）において述べられた命題と同樣に、今日まで我々の反宗敎的活動における指導的命題となつてゐる。特に我黨は宗派信者の間における活動の組織に注意を注がなければならなかつた。ツァール政府の下において宗派信者――シュトゥンディスト、バプティスト、聖靈否定派信者その他――は公然と自己の信仰を說敎することができず、彼等には會合することさへ禁止されてゐた。だから若干の宗派信者、例へば聖靈否定說信者の如きは、正敎の信仰で敎育するために聖靈否定說信者から子供を奪つたツァール政府の追求を避けて、アメリカへ移住さへしなければならなかつた。すべての流刑地は宗派信者で滿たされてゐた。宗派信者は、ツァール政府の追求を避

けて、シベリアの最も遠い地方へ移住した。それ故、第二回黨大會では、當時宗派主義の研究に從事した同志ボンチ＝ブルエヴィチの報告を聞き、そして一つの決議が採用されたが、この決議の中には、『ロシアにおける宗派運動は、その多くの現はれにおいて、現存秩序に向けられた民主主義的傾向の一つである。』と述べられてゐる。だから大會は、宗派信者を社會民主黨へ引きつける目的で彼等の中における活動に全黨員の注意を向けた。宗派主義は當時、それがヨリ自由な民主主義的秩序の樹立や、國敎會の破壞や、敎會の國家との分離に關心を持つてゐた、といふやうな狀態にあつた。自己の宗敎的信念の說敎の自由の領域において、宗派主義が第一革命において達成したところのものは、漸く十月革命によつて實現され、そして敎會と國家との分離に關する布告によつて定式化された。

それにも拘らず宗派運動が今日もなほ存在するとすれば、この宗派運動は、外面的には同じ形態と敎義とを持つてはゐるが、別のものである。それは進步的な勢力たることを止めて、宗派主義青年の中に益〻增大する共產主義への傾向、社會生活への參加の傾向に對する鬪爭のために、勞働者および農民青年の增大する無神論に對する鬪爭のために、宗敎にしがみつくのである。それは徹頭徹尾、バプティスト、メンノー派信者、エヴァンゲリスト等々の中におけるクラーク層の

直接的隱蔽となつた。『フェドロヴェッ』、『イミャスラヴェッ』その他の如き、プロレタリア獨裁期に發生した多くの反革命的組織は、宗教が革命的時代において如何なる目的のため、如何なる階級のために役立つかを特に明瞭に示した。

陸海軍におけるボルシェヴィキの革命的活動

軍隊における活動は如何に組織されたか？　ロシア革命は軍隊に對する態度、その革命の側への吸引の問題を徹底的に提起し且つ解決した。けれども、黨がこの問題を解決した方法は、巨大な、だが革命において不可避的な犠牲に値した困難な方法であつた。

我々は軍隊において、彼等の軍務への召集前に勞働者や農民の中において持つてゐた連絡を利用した。新兵が諸都市で募集された時には、我々は新募集運動を利用した。この場合我々は新兵や、若い兵士に向けられたビラを發行し、警察的、ブルジョア的、地主的國家における軍隊の役割を彼等に說明し、勞働者階級および農民層に對する彼等の義務を說明し、そして彼等に勞働者階級および農民層と提携して武器を採つてツァール政府や、地主および資本家に對して鬪爭せよ、と呼びかけた。社會的構成において勞働者階級および農民層から甚だしくかけ離れてをり且つ主として貴族から、だが後にはまた商人層や官吏層から召集された士官の中では、我々は餘り活動を行はなかつた。けれども我々の軍事的組織の活動に積極的に參加し、我々の運動に對する同情者であつた個々の士官がゐた。彼等のうち若干のものは我黨の黨員であつた。

我黨は、軍隊において革命的活動を行ふ場合、困難な條件の下にあつた。兵士に對しては周到な監視が加へられてゐた。彼等は兵營においてたゞ政治的に『怪しい』人々とのみならず、一般に大衆との交通について警戒された。彼等の手紙は警察によつて閱讀された、そして兵營へは、兵士に國民の困難な狀態に關する思想を少しでも起させうるたゞ一つの印刷されまたは書かれた言葉も通されなかつた。殘酷極まる懲罰（帝國主義戰爭時代に復活された兵士の笞打は、一九〇三年まで保存されてゐた）、懲治大隊、營倉、意思および意識を殺す教練、兵士の間における特殊な君主主義的および僧侶主義的な反動的宣傳――すべては兵士を所有者階級の掌中における『ツァールおよび祖國の忠僕』たらしめることに向けられてゐた。けれどもすべてのこれらの方策にも拘らず、革命運動は軍隊に侵入した。一月九日前にもまた我黨はあちこちで軍隊において革命的活動を行つたが、一月九日以後この活動は到るところにおいて强化され、特殊な軍事的組織が設立され始めた。特に大都市の守備隊や要塞における兵士や水兵宛の檄文、ビラが益〻頻繁に現は

れた。クロンシュタット、セヴァストポーリ、スヴェアボルグ、バツム、ウラヂオストック、ワルソー、リガ、リバフ、ドヴィンスク要塞やその他多くの諸都市の軍隊において革命的活動が行はれた。

けれども陸海軍にかける革命運動は、當時我黨の組織がまだそれを計畫的に指導するほど完全にこの運動を摑んでゐなかつたことによつて、弱められた。それは、當時多くの部隊の中に我黨の軍事的組織（聯隊、大隊、中隊委員會、サークル、グループ）が設立されたにもかゝはらず、著しい程度にまだ自然發生的であつた。一九〇五年夏の黑海艦隊の水兵の暴動については、我々はすでに知つてゐる。一九〇五年十月二十六—二十七日にはクロンシュタットに暴動が勃發した。政府はそれと同時に泥醉者の虐殺を組織し、叛亂者のうちの最も無自覺的な部分を虐殺の道に引き入れることに成功し、これによつて運動を解體せしめた。暴動は鎭壓された。暴動に參加した水兵の最良の部分は軍法會議に附せられた。一九〇五年十一月十一日暴動がセヴァストポーリに勃發した。こゝではそれはヨリ多く組織的であつた。こゝでは水兵の運動は勞働者の運動と結びついてゐた。けれども暴動の組織は極めて拙劣であつた。政府は遙かに大なる程度に武器、技術を利用することができ、政府は忠實な軍隊を暴動の鎭壓に動員することができた。數百人の水兵および兵士がこの暴動において仆れ、二千人以上の叛亂者が捕虜になつた。同時に幾多の都市——キエフ、ピャチゴルスク、ハリコフ、エカテリノダル、ロムジャ、ロストフ＝ヤロスラフスク、スフム、ウォロネジ、チフリス、バラノヴィチ、ヴィテフスク、オレル、スタフロポール、ミンスク、ノヴォロシースク、イルクーツク、クルスク、ポブルイスク、タシケントその他の諸都市においても、また、勞働者および農民の一般的革命的氣分によつて養はれた軍事的暴動が行はれた。

こゝで指摘しなければならないことは、最も強い、最も組織的な運動は、プロレタリア層の影響が著しかつた部分において、舊熟練勞働者が多かつたところの特科隊——工兵、對壕兵において、水兵や砲兵の間において存在したことである。

一九〇五年以來我黨の多くの軍事新聞が發行され始めた。十二月暴動の後モスクワでは『ジズニ・ソルダータ』が、ペテルブルグでは『カザルマ』が發行された。軍事新聞は他の諸都市においても發行された。

一九〇六年春、ボルシェヴィキによつて組織された軍事組織の最初の會議（最初の會合において逮捕された）がモスクワに召集された。一九〇六年夏スヴェアボルグおよびレヴァルにおいて暴動が起つたが、十分な組織が缺けてゐた結果鎭壓された。一九〇六年秋、メンシェヴィキが支配した中央委員會は、地方組織の壓迫の下に、何人をも滿足させなかつたかなり哀れな會議を召集し

た。當時ボルシェヴィキは軍事組織と戰鬪組織との活動を統一しようと試みた。一九〇六年十一月タンメルフォルス市（フィンランド）において黨の軍事組織および戰鬪組織の最初の（ボルシェヴィキ）會議が開かれた。陸海軍の隊伍において我黨は大なる役割を演じた。けれども我々の主たる配慮は、革命的勢力が徒に浪費されてゐる、自然發生的、分散的な軍事的爆發および暴動を一緒に合同することができるやうな組織を作ることであつた。レーニンはこの會議の決議に特殊な論文を献げ、そのすべての決議に對して非常に同情的な態度を取つてゐる。

一九〇七年我黨は我黨のデューマ・フラクションの成員と勞働者階級および農民層、並びに軍隊における大衆運動とを結びつけようと試みた。政府は、もし我々がかなり多數の我々のデューマ・フラクションを革命的人民大衆の組織のために議會の演壇を利用する中心に轉化することに成功しようものなら、かゝる連結がどの位危險であるかを理解してゐた。當時運動は大なる成功を收めさうであつた。そこで政府の警察の手先、保安課員や憲兵は、我々によつて作られた軍事組織に侵入しようと努力した。一九〇七年全ペテルブルグ守備隊、陸海軍に革命的氣分が存在し、國會議員、勞働者代議士への請願と指示とが行はれた時、彼等はペテルブルグの軍事組織に侵入することに成功した。ツァールの保安課員の手先はすべての集會に侵入して、我々の計畫を憲兵に洩らした。一九〇七年末第二國會を解散し且つ我々の勞働者代議士を逮捕して、政府は有名なデューマ訴訟事件を作り出したが、それには兵士もまた連坐した。同時に我黨の軍事的および戰鬪的組織の多くの司法裁判が行はれた*。

* 我黨のペテルブルク委員會の軍事組織および戰鬪組織問題に關するかゝる訴訟事件の一つによつて、一九〇八年本書の著者は懲役に處せられた。

ボルシェヴィキ黨の戰鬪的活動

武裝暴動を開始するためには、勞働者階級は小さなものにもせよ武裝された幹部を持たなければならなかつた。だから武裝暴動の問題が提起された瞬間から、ボルシェヴィキ黨は、民兵の創設、この民兵の武裝の援助、市街戰の經驗の研究、勞働者階級における最も必要な、初歩的な軍事知識の普及、秘密を保ちうる、地下的な、非合法的な、政府によつて禁ぜられた活動をなしうる同志の選擇の必要を認めた。すでに第三回黨大會において『プロレタリアートの武裝や、また武裝暴動およびその直接的指導の計畫の作成のために最も積極的な方策を取り、それがために必要に應じて黨の活動家より成る特殊なグループを作ること』が決議された。

軍隊、憲兵、警察との武裝的衝突に益〻屢〻移つたところの勞働者の示威運動は、武裝的抵抗を與へるやうな戰鬪部隊の創設をまた要求した。一九〇五年メンシェヴィキがペテルブルグにおける武裝メーデー示威運動へ呼びかけた時、我黨は、かかる武裝示威運動が當時の革命的情勢の條件の下においては無成果の爆發に、（ドイツ人のいふ如く）『ブッチ』に、我々が全くまだ準備されてゐない暴動の開始に不可避的に至ることを知つて、これに對して警戒した。一九〇五年の夏中我黨の諸組織は最大工業中心地における民兵の組織に關するこの準備的活動を行つた。モスクワにおいて、エカテリノスラフにおいて、ウラル地方において、暴動の開始に際して前衛となり、先頭部隊となりうるところの、その周圍に勞働者大衆が組織されうるしまたその後組織されたところの、かなり多數の民兵が作り出された。

黑百人組的虐殺はただ我黨のみならず、また自由主義的インテリゲンチヤをして學生その他の自衛民兵の組織に協力せしめた。『自衛民兵』はまた民族主義的諸組織によつて、例へば虐殺またはアルメニアにおけるダシュナクツテュン黨の暴行に對するユダヤ人の防禦のためにシオニストによつて組織された。

我黨は軍事的教官を養成する任務を提起した。ボルシェヴィキ中央委員會の下に技術グループが設立され、このグループは火藥や彈丸の製作所とこの軍事的＝戰鬪的行爲への勞働者戰士の教育を組織した。かくてこれらの製作所の一つにおいてクリヴォフ、スリモフおよびミハイロフ（『イギリス人』）が活動した。この活動を著しい程度にクラシンが指導したが、彼は中央委員會委員でありながらも、この時代にすべての我々の軍事的＝戰鬪的活動に非常に活潑に參加した。一九〇六年モスクワに軍事技術局が設立された。同じ局は南部にも、一時キエフにも存在した。我々はかなり多數の武器の輸送を組織した。この軍事的＝戰鬪的活動の資金は一部は革命の同情者の募集と寄附によつて、一部は往々かなり巨額に達したところの國庫金の收奪*によつて獲得された。かくて例へばコーカサスにおいては二十萬ルーブル餘、モスクワでは八十七萬五千ルーブルの收奪が行はれた。

* 收奪（エクスプロプリアチヤ）または『エクサ』と呼ばれたのは、民兵による貨幣または武器の武裝的奪取のことであつた。往々極めて通常の犯罪的强盜の襲擊が黨の收奪者の如くに見せかけて行はれた。

一九〇七年ロンドン大會において我々はすでに、革命の波の衰退、大衆的革命運動の衰微が存在することを考慮し、次の如き決議を採用した。『黨委員會の下に存在する民兵は、現在の條件の下においてはバルチザン鬪爭に參加しつつ、不可避的に閉鎖的な陰謀團に轉化し、廣汎な大衆か

ら分離し、そして墮落して、黨内へ解體を齎すであらう』と。

これは、我々が勞働者を戰鬪的精神で教育することを全く放棄したことを意味しなかつた。否、我々はたゞ新しい條件の下においては、『プロレタリアートの戰鬪的前衞を武裝暴動に準備する任務に最も適する戰鬪的組織の形態たるものは、現存する黨細胞の埒内における全黨員の軍事教育にあるところの黨民警制度である』ことを認めただけである。

黨とパルチザン鬪爭および收奪

大工業中心地においてツァール政府の力に對する先進的勞働者の武裝鬪爭が行はれた時代には、この鬪爭は勞働者、およびあちこちでは農民のかなり廣汎な社會を包括し、そして政府の手先——憲兵、警察、看視兵に對し、往々ツァール權力の一層大なる代表者に對して打擊を向け、往々最も憎惡された地主または資本家に對する經濟的テロルの性質を帶びた。黨はこの問題——パルチザン的革命的進出および大衆的テロルに對する自己の態度を決定しなければならなかつた。他方では、第一革命時代において我々は、革命的鬪爭の資金を獲得する目的での國庫金の收奪、會計課その他の機關の襲擊の多くの場合を知つてゐる。黨はまたこの事實およびこの鬪爭方法に對す

る態度を決定しなければならなかつた。この問題は特に十二月暴動の敗北の後、全面的に起つて來た。すでに一九〇六—一九〇七年『ボルシェヴィク』といふ署名でレーニンによつて書かれた論文『ロシアの現狀と勞働者黨の戰術』において、ウラヂミール・イリーチは、我々は暴動の問題を日程から除き去る根據を持たない、『我々は暴動の三つの分散的な急流——勞働者、農民および軍隊の暴動——を一つの戰勝的な暴動に遂に合流させることに成功するであらう、といふことについて絶望することはできないし、またはしてはならない』と述べて、戰鬪的民兵のパルチザン的進出の問題を特に詳論してゐる。

『もし我々が單に言葉の上で暴動について語らうと欲するのではなくて、プロレタリアートが暴動に眞劍に準備してゐることを認めたとすれば、我々は戰鬪的民兵のパルチザン的進出を阻止しないで、激勵しなければならぬ*』。

* レーニン、第九卷、二七頁。

ここですでに一九〇五—一九〇七年にレーニンによつて内亂の問題が提起されてゐたことを指摘することは重要である。

勿論パルチザン戰爭はあちこちで他の形の活動を解體せしめた。しかしレーニンが他の論文

『バルチザン戰爭』において述べてゐるやうに――

『……新しい危險および新しい犧牲と結びついたすべての新しい鬪爭形態は、この新しい鬪爭形態に準備されてゐない組織を不可避的に「解體せしめる」ものである……すべての軍事的行動は如何なる戰爭においても戰鬪部隊に若干の解體を齎す。このことから、戰鬪してはならない、と結論すべきはない。このことから、戰鬪することを習得すべきだと結論しなければならぬ。ただそれのみだ*』。

* レーニン、第十卷、八五―八六頁。

だから我黨もまた第一革命の全期間を通じてバルチザン的進出を一樣には見なかつた。

かくて一九〇七年、革命の波の衰退が明かに認められた時、ロンドン大會において、我々は大會に次の如く認めることを提議した――

『……(一)ロシア革命の現在の瞬間においては戰勝的全人民的暴動のための條件はまだ十分に存在しない。(二)經濟的および政治的危機の與へられた條件の下においては、廣汎な人民大衆の增大しつつある不滿は、最小抵抗線に向けられつつ、不可避的に、經濟的および政治的抑壓の直接的責任者に對する個々のバルチザン的行動の形態に流れ出るであらう*』と。

* 『全ソ聯邦共產黨決議集』、第一部、一一六頁。

かかる條件の下においてはバルチザン的進出が無政府主義的進出の性質を帶びるであらう、といふことを我は指摘し、そして大會にバルチザン的進出を望ましからざるものと認め且つそれに對して鬪爭を行ふべきことを提議した。

收奪に對する態度については黨內に意見の相違があつた。ボルシェヴィキが大衆的武裝鬪爭の時代に、收奪が黨中央機關の極めて嚴重な統制の下に行はれるといふ條件の下に、革命の目的のための國有財產の收奪を部分的に許されうるものと認めた時、メンシェヴィキは收奪に反對だと僞善的に聲明した。このことはメンシェヴィキの指導機關が收奪の場合に戰鬪組織員によつて奪取された金額を自己の組織の必要のために利用することを少しも妨げなかつた。我々はすでに、かかる場合に、收奪者および收奪された金額の支出に對する黨の極めて嚴重な統制がなかつた場所において發生した危險性を指摘した。收奪者のグループが大衆から分離し、黨組織から分離して、收奪によつて獲得された資金を自己の個人的必要に支出し、それによつて動搖的勤勞者層を革命的組織から押し退けた時、收奪が無政府主義的進出や匪賊行爲にさへも變質しうる――そして實際往々變質した――危險があつた*。

＊ かかる收奪を無政府のための闘爭と見て、その直接の説教を行つたあらゆる種類の無政府主義者が、特にこれを實行した。

實際、私的收奪を原則的に許され難いことと考へた、個々の社會民主主義者が存在した。けれどもメンシェヴィキが多數派であつた第四回ストックホルム大會においてさへ、『敵、卽ち專制政府に屬する貨幣の奪取のため、およびこの貨幣を暴動の必要のために使用するための戰闘的進出もまた許さるべきであり、そしてこの場合には住民＊の利益ができるだけ害せられないやうに、眞面目な注意を拂ふことが必要である＊＊』と認められなければならなかつた。

＊ 往々民兵の襲擊の場合や發生した交戰の場合には、偶々そこに居合はせた住民が死んだ、そしてこのことは激昂を喚び起し且つ大衆を革命家から押し退けた。

＊＊『全ソ聯邦共産黨決議集』、第一部、七二―七三頁。

この問題においてボルシェヴィキはヨリ注意深い定式化をさへ支持したと主張する場合、レーニンは無條件に正しい。收奪の必要を擁護した部分のボルシェヴィキは、かかる收奪が『たゞ黨の統制と資金を暴動の必要のために使用するといふ條件の下においてのみ許されうる』といふ定式を提起した。

テロルの形態でのバルチザン行爲についていへば、それは暴壓者および積極的黑百人組に對して、次の條件の下に推薦された、(一)廣汎な大衆の氣分を考慮すること、(二)その地方の勞働者運動の條件に注意すること、(三)プロレタリアートの力が無駄に費消されないやうに配慮すること。

失業者會議

ボルシェヴィキが失業者の大衆的組織を設立したこと、そしてペテルブルグにおいてその先頭に失業者會議を持つてゐたこの會議が、プロレタリアートの階級意識の發展のために非常に大なる意義を有したことを指摘しなければならぬ。メンシェヴィキは、かゝる組織の中に無政府主義的氣分が發展し始めはしないか、といふことを恐れた。だから彼等は失業者の組織に否定的な態度を取つた。セルゲイ・ペトロフ（ヴォイティンスキー、後にはメンシェヴィク）とセルゲイ・マルィシェフとが失業者會議を指導した。失業者會議は社會事業の組織と公衆食堂の組織とを達成し、そしてあらゆる方法で失業者を物質的および政治的に援助した。しかし我々は、この種の組織が資本主義社會における失業を絶滅しうる、といふことを決して大衆に吹きこまなかつた。我々はたゞ失業者の闘爭をすべての爾餘の勞働者大衆の闘爭と結合しようと志したにすぎない。失業者會議は

黨が勞働者大衆との連絡のために利用した合法的可能性の一つであつた。その存在中、ボルシェヴィキに指導された失業者會議は、この任務を遂行した。

黨の活動資金は何處から得られたか

勿論地下的活動の遂行には――ビラ、小冊子の印刷や、或る都市から他の都市への革命家の旅行や、武器の獲得やその他の黨組織の支出には――資金が必要であつた。この資金はどこから得られたか？　黨費は極めて僅かなものであつた。例へばバクー委員會では一九〇五年二月に全部でたゞ約三％が勞働者からの黨費であつた。實際、勞働者が組織員のかなりの分前を成した若干の他の組織においては、黨費が一層規則正しく入つた。かくて八月にリガのグループでは或地區では總收入の二二％、他の地區では四四％であつた。同じく勞働者的なイヴァノヴォ＝ヴォズネセンスクの組織は、資金の五三％を、ロッヅの組織『ブンド』は五〇％を黨費から得た。けれども大部分の組織は資金を黨費から汲取らなかつたことを指摘しなければならぬ。例へば、モスクワ委員會は、一九〇五年の前半期に、平均月收入四千ルーブル以上を示してゐる。バクー委員會は一九〇四―〇五年の冬、平均月收入一千ルーブル以上であつた。黨費の外に、同情者の中における特別の募集によつて資金を求めなければならなかつたが、この際募集は大部分たゞ勞働者の中のみならず、インテリゲンチャの中、學生の中、そして往々同情者の自由主義者の中でもまた行はれた。財政グループが特に組織され且つ選出されたが、それには革命に同情してある自由主義的ブルジョア社會と結びついた同志が入つた。夜會や、宴會や、集會において募集が組織された。個々の寄附金があつた。かくて大きな寄附金が一時マクシム・ゴーリキーを通じて我黨に入つた。黨資金の一部はこの時代にツァールの國庫金の收奪によつて得られた（ウファの收奪、ドゥシェットスクの收奪その他）。

勿論當時黨活動は全く異つた基礎の上に建設されてゐた。我々は我々が今日持つてゐるやうな黨委員會機構を持たなかつた――また持つことができなかつた。

黨員の殆どすべての活動は無報酬でなされた。自己の時間を全く黨の活動に割かなければならなかつた黨員でさへ、黨からは生活のために些細な資金を、往々生活のために一個月三、五、十、最高二十五―三十ルーブルを受取つた。大多數の地下運動者＝革命家は極度に資金に制限されてゐた。他の名前で生活することを餘儀なくされた多くの地下運動者＝革命家は、自己の住家を持たないで、一晩泊りで――今日は或る場所で、明日は他の場所で――生活し、そして査證を

受けなかつた。何故ならこれらの地下活動家における旅券は大部分贋造物であり、且つ極めて不確なものであつた、――贋造はいつも容易に暴露されえた。この旅券を供給するために、黨委員會の下に、中央部に特殊な旅券局が存在した。貨幣に代へて眞正の旅券用紙が買取られ、印刷が贋造され、或ひは案出された姓名が記入され、或ひは往々死亡者さへもの既存の旅券から寫し取られた。

第一革命時代における第二インターナショナルの日和見主義に對するボルシェヴィズムの鬪爭

一九〇三年ボルシェヴィキ黨の發生の瞬間から日和見主義とそれへの和解主義に對する國際的舞臺におけるレーニンの鬪爭は、特殊な激烈さを帶びてゐる。

すでに『何を爲すべきか?』のうちに原則的に基礎づけられた日和見主義者および中央派との分離、分裂に對する方針は、その最初の實踐的結果を與へてゐる。この方針は第二インターナショナルの『傳統』および戰術と決定的に對立してゐた。『第二インターナショナル時代の社會黨の型は、自己の黨内に日和見主義を我慢した黨であつた*』、そして第二インターナショナルの最も顯著な指導者の方針は常に意見の相違を圓滑にすること、種々の理論およびグループの『平和的存在』を基礎とする方針であつた。一九〇三年におけるボルシェヴィキ組織の設立は、第二インターナショナルにとつて全く新しい型の黨、眞に革命的、戰鬪的な黨、日和見主義者および中央派を一掃した、徹底的にマルクス主義的な、觀念的および組織的に獨自の黨の設立を意味するものであつた。この事實の巨大な國際的意義は非常に急速に暴露された。ロシア社會民主勞働者黨の分裂問題における第二インターナショナルの指導は、一致してメンシェヴィキ側に立つた。ボルシェヴィキは國際的舞臺において孤獨であり、敵意、不信および無理解に遭遇した。第二インターナショナルの新聞雜誌は、ロシア社會民主勞働者黨における情勢のメンシェヴィキ的説明を與へた論文を印刷した。カウツキーによつて編輯されたドイツ社會民主黨機關誌『ノイエ・ツァイト』は、ボルシェヴィキ(レーニン、リャドフその他)の論文を掲載することを拒絶した。カウツキーはボルシェヴィキに公然反對した。ロシア社會民主勞働者黨の分裂は日和見主義的傾向と革命的傾向との決定的な分界の端初を意味し、二つの異つたイデオロギーと二つの政策との衝突を意味するといふ問題を忘れて、カウツキーは分裂の中にたゞ組織問題に關する不一致の第二次的な規準を見た。個人的な爭鬪、ボルシェヴィキの、先づ第一にレーニンの『宗派主義的』非妥協性、――これが、カウツ

キーによれば、ロシア社會民主勞働者黨の分裂の原因であつた。カウツキーはマルトフによつて定式化された規約の條項に贊成して、第二回大會がアクセリロッド、ザスリッチおよびスタロヴェル（ボトレソフ）を『イスクラ』編輯部員に入れなかつたことに對して抗議した。

* レーニン、第十八卷、八六頁。

カウツキーに次いで左翼（バルヴス、ルクセンブルグその他）もまたボルシェヴィキに公然反對した。

エル・ルクセンブルグは『ノイエ・ツァイト』やメンシェヴィキの『イスクラ』に大論文を寄せ、その中においてメンシェヴィキ的組織原則に展開された基礎づけを與へた。トロツキー――アクセリロッドと完全に一致して、彼女はボルシェヴィキに喰つてかゝり、彼等を超中央集權と非難し、彼等はプロレタリア的方法によらないで、ジャコビン黨員（フランス大革命時代の小ブルジョア的革命家）や陰謀家＝革命家、即ちブランキーの追隨者の方法によつて黨を建設しようとしてゐる、と非難した。

當時ドイツ社會民主黨内において勞働者大衆の人氣ある指導者として評判を得てゐたアウグスト・ベーベルもまた、和解主義の外觀の下に、ボルシェヴィキに公然反對した。彼はボルシェヴィキとメンシェヴィキとの間の爭ひの解決のために『第三者の裁判』を組織することを提議した、第二インターナショナルにおけるかゝる裁判がメンシェヴィキのためになるであらう、といふことをよく知りながら。ボルシェヴィキ委員會局はこの裁判を激しく拒絶し、ただ黨大會のみがこの爭ひを正しく解決するであらうと述べた。レーニンは第二インターナショナルの日和見主義者、その日和見主義的指導部に激しい答辯を與へた。

一九〇五年のロシア革命は國際的舞臺におけるボルシェヴィズムの地位を大いに強化した。

『ロシアは帝國主義のすべての矛盾の結び目であつた。……ロシアは他のいづれの國よりも多く革命によつて懷妊せしめられた、そしてたゞロシアのみがこれがために革命的方法によつてこれらの矛盾を解決することができた*』。

* スターリン、レーニン主義の諸問題、八頁。

國際的革命運動の中心は帝國主義時代にロシアへ移つた。だからレーニンはすでに一九〇二年にロシアの勞働者階級の任務を、國際的革命的プロレタリアートの前衛となりうるしまたならなければならない國際的革命的鬪爭の部隊の任務として特徴づけたのだ。『歴史は今や我々の前に、――とレーニンは力説した、――他のあらゆる國のプロレタリアーのすべての當面の任務のうち

最も革命的であるところの當面の任務を提起した。この任務の實現、たゞヨーロッパ的反動のみならず、また（我々は今やいふことができる）アジア的反動の最も有力な要塞の破壞は、ロシアのプロレタリアートを國際的革命的プロレタリアートの前衞たらしめるであらう*』と。一九〇五年の革命はレーニンのこの豫見を輝かしく確認した。實際、ツァールの專制政治は革命によつて最後的に破碎されなかつたけれども、勞働者階級と革命的農民層との打擊を受けて、それは大なる震動を經驗し、勞働者階級によつて發展された革命的エネルギーは大なる力であり、形態および方法は大なる力を示して、一九〇五年の革命は世界的舞臺において、莫大な革命的役割を演じたほどであつた。その影響を受けて東洋における數億の被抑壓勤勞者が世界的革命鬪爭に目覺めさせられた（トルコ、ペルシャ、支那における革命）。その影響を受けて西歐における勞働者運動の波が高く打ち上げられた。强力な街上の示威運動、同盟罷業運動の未曾有の昂揚、ロシアのプロレタリアートの例に倣つて一層決定的な鬪爭手段に移行せよ、との黨指導部に對する廣汎な黨大衆の要求――それが一九〇五年の革命に對する西歐のプロレタリアートの回答であつた。この革命は、世界史上における新時代の到來を表示した。かくて一八七四―一九〇四年の舊い『平和』時代に代つて東洋における嵐の如き革命的震動と『ヨーロッパへのその逆の反映』の時代、『全世界における勞働者運動の强力な昂揚の時代』が到來した。

* レーニン、第四卷、三八二頁。力點は筆者のもの――ヤロスラフスキー。

一九〇五年の革命の影響を受けて、西歐の社會民主黨における日和見主義的要素と革命的要素との分界過程が强化され、そこにおける基本的方向の形成が促進された。黨の右翼、公然の日和見主義派は主としてロシア革命の革命的影響によつて不安を感ずるに至つた。彼等は黨および特に勞働組合において『革命的幻想』に對する精力的なカンパニヤを展開し、總同盟罷業の觀念に決定的に反對した。日和見主義の影響を受けてケルンにおける勞働組合大會（一九〇五年）は、勞働組合員に總同盟罷業の宣傳に從事することをさへ禁止した。

ロシアのメンシェヴィキは、ブルジョア民主主義革命と社會主義革命との間には必ずや一時代が横はらなければならぬ、これらの革命は互ひに『萬里の長城』によつて分離されてゐる、といふ理論を擁護しつゝ、この問題において國際的日和見主義の見地を擁護した。第二インターナショナルの黨はたゞ數十年も先きの可能性としてのみ革命を認めた。彼等は、社會主義が革命的震動や爆發なしに、社會改良によつて達成されうることを證明した。

實際においてこれはブルジョアジーとの協定の道であり、勞働者階級の革命的活動へではなく

て、ブルジョアジーとの協力への道であつた。

ドイツ社會民主黨の指導部は、一九〇五年の革命に對する自己の態度において、自己の日和見主義的、中央派的性質を明白に表はした。それは革命運動における新時代の到來と新しい、戰鬪的な黨の役割とを理解しなかつた。それはロシア革命のすべての國際的意義を評價しなかつた。ロシア革命の根本問題——プロレタリアートのヘゲモニー、上下からの革命の組織、武裝暴動の組織、暴動の一段階としての總同盟罷業、農民の獲得、前衛黨としての黨の組織等々——が、それと共に世界勞働者運動の最も重要な決定的な問題である、といふ事情は、中央派にとつては七つの封印の彼方にある書物であつた。それのみならず、舊い『何處までも合法主義』を守りつゝ、彼等はロシアの經驗を西歐のための模範として評價することに對してあらゆる方法で大衆に警戒させた。中央部が大衆の壓迫の下になしえた最大のことは、一九〇五年ドイツ社會民主黨大會が資本の攻勢の場合における防衛手段としておよび政治制度の民主主義化の鬪爭における攻擊的手段としての總同盟罷業に關する決議を採用したことである。けれども、言葉から實行に移るべき瞬間が到來した時、黨指導部は總同盟罷業を宣言することを拒否して、日和見主義的勞働組合指導者に降服した。一九〇五年の黨大會は日和見主義のこの勝利を定成化した。かくして一九〇五

年のロシア革命と關聯しての中央部の『左傾』は、言葉の上だけであり且つ極めて短期間であつた。

第二インターナショナルにおける左翼の形成は、一九〇五年の革命の影響の最も重要な現はれの一つであり、ロシアおよび國際的舞臺における日和見主義に對するボルシェヴィズムの鬪爭の直接の結果であり、ボルシェヴィキの全政策の影響の結果であつた。特にドイツの左翼（エル・クセンブルグを頭首とするところの）は革命中に自己のメンシェヴィキ的重荷の一部分から解放され始め、中央主義に對する（實際、極めて不徹底的且つ非決定的にではあつたが）鬪爭を開始した。一九〇五—一九〇七年のロシア革命中にエル・ルクセンブルグと彼女の支持者とは、ロシア革命の經驗の宣傳事業において、特に總同盟罷業とその實現のため、西歐の勞働者の決定的鬪爭方法への移行のための鬪爭との宣傳事業において、大なる活動をなした。けれども、同時に左翼のあらゆる不徹底さが現はれ、どれほど彼等がまだボルシェヴィズムから遠かつたかゞ暴露された。メンシェヴィキ的組織原則は左翼を捕虜にし續けた。自然發生的運動の前に叩頭しつゝ、彼等は革命的進出、特に總同盟罷業の組織における黨の役割を理解せず且つ過少評價した。總同盟罷業を宣傳しながら、彼等は、ボルシェヴィキがやつたやうに、罷業を暴動と結びつけなかつた。最後に一